

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』試訳（その一）

鈴木 満 訳・注

*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand, 1853. ; Reprint. Nabu Press.

初版リプリント。ちなみに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとヴァイルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag. 1981.
Vollständige Ausgabe, nach dem Text der dritten Auflage von 1891.

ちなみに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版(略称をGLとする)も参照した。

The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human Issues, Philadelphia. 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合は、ここには記さず、本文に注番号を附し、「DS***に詳しい」と注記するに留める。

5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。

6. 語られてゐる事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合に、些細に亘り過ぎる弊があろうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。

7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。

8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

*本分載試訳 (その一) の伝説

- 一 ドイツの大河ラインの話 Vom deutschen Rheinstrom.
- 二 スイスの民の起源 Des Schweizervolkes Ursprung. *DS514 Auswanderung der Schweizer.
- 三 聖ガルス Sanct Gallus.
- 四 聖カレンの修道士たちが祈りを捧げて葡萄酒を授かる Die St. Galler Mönche erbeten Wein.
- 五 ダゴバートの徴 Dagoberts Zeichen. *DS439 Dagoberts Seele im Schiff. / *DS440 Dagobert und seine Hunde.
- 六 テル伝説 Die Tellensage. *DS298 Die drei Telle. / *DS515 Die Ochsen auf dem Acker zu Melchtal. / *DS516 Der Landvogt im Bad. / *DS517 Der Bund im Rütli. / *DS518 Wilhelm Tell.
- 七 ルツェルンのホルント殺害の夜 Luzerner Hörner und Mordnacht. *DS519 Der Knabe erzählt's dem Ofen. / *DS520 Der Luzerner Harschhörner.
- 八 ホーエンザクスの殿たち Die Herren von Hohensax.
- 九 イーダ・フォン・テア・トングンブルク Ida von der Toggenburg. *DS513 Idda von Toggenburg.
- 一〇 ピラトゥスと群れなす小人 Der Pilatus und die Herdmandli. *DS150 Die Füße der Zwerge.
- 一一 獣と魚を守る山の小人 Die Bergmandli schützen Heerden und Fische. *DS302 Der Gämjäger.
- 一二 群れなす小人の退去 Die Herdmandli ziehen weg. *DS148 Die Zwerge auf dem Baum. / *DS149 Die Zwerge auf dem Felsstein.
- 一三 テトルスト Der Dürst. *DS 172 Der wilde Jäger Hackelberg. / *DS270 Der Türst, das Posterli

und die Sträggele. / *DS312 Die Tut-Osel.

一四 有翼龍たちと無翼龍たちの話 Von Drachen und Lindwürmen. *DS217 Der Drache fährt aus.

一五 ヴィンケルリープと無翼龍 Winkelried und der Lindwurm. *DS218 Winkelried und der Lindwurm. /

*DS220 Das Drachenloch.

一六 カステレン高原牧場 Kastelen Alpe.

一七 お花の高原牧場 Blümeis Alpe. *DS93 Blümeisalp.

一八 マッターホルンに現れた永遠のトタヤ人 Der ewige Jude auf dem Matterhorn. *DS344 Der

Ewige Jude auf dem Matterhorn. / *DS345 Der Kessel mit Butter.

一九 巖壁の聖母 Mutter Gottes am Felsen. *DS348 Das Muttergottesbild am Felsen.

二〇 動物たちの樂園 Das Paradies der Tiere. *DS300 Die Zirbelnüsse. / *DS301 Das Paradies der

Tiere.

二一 悪魔の橋 Die Teufelsbrücke. *DS337 Die Teufelsbrücke.

二二 牡牛の小川 Der Stierenbach. *DS143 Der Stierenbach.

二三 より良き石 Der Besserstein.

二四 十字架山 Der Kreuzliberg. *DS340 Der Kreuzliberg.

二五 骰子が原 Die Würfelwiese.

二六 バーゼルの時の鐘 Die Basler Uhrglocke.

二七 アウグスト近郊なる異教徒の洞窟の蛇と女 Die Schlangenjungfrau im Heidenloch bei August.

*DS13 Die Schlangenjungfrau.

- 二八 ベルンハルト公誓言を持つ Herzog Bernhard hält sein Wort.
 二九 忠実なエックアルトの話 Vom treuen Eckart.
 三〇 ツェーリンゲン家の起源 Der Zähringer Ursprung. *DS527 Ursprung der Zähringer.
 三一 巨人の玩具 Das Riesenspielzeug. *DS17 Das Riesenspielzeug. / *DS325 Die Riesen zu Lichtenberg.
 三二 墓蛙の椅子 Krötenstuhl. *DS223 Der Krötenstuhl.
 三三 粉挽き小屋の熊 Der Mühlenbär.
 三四 司教座聖堂王 Chorkönig.
 三五 聖オットーリーア Sankt Ottilia.
 三六 父と息子 Vater und Sohn.
 三七 大聖堂の時計 Die Münster-Uhr.
 三八 シュートラースブルクの射撃祭とチューリッの粥 Straßburger Schießen und Zürcher Brei.
 三九 ブレッテンの小犬 Das Hündchen von Bretten. *DS96 Das Hündlein von Bretta.
 四〇 トリフェルス Trifels.
 四一 カイザースラウテルンの赤髭 Der Rotbart zu Kaiserslautern. *DS296 Kaiser Friedrich zu Kaiserslautern.
 四二 舟に乗る修道士たち Die schiffenden Mönche. *DS276 Die überschiffenden Mönche.
 四三 シュヴァーベン録 Die Schwabenschüssel.

- 四四 シュパイアーの弔鐘 Die Tottenglocken zu Speier.
- 四五 ヴォルムスのユダヤ人たち Die Juden in Worms.
- 四六 ダールベルク一族の語 Von den Dahlbergen.
- 四七 ヴォルムスの象徴 Wormser Wahrzeichen.
- 四八 ラインの王女 Die Königstochter vom Rhein.
- 四九 オッペンハイム近郊のスウエーデン柱 Schwedensäule bei Oppenheim.
- 五〇 ジーゲンハイム Siegenheim.
- 五一 イエツッテの丘と王の椅子 イェツツェ・ヒルヘーネー
キーンニクシヒアローネー Jetten-Bühel und Königsstuhl. *DS139 Der Jettenbühel zu Heidelberg.
- 五二 聖カタリーナの手袋 St. Katharinen's Handschuh. サンクト
カタルィーナ *DS170 Rodensteins Auszug.
- 五三 ローデンシュタインの進發 Des Rodensteiners Auszug. *DS224 Die Wiesenjungfrau. /
- 五四 エーギンハルトとヒト Eginhart und Emma. *DS457 Eginhart und Emma.
- 五五 ヴインデック一族 Die Windecker.
- 五六 ロルシユのタッシロ Thassilo in Lorsch.
- 五七 鬼火 ヘーテウアイン Der Heerwisch. *DS277 Der Irrwisch.
- 五八 草地の乙女とへしやみ Die Wiesenjungfrau und das Nießen. *DS224 Die Wiesenjungfrau. /
- *DS225 Das Niesen im Wasser.
- 五九 沈んだ修道院 Das versunkene Kloster.
- 六〇 フランケンシュタインの無翼龍 フランク
シュタイン Der Lindwurm auf Frankenstein. *DS219 Der Lindwurm am

『ドイツ伝説集』試訳（その一） 鈴木 満 訳・注

Brunnen.

一 ドイツの大河ラインの話

聖なる川の幾多もが流れ出ずるは天の山並み——太古の神神の歌謡エツダはそう歌っている。ライン、祖国ドイツの聖なる大河も神の山（聖ゴットハルト）に源を発し、数数の氷の宮殿の中から、アルプスの懐の中から迸り下る。これは祝福の河である。この河については古人らも既にいわく「ドナウはあらゆる川の妻。されど、毅然としてその夫と名乗り得るはラインなんめり」と。——そして大河の畔に蟠踞していた原住民たちはその流れをしかく不可思議なものと畏敬したので、実の子か不義の子かを吟味するために嬰兒を水に委ねた。その生まれがしかるべき子なら大河の流れは優しく岸辺に運んだが、法に叶わぬ子であれば、河は怒れる復讐者にして不正の審判者たる荒波と激しい渦を起し、沈め、溺れさせるのだった。聖なる大河にその最も大切なものや駒を生贄にした民たちもあつた。高地ラエティアのアルプスの峡谷を通り抜け、潑瀾とした激しさで、ラインは何者にも束縛されずにのびのびと奔出する。その周囲に住むのは自由不羈の山の民である。彼らは重くのしかかる苛酷な負担の桎梏を昔日打ち壊した。かつてベーレンブルクのある城代は農民たちに豚どもと一緒に秣桶から食べるよう強いたし、またファルビュンのある城代は穀物の生えている農民の耕地に草食む畜群を追い込んだ。更にまた何人もがその他もろもろの悪辣な所業を働いたのだった。そこで高地ラエティアの男たち、灰色髻の老人らは寄り集い、灰色のアルプスの下で灰色の夜に方策を凝らした。トヴァノサから遠からぬ、周りを巖で囲まれたとある牧草地の巖の裂け目には、村村の最年長者である老人ら（「灰色の人たち」）が弁当袋を吊した掛け釘がまだに見つかる、とか。ついで彼らはブルンスの聖女アンナ礼拝堂の前の大きな科の木の下で、長老たちの慣わしに従い、野天で集会を開き、誓いを交わして同盟を結成した。この同盟にちなんでこの古い地方に新しい名が付けられた。すなわち

灰色同盟なる名である。山山と谷谷が存在する限りこの同盟を存続させよう、とて。——とところで、ラインの流れを、ひよろ長い坊さん小路だ、と揶揄したのは皇帝マクシミリアンである。河畔に夥しい、そして世にも名高い司教管区や大司教管区があつたからで。彼の言い種によれば、「クールは一番上手のご本山、コンスタンツは一番大きなご本山、してパーゼルは一番陽気な、シュトラースブルクは一番お上品な、シュパイアーは一番敬虔な、ヴォルムスが一番貧乏な、マインツは一番畏敬すべき、そしてケルンは一番金持ちのご本山」とのこと。

二 スイスの民の起源

昔、いまだスイスの地に人が住むことなく、耕作がされることもなかつた頃、東・西フリースラントとスウェーデンの地に遅しくかつ夥しい民がたむろしていた。そしてこの民に大なる飢饉と忌まわしい窮乏が襲い掛かつた。そこで各市町村は、自分らのところには人間が多過ぎるのだから、毎月一群の民がよそへ出て行くべきだ、それは籤で選ぶことにする、と決定した。籤に中たつた者は去らねばならない、さもなければ死刑にする、身分が高かろうと低かろうと、女であらうと子どもであらうと、と。これが実行されても依然として効果が見えず、窮乏に歯止めが掛からなかつたので、更に、毎週十人に一人が籤引きで退去を命ぜられることになった。この結果六千人のスウェーデン人が出発、千二百人のフリースラント人がこれに同行、何人もの頭領が任命された。その名はこうだつた。⁽⁸⁾ スイター、スヴァイおよびヨジウス、更にはまたネステイウス、ルモ、そしてラディスラウス。彼らは舟に分乗してラインを遡航、途中少なからぬ闘いを切り抜けた。遂に彼らはある土地に到達、そこはブロッケン山地あるいはブロッケン山地（ハルツ森にもブロッケン山なる場所があるが）というところだつた。同地で神は喜

びと安らぎを恵みたまひ、一同はここを開墾し、耕地を分配、営営と働いた。一部の者はプリユニク（ブルネット）に、またある者たちはアーレ川沿岸に移った。ハスレの町（現在はデンマーク領）から出立したスウェーデン人の一部はハスリを建設、そこに彼らの頭領ハシウスに従つて住みついた。ネスティウスは城塞ネスティをマイリゲンズの近くに建設、そこに居住。スヴァイとスイターはスイスとその地の民に総称を与えた。彼らはベルンの地をも獲得、信実ある、温順な民となつた。麻布の衣服を纏ひ、肉と乳と乾酪とで身を養つた。なにしろ果樹は当時まだこの地には多くなかつたからである。彼らは巨人のように逞しい人人だつた。力に満ちており、森を開墾することなど提琴^{ヴァイオリン}、弾きがその楽器の弓を扱うのと同様やすやすとだつた。こうしたことどもについてはいまだに古い唄が歌われている。すなわち、彼らの一部が頭領ラディスラウスとスイターに率いられてローマに向かい、闖入してきた異教の民相手の戦いでローマ皇帝を勇猛果敢に救援したしだい、二人の頭領が皇帝から軍旗——鷲と熊たち、赤十字、そして冠を戴く尾白鷲の上に白十字——を授与され、やがてこれらの軍旗を新しい故郷へと運んで行つたしだいを。アルプスの牧人たちは彼らの住みなす山並みで今も変わらず語り合つている。自分らの先祖がいかにこの国を移り動いたかを、そして、山並みに棲みついたのは谷人たちの居住よりも早い時期なることを。彼らによれば、後世の、より若い世代の者たちがようやくやく谷底を耕作するようになったのであつて、これはほかの山国でも同様だつた、ということである。

三 聖ガルス

もう早い時期にキリスト教はラエティアの山並みにまで達した。その名をルディウスと唱えるブリタニアのさる王子が海を渡つて来て、初めてこの国に福音を伝えた、という話である。グラウビュンデンとファドウーツ領（リヒテンシュタイン公国）との間の峠の隘路はこの王子の名にちなんでルティエンシュタインの山道と呼ばれている。次いでラエティアとヘルウエティアの使徒たる聖ガルスとその同伴者マンガルトおよびジークベルト——前者マンガルトはスコットランドのある王の子息——が聖コロンバヌスとともにボーデン湖畔に来て、数数の偶像を破壊し、異教を粉碎した。一同は敬虔な隠者として小屋に住み、病者を癒やし、福音を説いた。グンツォなるアレマン族の〔部族〕公が当時イブリンガといつていたユーバーリンゲンに住んでいた。その息女が重病になった。聖ガルスはこの姫を癒やした。その礼としてグンツォは聖ガルスとその同伴者たちに広大な森林山地を贈り、その所有地とした。ここで彼らはそれまでよりも豊かに耕作ができるようになった。この最初の入植地がのちにあれほど名高く素晴らしくなった聖ガレン修道院の源である。この修道院は一つの町と一つの地方全体にその名を与えたというわけ。けれども、聖ガルスは、まだこの現世での生活を送つていた時、たえず隠者暮らしで過ごしたわけではなく、ジター川に沿つて高地へ高地へと登つて行き、適当な場所に新たな庵室を結び、牧人の民を教化した。こうした庵室を牧人たちは修道院長の庵室と呼んだ。それがアペンツェルという名の由来である。牧人の民は進んでキリスト教を受け入れたが、後代この強大な修道院が彼らの自由を脅かすようになると、闘いのために蹶起した。聖ガレンの修道院長はオーストリアに救いを求めた。しかし、高地の堅固な城塞ヴェルベンベルクに居を構える高貴な伯爵の子息ルードルフ・フォン・ヴェルベンベルクが、アペンツェル地方の牧人たちに味方し、彼らを率い

て聖ガレン修道院との戦闘に入った。シュトース川の畔で壮絶な会戦が行われ、長いこと勝利はどちらのものとも決着がつかずにいたところ、突如山を越えて膨大な数の軍兵が牧人たちの救援に駆けつけた。——アペンツェル軍の敵方はこれを目にとると、蒼惶として戦場から逃走した。さりながら、このように出現し、その姿を遠望させることによつて敵勢を追い散らしたのは、決して戦士などではなく、男の装いをした牧人たちの妻や娘らだったのだ。それ以来、ちっぽけなアペンツェル地方は聖ガレン修道院領の真っ只中であつて自主独立を維持、自治を行つた。



Die St. Galler Mönche erbeten Wein.

四 聖ガレンの修道士たちが祈りを捧げて葡萄酒を授かった話

なくてはならぬ葡萄酒フワインに関してかの堂堂たる聖ガレン修道院ザラクトに重大な懸念が生じたことがある。折しも早魃かばつの年となり、その上これまで長年の間補充も一向はかばかしくなく、さしも広大な修道院の酒蔵に貯えられているのはあと僅かオーム⑨入り樽たるが二つというだけとあいなつた。これではおそろくどうしたつて足りっこないし、そうなつたら敬虔けいけんな神父あつたちに、葡萄酒フワインが欠乏するといふまつこと恐るべき時節が到来したことであろう。そこで神は、一人の信仰篤あつくかつ聖なる御仁、古き都市アウクスブルクの司教たるアーダルリヒの心に働き掛けられた。かくして司教はこれまた同様信仰篤あつい聖ガレンザラクトの神父たちのためシユテュック樽⑩まるまる一杯の葡萄酒フワインをその修道院に贈呈した。ところが、樽たるが途中ラインで溺れてしまつた、との知らせが聖ガレン修道院ザラクトに齎もたらされた。ポードン湖ゼンの近くで河に架かつた急勾配の橋の上で御者が輓馬ばんばをあまりにもきつく駆り立てたので、荷車の車軸が折れて、樽たるが渦の中に転落した、というのである。いやはや、なんとも一大事。修道院長は時を移さず修士会を招集、ほどなく十字架と幾旒りゅうもの教会旗、それから聖人画の教数を掲げた行列ザラクトが、聖ガレン修道院からしつしつとまかり下り、渦の傍らで聖歌を歌い、祈りを捧げ、跪ひざまずいた。僧院の酒蔵管理係が何人かで、幸いにもまだ壊れずに、渦の中でびよこびよこ跳ね回つていたその樽を、綱を投げて捉えようとしたり。渦がなかるものなら、シユテュック樽はとつくにポードン湖へと流されてしまつたことだろが、そこにちゃんと見えていたわけだ。渦というものとはときどきさうした役に立つ。少なからぬ苦勞をしたあげく、聖人様がたの祈りと執り成しのもと、シユテュック樽は首尾良く岸辺に引き寄せられた。そして今度は花環はなわで飾られ、意気揚揚と修道院へ運ばれて行き、そこで「主デー・デウムなる神よ、我ら汝ラウダを讃プームスえん」の聖歌と数多くの神への献酒で感謝祭が祝われた。

これはまこと本當に起こったことである。けれども、聖ガレンサン・ガレンの修道院長と皇帝の三つの質問に関する「世にもおどけた小嘶こばなし」⁽¹²⁾は決してここが舞台ではなく、アルテングラントのケンテルブリー修道院長に纏まつわるもので、文人の口を通じてドイツの地に広まったに過ぎない。

五 ダゴバートの徴しるし

昔フランク王国にダゴバート(13)なる王があった。クロタールの子息でアウストラシアの君主だった。ダゴバートの事績については今もなお数多くの語り種くぐが伝説となつて生きている。ザクセン族に対して何度か大規模な戦いくさを行つたが、その折も公正かつ寛大だった。動物を相手にしてすら情が深く、彼についてこんな諺ことわざが民衆の間に広まつた。「食事を済ませたダゴバート王は飼かい犬たちにも餌をやる」と。別の話だが、臨終の床で王は飼かい犬たちに向かつてこう言つた、との噂がある。「良い犬どもだ、おまえたちは。したが、人生には見捨てたり、別れたりしてはならぬほど良い仲間などおりはせぬ」と。執り行つた遠征の数で王はスイスのアルプス地方にまで到達した。そして特にライン河谷ライン・タルと呼ばれている地域まで来ると、その谷の巖巖いわいわに大きな半月の形を刻み込ませ、彼の領国の境界の徴しるしとした。

良き王ダゴバートが死に至つた時、悪魔が王の魂を引ひつ掴つかみ、一隻の船の上へ連れて行き、彼を乗せて出帆した。これは主なる神が定めたもうたことだった。王はまだ浄められておらず、もろもろの罪から救われていなかったからである。けれどもダゴバート王は聖者ディオニュシウスを友としていた。こよない愛犬たちのお蔭かげでかつて王はこの聖者の遺骨を見つけ出し、聖者を常に極めて高く尊崇していた。お返しに聖者もまた絶えず王を庇かばい護つ

たのである。そこで、ダゴバートが物故すると、聖者は主なる神に、王の魂を救つてもよい、とのお許しを願ひ、これが嘉納かのうされると、他の聖人がたと天使たちと連れだつて、悪魔がダゴバートの魂と一緒にいる海原のかの船へと向かつた。船上で天使、聖人側と悪魔どもとの間に王の魂をめぐつて苛烈な闘いが始まり、前者が勝利者として留とどまつた。かくしてただちに天使たちはダゴバートの魂を久遠くおんの恩寵の懐へと運び、一方聖人がたは天国へと戻つて行つた。

六 テル伝説

スイス国の歌謡と年代記はかのテル(14)を苛酷な圧政からの解放者、スイス人の自由の創始者として誉め讃えている。そして彼の名声はあらゆる地方に響き渡り、永久とこしえに生き続け、消え去ることはない。

オーストリアのアルブレヒト皇帝(15)が治めていた時代のことである。彼は厳しくかつ激しい気性の支配者であり、その領国を増やそう、と試み、スイスの土地の都市や町、城塞を数多く購入、これらにアルブレヒトの名の下で統治する代官(16)を置いた。ところが三つのスイスの町と周辺地方はオーストリア人と一切関わり(17)を持つとしない。そこで皇帝は彼らの許もとに二人の高貴な使節、すなわちリヒテンシュタイン殿とオクセンシュタイン殿を派遣した。両人はこれらの地域の住民に次のことを伝達しなければならなかつた。「そなたらはなんとしてもオーストリアの庇護ひご下に入らねばならぬ。そうすれば、全世界とも拮抗きつたうし、これをものともしないでおられよう。しかしながら、そなたらがこれを肯んがえんじず、オーストリア人の敵に回るとの意向なら、オーストリア側から何も良いことは期待せぬように」と。けれどもシユヴェイツの男たちはこう述べた。「ご両卿、我ら、満腔まんこうの敬意を捧げ、オース

トリア家のお為を計らい、またお役に立つにやぶさかではありませぬ。されど我らはいまだかつて一度たりともごぞの公侯に侵害されたことのない昔ながらの我らの自由を保持する所存」。——この会谈後使節らは急いで出発、ウーリとウンターヴァルデン指してまっしぐらに馬を駆った。そこなら自分たちは花嫁のごとく迎えらるるだろう、と思つて。が、とんと当て外れだった。なにしろ、三つの邦はその前に既に同盟を結んでおり、一致団結して行動しよう、と誓いを交わしていたからである。三邦の人人はこつても言った。「我らが自由はホーエンツォレルン家の皇帝フリードリヒとハプスブルク家の皇帝ルードルフから特許状で保証されているのだ」とも。かくして両使節は目的を果たせずに引き揚げたしだい。その後ほどなくオーストリアのアルブレヒトは二人の代官を送つた。その名はグリスラー及びランデンベルガーといった。二人のうちグリスラーはシュヴィーツとウーリの、一方ランデンベルガーはウンターヴァルデンの領地管理官となるよう、しかしながら、当初は優しく穏やかにふるまえ、うまく行けば納得ずくで民の心を動かせるかも知れないから、との命を奉じていた。けれども民は心動かされずじまいだった。すると代官たちは、農民をありとあらゆる塗炭の苦しみに陥れるよう、指令を受けた。これが実行されると、民はアルブレヒトに嘆願の使者たちを送つたが、皇帝は目通りを全く許さなかつた。そこで使いの者たちは皇帝の国政顧問官らの許に行き、穏やかかつ真摯に、なにとぞ代官たちの専横搾取を制止し、彼らが新たな前代未聞の課税で民を抑圧するのを妨げていただきたい、と請願した。しかし国政顧問官らのいわく「あらゆる災厄に責めを負うべきなのはそのほうたち自身である。そのほうたちはなにゆえ我らが主君のご仁慈とご庇護を受けようとなないのか。そうすれば、そのほうたちは安息と平和を得るものを」と。——かくして使節団は絶望して悄然と帰り、同郷人らに使命が果たせなかつたことを伝えた。

そのころウンターヴァルデンについて曲がつたことをしたためしのないきわめて誠実な男が住んでいた。彼はと

りわけランデンベルガーの憎しみを買っていた。その名はハルデ河畔のメルヒ谷タールの住人ハインリヒといった。ザルネン城主となっていたランデンベルガーは、このメルヒ谷タールの住人の牡牛おうしたちを犁すきから解き放はなて、との厳命18を帯びた家来を一人彼の許に遣わした。家来はただちに言い付けに従い、この男の牡牛たちを犁すきから外して連れて行こうとした。しかしメルヒ谷タールのハインリヒは言った。「止めろ、わしの牡牛たちは手放さなぬぞ。このわしが罰せられるようなことをしたのであれば、法廷に召喚して裁くべきだ」。——家来が言うよう「百姓、おれがすることはご主人のお指図なのだ。その理由はご主人自身に問うがよい。おまえたち百姓は充分自分で牡牛になれるではないか。¹⁹自分で犁を牽ひけばよいわさ」。——こうした無礼な言ことばい種くさを聞いた老人の息子でアルノルトという青年はすぐさま棍棒こぼうを手に取り、ランデンベルガーの家来の指を一本へし折ったので、こちらは牡牛の解き放はなちができなくなつた。家来は逃れ去つてこの行為を代官に告げ、一方メルヒ谷タールのアルノルト青年はウーリ目指して落ち延びた。ランデンベルガーはすぐさまメルヒ谷タールのハインリヒを自分の許に連行させ、この老人の息子がどこに身を寄せているのか訊ききだそうとした。息子がどこに隠れているのか、老人に答えるつもりがなかつたのか、それとも知らなかつたのか、ランデンベルガーは老人の両の目を抉えぐり取り、その土地を没収、不幸のどん底に突き落とした。ランデンベルガーはロスベルク城に管理官20を置いていた。その名はフォン・ヴォルフエンといったが、この男も迫害者の一人だつた。フォン・ヴォルフエンはバウムガルテンのコンラートの住まいにやつて来た。ところで遇あつたのは——実は百も承知の上だつたのだが——主人ではなく、こやつがかねてから殊の外情欲を燃やしていたその温良で美貌の妻の方だったのである。で、馬から下りながらこの女性に声を掛け、浴用11の大桶バを探して風呂の仕度をしてくれ、馬で強行軍したので暑くてたまらない、と言つた。さて、こうして風呂に入ると、女性を手招きして、一緒に入浴するよう誘つた。こちらはそれに靡なびく風情ふうせいを見せ、その前に下裳スカートを部屋の外で脱いでくる、と称して、相手

を桶おけの中に坐まらせたまま、すぐさま夫が木を伐きつている近くの森へ走った。亭主はちよほど仕事じまいをしたところで、斧おのを提おげて向こうからやって来た。そして妻の危急の訴えを聞くと、「風呂風呂に浸ひかっているやつのために風呂を祝福してやろう」と言いい——近道を取り——女房を待ち焦こがれてまだ浴槽の中にいたヴォルフエンの脳天目掛めがけて斧を振り下ろしたので、頭は真まつ二つになった。

ウーリ駐在の代官グリスラーはアルトブルクを見下ろす丘陵の上に「ツヴィング・ウーリ・ウンター・デイー・シユテゲン」〔②「ウーリを叩たたいて躡しづしろ」と命名されるはずの城塞を新たに着工、ますますこの地の民を苦しめ、挑発てんぱつし始めた。そして己おのがあらゆる民に憎にくまれてることを知しっており、自分に対しすでに何か陰謀が企くまれてるだろう、と推量すいりやうしていたので、だれもが通り過ぎるとある広場に高い棹さおを立てさせ、天辺てんぺんに帽子を一つ掲かげ、これが代官その人であるかのように、何人なんびとたりとも背を屈まめ脱帽だつぼうして、この帽子に敬意を示さねばならぬ、と命令、そうせずに敬礼を拒くむ者がなかどうか、ひそかに様子を窺うかがわせた。その後彼はシユヴィーツに騎馬きまで向かい、途中シユタインを通り掛かかった。ここに一人のごく実直な男が住んでおり、名をシユタウフファツハーのヴェルナーといった。古い家のあつた場所に新宅を建ててまだ間もなかつた。さて、代官は馬でこの家の前を通り掛かり、「この家はだれのものだ」と訊きねた。シユタウフファツハーの男は、大いに鄭重ていじゆうにふるまおう、と考え、自分の家だ、と言いわず、こう返答したものである。「我が皇帝陛下と、代官様、あなた様のものです。わたくしはこれをあなた様から拝領はいりやうしておりますので、どうかお入りになりませぬか」と。——ところが代官はシユタウフファツハーの男に向かつて頭あたまごなしに怒鳴りつけた。「余よは当地にあつては皇帝のご名代じゃ。きさま、かような家を建てる許もとしを求めおつたか。いいや、求めておらぬわ。いいか、余はそれをきさまに禁いずるぞ」。——こう言い捨すてるなり、傲然ごうぜんと駒こまを進めたものである。シユタウフファツハーの男はこう言われてひどく悲しんだ。しかし彼の賢

い妻はこう慰め励ました。この土地のそこかしこでこんな仕打ちが行われているのではないかと、と余所よそのお友だちに訊き合わせてごらんなさい。そして事態が変わるように皆さんと相談するのですよ、と。そこでシユタウフファツハーのヴェルナーはウーリのある友人の許へ出掛けた。その名はヴァルター・フェルストといった。そこでヴェルナーはメルヒ谷ゲルのアルノルトにでくわした。アルノルトはまだ逃亡中だったのである。三人は協議して、更に何人か他の誠実で信頼できる男たちを捜し出し、代官連の圧政に対抗する同盟を結成しよう、と一決した。この計画はみごとに成功、秘密の大同盟が生まれた。これには騎士の家柄に属する者たちも数多く加わった。というのも代官連は彼らにも敵対的態度を示し、百姓貴族、乳搾り騎士呼ばわりをしていたからである。次いで同盟の男たちは仲間内から十二人を頭役に選んだ。頭役たちはとある草原に集まり、自分らの案件を討議した。この草原はファイアヴァルトシユテッター湖ゼー湖畔のリュトリにあるのがそうだ、ということになっている。ウンターヴァルデンの衆はこう勧めた。まだ行動に出ないで時節を待つべきだ。ザルネンやロスベルクのような要害堅固な城地を迅速に占拠するのは難しいからである。これらの城郭を包囲攻撃しようとすれば、皇帝は派兵のための時間稼ぎができて、その軍勢は我ら全てを撃滅するだろう。これらの城は計略を用いて手に入れ、武装して抗戦する者以外は一人も殺さず、他の者たちには自由に退去することを認め、しかるのち砦とりでを根こそぎ破壊する方がよい、と。男たちがこのように会合し、誓いを立てて大同盟を結成した時、草原から幾つも聖なる泉が湧き出た。

そうこうするうちこんなことが起こった。ウーリのある男でヴィルヘルム・テルなる者が数回うっかり例のグリスラーの帽子の傍を通りながら、これへの表敬をしなかったのである。このことを告げられた代官が彼を連行させると、テルはこう言った。「わたしはがさつ者の上、この帽子がそんなに大事なものとは思いませんでした。これまででも特別これに気をつけたことはございませんでした」と。——代官はかっとなり、テルの愛児を連れて来させ

て、いわく「きさまは射手だな。そして弩いしゆまと箭やを所持しておる。このきさまの子どもの頭から林檎りんごを射落としてみよ」と。——テルは驚愕して言った。「わたしは射たりはしない。わたしの命を取るがよからう」。——「射るのだ、テル」と代官は叫んだ。「さもなければ余はきさまの子どもを刺し殺させ、そのあとできさまもそうさせるぞ」。そこでテルは胸うちの裡うちで、我が手を導きたまえ、加えて我が愛いとし子の頭こゝろを護りたまえ、と神に祈った。少年は静かに落ちて立ち、震えもしないでいた。そしてテルは箭を放ち、林檎に命中させた。民衆は高らかに歓呼の声を挙げ、名射手テルを囲んで凱歌がいを奏した。そこでますます憤ったグリスラーは、袖無し上衣の背にもう一本箭を入れていたテルにこう怒鳴りつけた。「きさま、もう一本箭を持つておるな。もし子どもに中あててしまつたら、どうしたか、申せ」。——テルは「これは射手の慣なわしでございます」と答えた。——「いいや、それは逃げ口上だ、テル」と代官は応酬。「腹藏なく申せ。きさまの命は保証する」。——「さてさて、どうしてもお知りになりたいなら」とテルは言った。「また、わたしの命を請け合つてくださるなら、それなればお聴きあれ。わたしが子どもを射てしまつたら、これなる箭が殿を外すことはありませなんだ」。——「いや、ここな大悪党めが」と代官は叫んだ。「命こそ保証はいたしたれど、体の自由は請け合つておらぬぞ。余はきさまを日も月も照らしてくれぬところへぶちこんでくれるわ」。こう言い放つやいなや、家来たちに、テルを縛むめて自分の舟に運ぶよう命じた。グリスラーはこの舟でウルナー湖ゼーとフイーアヴァルトシュテッター湖ゼーを渡り、ヴェギスからキュスナハトへ騎馬で行くつもりだった。すると主しゅなる神は暴風と猛烈な雷雨を起こしたもうたので、波浪がどんどと舟に打ち込んで来た。舟人ふなびとらは代官に、テルが舟を操るのに掛けてはこのうえもなく練達れんたつであり、まだ助かるものならば彼だけが一同を救える、と告げた。そこで代官がテルの縄目を解かせると、テルは逞たくましい両腕かひで權かゝを漕こぎ、小舟をシュヴィーツの土地がだらだら下りになつて右手の岸边に寄せた。そこには平らな巖鼻いわが湖に突き出していた。テルは自分

の弩と箭をさつと擲み取るなり不意にこの巖の上へ身を躍らせ、小舟を力一杯突き放し、浪に押し流されるままにした。これにびっくり仰天した代官とその部下たちを尻目に、テルは勝手知つたる小径を辿り、足早に逃げ去つた。舟に残された者たちがラウベン近傍まで漂つて来た時、嵐は収まったが、それでもグリスラーはブルンネンに舟を着けさせた。湖の猛威に怯えたからである。テルはといえば、湖周辺の幾つもの峽谷を一望できる高みの山の小径をあちこち歩き回りながら、代官一行がどこへ向かうか見届けた。アルトとキユスナハトの間は一筋の狭い谷間の路となるが、テルはそこで代官を待ち伏せした。そしてこの隘路を代官が騎馬でやつて来ると、例の取つておいた箭で相手を馬から射落とした。さながら獵師が山猫かなにかを木から射落とすように。これをし遂げるとテルはそつとそこから姿を消し、夜の闇に紛れてシュヴィーツの邦はシュタインなるかのシュタウフファッハーの家の向かい、それから山並みを抜けてウーリなるヴァルター・フルストの許に急ぎ、いかなることがいかように行われたか、そして今こそ戦を始めて余所者に掛けられた軛をかなぐり捨てる時であることを、一同に語つた。新しい年の到来までもはやさして間のない頃のことだつた。というのも同盟がリュトリで会合を開いたのが既に冬月だつたので。さてまずロスベルク城がウンターヴァルデンの衆によつて謀りごとを用いて占拠され、それからザルネンが刃に血塗ることなく落ち、代官たちの部下は全て復讐断念誓約を立て、二度と再びスイスの地に足を踏み入れない、と宣誓しなければならなかつた。次いで国境いの向こうまで護送されたのである。まだ竣工していなかつたツヴィング・ウーリの城塞は前記二城と同様破却され、ヴェルナー・シュタウフファッハーは湖の中へ突き出して建てられていたロウヴェルスの城を打ち壊した。

皇帝アルブレヒトはこうした顛末について逐一報告を受けると、激怒し、スイス人を膺懲せんものと軍勢を編成した。しかしながらこの行軍の途中、アールガウを抜け、ブルックを直指していた時、実の甥であるシュヴァー

ベン公ヨーハンによってケーニヒスフェルデンからほど遠からぬところで弑逆（25）された。かくしてスイス人は平和を擁護したし、今日に至るまでその自由を保有している。これがスイスの盟約とテルの事績に関する伝説である。後者は歴史の花冠に一輪のアルプス石楠花（26）のように編み込まれているに過ぎないが。首尾良い結果に終わった矢の射撃についての言い伝えはデンマークにもあり、昔の移住者たちが北国からかつて持ち込んだものが装い新たにお目見えした、ということもあり得ないわけではない。さよう、シュヴィーツの衆、ウンターヴァルデンの衆、それからウーリの衆の同盟——次いでこれにチューリヒ、ルツェルン、ツーク、クラールス（「グラールス」、フライブルク（「フリブル」）、ゾロトゥルンが加わり、最後にシャフハウゼンとアペンツェルが続いた——の最初の三人の設立者は昔も今も民衆に三人のテルとして通っている。彼らはキュフホイザーなる皇帝フリードリヒやウンタースベルクなる皇帝カールのごとく、とある巖窟（27）の中で魔法を掛けられて眠っているのだ。万一祖国スイスが危急に陥ったら、この三人のテルはその巖窟から現れて、再びスイスを解放するであろう。彼らが眠る洞窟へ至る道はだれも知らない。ただかつて迷子になった山羊（28）を捜していた一人の牧人がたまたまとある洞窟に行き当たり、そこに三人の男たちを見つけた。すると一人のテルがまどろみから覚め、こう訊ねた。「世間では何時だね」と。——「真昼刻（29）」と牧人は答えた。「それではまだ時節ではないな」とテルは言い、横になって再び眠りに落ちた。その後その洞窟を発見した者はいない。

七 ルツェルンのホルンと殺害の夜

スイスの民が立ち上がり、抑圧者に対し闘いを挑んだ時、彼らはさまざま軍用の楽器を用いた。ウーリの衆に

はウーリの牡牛おうちしと呼ばれる男がいたが、彼は銀の箍たがが付いている巨大な古式ホルンを吹奏した。これは歌口くさびに楔を打ち込むと、大酒杯とすることができた。ルツェルンの衆は古代ローマ軍が使ったような青銅のホルンを幾つも用い、硬雪ハルシュホルンと称した。これらは、ルツェルンの軍勢がカール（＝シャルルマーニュ）王とともに、英雄ローラント（＝ローラン）が殲なほれたあのロンスヴァル（＝ロンスヴォー）の会戦で戦った折、王から貸し与えられたものである。

スイスが蜂起した頃のこと、ルツェルンにはいまだにオーストリア側に好意を抱いている党派があり、彼らは短上衣に赤い袖を付けてお互いを識別した。この者たちは仕立職組合集会所シュナイダーツフツヴェトクレーベの角にある大きな飛梁とびりょうの下で集会し、真夜中頃盟約者団くみに与する者全てを不意打ちにし、殺してしまおう、と申し合わせた。物乞いの少年が一人これを聞いてしまったが、発見され、黙っていないと死ぬことになるぞ、と脅された。そこでやむなく、だれにもこの計画をしゃべったりしない、と誓いを立てなければならなくなった。少年が肉屋組合集会所フラットシットツェルに行くと、そこではまだ数多くの職人たちが酒盛りをしていた。そこで少年は「陶製」燧だん燧らん（の周りに造り付け）の腰掛けに寝転がり、吐息といきをつきつき、こう歌った。

聴いてくれるや、燧燧や、燧燧。どうしても、おまえに言わねばなんね。

おいら、誓いを立てたでよ、人にかあだれにもしゃべらねて。

十二時打つたら備兵よへいどもがだれかれなしに殺すだよ。

みんなぶつ殺してしまふだよ。

杯を挙げていた連中はぴんと聴き耳を立てた。それから一人がすぐさま市庁へ、一人が十二時の鐘を打たないやうに鐘撞き男の許へ、三人目と四人目と五人目は各種組合ツンフトに走って、赤外套たちを出し抜いた。⁽²⁷⁾その後例の少年の肖像画が肉屋組合集会所の煖炉の後ろ側に描かれ、長いこと目にする事ができた。

八 ホーエンザクスの殿たち

アルトマンベルクとホーエンゼンティスの近傍とライン河谷タールの間にホーエンザクス男爵一族累代の古城がある。男爵の一人ハンス・フィリップは雄雄しい英傑で、ネーデルラント（「オランダ」）にも出征してかの国の自由のため共に剣を執ったし、新教徒であり、あの異端迫害が始まった時ちようどフランスに居合わせた。パリの血みどろの婚礼(28)からやつとの思いで逃れたものである。このホーエンザクス男爵はスイスとシュヴァーベンの宮廷恋愛歌人が作り、かつ歌った古謡を大層尊び、それらの内でも、ドイツ詩歌の誇りであり、しかしながら今はフランス人の手に落ちてきているかの貴重な書を所有していた。この書は以前にフランス軍がドイツから劫掠きやうりやくしたものだ、二度と再び返してよこすことはない。絶好の機会があったのに、取り戻そうとしなかったからである。件の古い歌書を大層尊んでいたホーエンザクス男爵だが、この人を——— 信教のゆえだ、という者が少なくない——— その甥ウルリヒ・ゲオルク・フォン・ホーエンザクスが殺害するという事件が起こった。これは一五五九年のことである。その後この書は不朽の古きドイツの歌謡蒐集と共にプファルツ選帝侯クイフェルシュトの入手・愛蔵するところとなってハイドルベルク行きとなり、この地からやがてフランス軍によって奪い去られたしだい。ところで殺害された男爵の遺骸には世にも不思議な現象が生じた。ゼンネヴァルトの教会に葬られた際腐敗していなかったのである。これを

教会周辺の住民は常ならぬ徴しるしと見なし、故人が全くの新教徒だったにも関わらず、多分聖者だったにちがいない、と考えた。彼らは先ず遺骸の指を一本、それから更に何本も手に入れた。果ては遺骸全体が持ち去られた。故人の昔の歌謡蒐集とまさに同じく。ただし異なるのは、ゼンネヴァルトの市民たちがホーエンザクス男爵の遺骸返還の訴訟を起こしたので、これをまた元へ戻さねばならなくなったこと。今日でもこの町の教会には遺骸が木乃伊となつて置かれている。——これより以前やはりこの高貴な一族の男爵が一人ホーエンザクスに住んでいた。彼にはある代物がくつついていた。これはああした巖いわだらけのアルプスの谷谷には珍しくない一件で、この肉体の一部は男爵の躑つまずきの種しづく〔「瘰癧しづくの種」〕だった。しかしなんとしてもこれを、聖書の命ずるよう(29)に、抉えくり出して棄ててしまえないでいた。さて彼は闘いにおもむき、猛烈な合戦の最中一騎打ちとなり、敵に剣で斬りつけられたので、頸くびから鮮血りんりが淋漓はとほと迸ほとほつた。けれどもこの敵の一撃はこよなくありがたいものだった。お蔭かげでホーエンザクス男爵の躑つまずきの種しづくだった肉体の一部が切り飛ばされたのである。——彼の甲状腺腫(20)が。

九 イーダ・フォン・デア・トッゲンブルク

ポーデン湖からライン上流へと遡さかのぼるとトッゲンブルクがある。これはその名を名乗る伯爵たちの往古の居城である。かしこにイーダなる敬虔な伯爵夫人が住んでいた。彼女はキルヒベルクの伯爵の一族の出であった。ある日のこと、こんな椿事ちんじが起こつた。奥方が結婚指環ゆびわを開いた窓辺に置いたところ、陽の光がこれに当たってきらきら燦きらめいた。一羽の鴉かみすが指環を見つけ、さあつと翔とんで来て、嘴くちばしにくわえ、己おのれの巢ねへと持ち去つたのである。伯爵の奥方は指環が失くなったのに気づきはしたものの、指環の喪失を告げたら、気性の激しい夫がさぞ怒るだろ

う、と心配して、これを黙っていた。その後しばらくして一人の獵師あるいは従者が森で例の鴉の巢を見つけ、巢の中に奥方の指環があるのを発見した。この男は、指環がだれのものか知らぬまま、自分の指にそれを嵌め、何の頓着もせず身に着けていた。伯爵はそれを目にし、下僕の指にあるのが自分自身が妻に与えた指環だ、と分かつて、妻が不義を働いた、と思い込んだ。そこですぐさまその罪もない若者を一頭の悍馬の尾に括りつけ、城門から下る巖だらけの大手の道を引きずらせて死に至らしめ、これまた同様全く無実である奥方を居館（パラス）の張り出しから木の生い繁った谷底へと投げ落とした。しかし天使たちが無垢潔白の庇護者となったので、イーダは目には見えぬ何本もの手にふんわりと支えられ、守ってくれる枝枝の間を抜けて柔らかな苔の上へと着地した。彼女は奇蹟的に助かったことに熱誠籠めて感謝を捧げると、城を遙か遠く離れて踏み馴らした径もない森林に彷徨い入った。そこに枝を組み合わせて小屋掛けをし、隠者となつてひたすら祈祷三昧で暮らした。水がイーダの飲み物、森の木の葉、草の実がイーダの食べ物だった。それからほどなくある従者が伯爵に朋輩が鴉の巢の中に指環を見つけた顛末を語った。それを聞いた伯爵の魂には自らの行為が重くのしかかったのである。ある時、伯爵に仕える獵師の一人が道に迷つて思いがけなくかの人里離れた森の一隅に行き当たり、寂寥の中に暮らす女人イーダに巡り逢つた。急いでこのことを主君に知らせると、訊問もせず判決も下さずに二人の人命を奪つた性急な行為をとつて後悔していた伯爵は隠者暮らしの妻の許に馳せつけ、元通り城へ帰つて欲しい、と頼み、許してくれるようひたすら懇願した。しかしイーダは決して心動かされなかつた。トッゲンブルク伯爵は十字軍に参加、スイス一円の家人を呼集し、彼らを率いて、己が所業の懺悔贖罪のため聖地で不信の輩と戦わんものと、かの地目指して出征した。聖地で伯爵は幾つもの大会戦に身を挺し、その名を畏怖の的とした。——しかしながらその胸の裡の強い憧れが繰り返し繰り返し故郷へと引き戻した。そして伯爵は、イーダが再び自分と添い遂げてくれれば、といまだに念願して

いるのだった。彼はなぜなら妻と再会して以来いまだかつてなかつたほど妻を愛するようになっていたからである。一年後伯爵は船路を取つて故国へ帰還した。が、イーダの消息を訊ねると、聞かされたのは、彼女がフィシンゲンの修道院で得度して尼僧になり、そこで静謐にして清淨なる日日を送っている、ということだった。すると伯爵は騎士の装具を悉くかなぐり捨て、武器武器を居城の礼拝堂に吊るし、貧寒たる隠者の身なりでフィシンゲンへと巡礼して行き、修道院の近くにとある場所を選んで、そこで暮らし、懺悔し、祈つた。その命を終るまで。

一〇 ピラトウスと群れなす小人

スイス全土には、ベルンの地、ルツェルンの地、ハスリ谷、その他ほとんど至るところで小人や山の精——これらはお互いに似ている点が多い——の伝説が行われている。とりわけしげしげ語られるのは高い山ピラトウスといつものはこの山の地下の洞窟に住んでいる小人たちの話である。この小人たちは群れなす小人と呼ばれている。ピラトウスというのは、つまり、スイスの本家本元のプロツケン山ないしプロツケン山のこと、スイスフランス語ではフラクスモン（モンス・フラクトウス）、ラテン語ではモンス・ピレアトウス、すなわち帽子山と呼ばれる。土地ではこういうよく知られた言い回しが聞かれるからので。

ピラトウス、帽子かぶつたら、

国中どこでもいい天気。

けれども伝説はこんな具合。我らが主キリストの苦しみと死と復活の後、かのローマの総督ピラトゥスはこの地に渡来したのだ、と——悪魔がピラトゥスの亡骸を当地へ運んで来たのだ、などとする者さえあるが——。そしてピラトゥスはここの山麓でおどろおどろしい湖を発見した、と。この湖には出入する河川がない。そして底知れぬ深さのため黒くておぞましい外観を呈し、不気味な沼沢である。次のような言い伝えが生き長らえていたものだ。湖に何かを投げ込むと、たちどころに雹と驟雨をともなう凄まじい嵐が捲き起こる、と。なにせ事実洪水がクリエンスの土地とルツェルンの町を一三三二年と一四七五年に大災厄に陥れたことだし。それゆえかつては余所者を湖に行かせたがらず、石や木切れをそこに投げ込む行為は、体罰および死刑に処する、として禁じられた。ローマの総督は、良心の咎めに絶えず苦しめられていたので、この湖に身を投じた、ということだ。悪魔が彼を放り込んだのだ、と語る手合いもいる。さて、群れなす小人だが、彼らはピラトゥスのずつと高みにある、深い、おどろおどろしい洞窟に何層にも何層にもなつて住んでいた。人間にごく親切で援助を惜しまず、牧人たちの言い方を借りればごく「おもしろえ人たち」で、夜毎人間の仕事を片付けてくれたものである。山から下の谷谷に降りて来て、せつせと家事やら野良仕事をやってくれた。それも一人の群れなす小人が、下男どもを残らず率いた農場十人よりも多量の作業を。けれども群れなす小人が人間の前に姿を現すことはめつたになかった。そういう時は長い灰色の上つ張りを纏っていたが、これは足が決して見えないように地面まで垂れ下がっていた。ある牧人の身にこんなことが起こった。この男は山麓でも斜面の上の方に枝もたわわに実の生る桜の樹を一本持っていた。すると小人たちがいかいしく桜桃をもちでは、後で上等の桜桃酒が醸造できるように、果物用簀の子の上に並べてくれるのだった。ところで牧人はむらむらと好奇心を起こした。わけても、群れなす小人の足がどんな風になっているのか検分したくてたまらなかつたものだから、翌年、実がまた熟した時、そこへ出掛けて行って、樹の周りに灰を撒

いたのである。群れなす小人はやつて来て、せつせと桜桃をもいだ。そこで朝になると牧人は灰の中に小人たちのあんよの跡を見届けたわけ。この足跡ときたら全部が全部鷺鳥のちいちゃな蹊みずかきの形をしていた。牧人は大笑いすると、群れなす小人の足がどんな恰好かっこうしてるんだか分かっただよ、と嬉しがって仲間たちにしゃべりまくった。一方、小人たちのはかんかに腹を立て、牧人の家をおち壊し、飼っている家畜の群れを追ひ散らし、例の桜の樹の枝を一本また一本と折ってしまった。それからというもの、人間に手を貸すために山から降りて来る者はただの一人もなく、小人たちは山の上の自分たちの住まいである深い洞窟、巖の裂け目に留とどまったきりになった。さて牧人はと申せば、すっかり気が塞ふさいでしまい、青い顔をして彷徨さまよい歩いていたが、そう長くは生きなかった。

一一 獣と魚を守る山の小人

山の小人たちはアルプス羚羊ツツエルクを大事にし、可愛かわいがつている。彼らは猟師らが羚羊を殺すのをよく思っていない。それゆえこれまでひどい目に遭あった猟師らが少なくない。彼らが好意を寄せている善良な猟師らにはなるほど時時一頭また一頭と手に入れさせてやることもあるが、それでも山の小人と折り合った数以上撃つことは断じて許されなかつた。さもないと、山の小人に巖から投げ落とされ、惨めにも命の燈火を吹き消されてしまうのだつた。ある時、あまりにも高く巖登りをした一人の猟師の前に突然白髪いの山の小人が立ちふさがり、「おまえはどうしてわしの家畜を追うのか」と怒って語りかけた。——猟師はびっくり仰天し、「だっておれは、羚羊があんたのものだなんて、からきし知らなかつたんで」と答えた。——山の精の言うよう「毎週おまえの小屋の前にあの角の生えてる獣を一頭置いといてやる。が、その代わり気をつけて他のは撃つでないぞ」。——こうしただいで猟師は毎週来

る日も来る日も「塩漬^{あぶ}けでない」新鮮な焙^{あぶ}り肉にありついた。でもそうした肉を食べても全然嬉しくなかった。彼は狩りをしたという気持ちをどうしても抑えることができなくなり、またしても山と森の高みへ登って行き、間もなく群れの頭領格の牡羚羊を発見、急いで銃を構え、狙^{ねら}つて、撃った。——けれど引き金を引いたとたん、背後の地面の中からあの山の精が出現、下で猟師の両脚をぐいと引つ張ったので、こちらは転落、深い谷底へ墜^{おち}ちて死んだ。

マルタースに副代官⁽⁹⁾が駐在していた。名はハンス・ブーハーといった。この男は、いつか群^{ヘイルドマン}れなす小人に会いたものだ、と思っていた。熱狂的な釣り好き、狩り好きだったが、その他の点では実直な人間だった。ある日のこと、ピラトゥスの麓を上へと登って行き、リュームリヒ川に沿って歩きながら、虹鱒^{にじます}が獲れればなあ、と考えていると、不意に一人の群^{ヘイルドマン}れなす小人が後ろから背中に跳び乗り、ものすごい力で彼の顔を小川の中に押しつけたので、溺れ死ぬに違いない、と思つたほどだった。そうしながら群^{ヘイルドマン}れなす小人はがみがみとこう言つた。「わしの可愛い動物たちの獲り方、狩り方をきさまに教えてくれるわ」と。——帰宅した時、副代官はもう半死半生のていたらくで、顔色はまるでイーペルンの死神のよう（「死人のように蒼白」⁽¹⁰⁾）だった。そして顔の片側は麻痺してもいた。彼はもう二度と山で狩りをしたり、魚を釣ったりしなかつた。

オプヴァルデンに歳を取つた知事^{ラントアマン}⁽¹¹⁾がいた。名はハインリヒ・イムリンといった。彼は自身こんなことを物語つた。自分はある時羚羊狩りをしようとピラトゥスに登って行つたところ、一人の小人^{ツヴェルケマン}に出くわしたのだが、こやつは、あんた、さつさと引き返しな、と命じたのだ、と。さて、知事^{ラントアマン}は遅^{たぐま}しく恰幅^{かっば}のよい男^{たぐま}だったから、小人^{ツヴェルケ}を嘲^{あざわ}つて、こう言つた。「おい、おぬしはわしが何かするのを止めるだけの強い力を持つとるのだらうな」。そのとたん、小人^{ツヴェルケ}は彼に跳び掛かり、巖に押しつけた。その重いことといつたらまるで馬さながら、彼は魂が体

から抜けそうになり、意識が無くなった。半時間ほど死んだように横たわっていると、家人らが彼を見つけて、蘇生させ、家へ連れ戻した。

一二 群れなす小人の退去

ピラトウスのちっこい山のふもとたちが善良な人間らに対していかに親切にふるまってくれたか、という話は既にたくさん語られている。緑か灰色の上衣を纏い、人には見せない足を持ち、地面にまで垂れ下がった長い銀色の髻を生やした、ちっぽけで、二脚尺の背丈の小人たちは、山に埋蔵されているさまざまの寶石の守護者であり、人間に援助を惜しまなかった。やって来ると、食べ物欲しがったが、わけてもの大好物は豚肉で、これを彼らに食べさせてやった者は安楽な暮らし向きになり、恩恵を授けてもらったものだ。アルプスの酪農婦たちが彼らのために乳をいくらか取っておいてやると、彼らはお返しに家畜の乳を搾り、家畜に餌を与える作業をしてくれた。そして娘たちの傍でしごくのんびりくつろぐのだった。小人たちは骨牌占いをしたり手相を見たりすることもできた。とにかくその他なんにでも巧みだった。けれども彼らを怒らせてはいけなかった。夏、彼らに干し草作りを手伝ってもらえた者はご満腹だった。連中は驚くほど干し草の量を増やしたからだ。もつとも干し草作りを眺めているだけで、手を貸さないこともよくあった。かつてある干し草作りの男がそれに腹を立てた。この男はもう一人の仲間と一緒にあって、仕事が始まる前に、群れなす小人たちが坐り込んで見物するのが常の石の上で焚き火をし、それから素早く灰と炭を熱くなった石から綺麗に掃除した。小人たちがやって来て石に乗ると、足に火傷してしまった。彼らは途方もなく大きな声で「なんてひどい、なんてひどい」と叫び、——以来二度と再び姿を見せなくなった。

そう、それからまた、ピラトゥスの山の小人たちが、干し草作りの者たちを見物しよう、と山の断崖絶壁からハスリ谷へと下って来たことがある。彼らはこんもりと葉の生い繁ったある楓の樹の大枝小枝に腰掛けるのが習わしだった。これに気づいた悪戯者どもが枝枝にぎりぎりまで鋸を入れておいた。そこで、哀れや、小人たちはばさりと落つこちたのである。彼らは悲痛な叫び声を挙げて、こうわめいた。

やれまあ、お空はなんとも高い。

やれまあ、不実はなんともでかい。

今日は来たけど、もうもう来ぬぞ。

そうしてその後ハスリ谷には決して一人も姿を見せなくなった。

一三 デュルスト

ピラトゥスのかの沼沢めいた湖の周辺と山の全領域ではデュルストなるものが暴れ回る。これすなわち、テューリンゲン、フォイクトランド、およびハルツ山地に比べると同様、荒れ狂う夜の獵師である。夜の獵師は道連れとしてこれも物の怪の女性の性を従えている。あのハツケルベルクがトウトオーゼルと、テューリンゲンの荒れ狂う獵師がホレ夫人と、フォイクトランドのそれがベルヒタ夫人と同行しているように。この女性だが、山の下、山塊の西壁のすぐ近くのエントリブーフの人人はポステルリと呼び、ルツェルンではシュトレッゲレとして知られ、ホ

レ夫人や怖いベルヒタと同じく怠け者の娘たちの下裳スカートをめちやくちやにしてしまふ。デュルストは轟轟こうこうと猛り狂つて高原放牧地ムの高みを飛び過ぎ、酪農小屋をがたがた揺さぶり、大きな木の幹を折り、巖塊がんかいを谷底に投げ込み、牝牛めうしたちさえ空中高く舞い上がらせることもある。こうした牝牛たちは二度と降りて来ないか、あるいは半死半生となり、乳も涸れ果てて、やっと三日目あたりに落ちて来た。ある牧人がこれに気づき、高原牧場の祝福ゲの祈りによつて阻止することができた。この男が乳搾り漏斗じょうぶを使い、デュルストがちやんと聴きつけられるようこれを叫ぶと、うまく間に合つて、飛ばされた牝牛は至極やんわり牧草地に再び着地した。

アイゲン 谷タールを見下ろすブリュンデル高原牧場では今日でもなお酪農夫たちの夕べの呼び掛けの内にこの高原牧場の祝福ゼーの祈りを聴き取ることができよう。こうした夕べの呼び掛けは自然の仕事休めの静けさの中を風琴オルガンの調べや鐘の響きのようにこよなく素晴らしく響き渡り、精霊たちの音楽のごとくあらゆる山峽やまかいから縫もつれ合った音①の塊クニを響エさせる。これは呼び掛けであり、祝福の祈りである。いわく。ホオ——ホオ——ホオ——エエ——ホオ。ホオ——ヒイ——ホオ——ホオ。ホオ、讚ほえよ。ホオ、讚ほえよ。諸人もろびとよ、歩あみを留とどめよ、神の御名なにおいて、我が聖母様の御名において。誉ほむべきかな、イエーズス、イエーズス、クリスト。アーヴェエ・マリーア。アーヴェエ・マリーア。アーヴェエ・マリーア。ああ、我らが主しゅイエーズス・クリスト様、高原牧場のものとされるありとあらゆるものの肉体と靈魂たまと譽ほれと財産とを守りたまえ。これを、神よ、しかしして我らがいと愛する聖母様よ、御心のままになしたまえ。これを、神よ、しかしして敬虔なる聖サンクトヴェンデルよ、御心のままになしたまえ。これを、神よ、しかしして敬虔なる聖サンクトアントンよ、御心のままになしたまえ。これを、神よ、しかしして敬虔なる聖サンクトロイ（アロイジウスのこと）——よ、御心のままになしたまえ。

一四 有翼龍たちと無翼龍たちの話

高いピラトゥスの山上には以前有翼龍たちと無翼龍たちがうじゃうじゃいたものだ。彼らはこの巨大なアルプス山塊の到達不能な洞窟や峡谷に巣くっていた。湖面を行く舟人らは有翼龍たちがかつと開けた口から火を噴き、長い焰の尾を振ってピラトゥスからリギへと飛んで行くのをしばしば目にした。こうした有翼龍の頭がある時夜にリギからピラトゥスに飛び帰って来た。ホルン生まれの農夫が、畜群の番をしていて、その姿を見た。するとその有翼龍は石を一つ落としてよこした。これは球形弾のような形をしていて、燃えるように熱かった。この石を小刀の先に乗るくらいに量掻き取って、病人に服せると、あらゆる病気に効き目があった。またある時には、ぞつとするほど大きな有翼龍がルツェルンの湖からロイス川を泳ぎ上って行くのが目撃された。

かつてある桶屋だか樽作りだかがルツェルンからピラトゥスへとやって来た。樽の箍にする木材と樽板の原料を探すためだった。ところが道に踏み迷い、日はとっぷり暮れてしまった。そして突然深い谷に落ちた。谷底はぬかるんでいた。夜が明けると男にはこの深みにいづれも大きな洞窟に通じる二つの入り口があるのが見えた。そしてこの洞窟のどちらにも恐ろしげな無翼龍が入っていた。その姿に男はたまらなく怖くなったが、無翼龍たちは何の危害も加えなかった。彼らは時々湿った、塩気のある石を舐めるので、男もやむなくそうしてみると、なんとか露命を繋ぐことができた。これがまる一冬続いたのである。春がこの地に到来すると、大きい方の無翼龍は起き上がり、ざあつという大きな音とともにじめじめした穴から飛び去った。もう一頭の小さい方はいつまでも樽作りの周囲を這い回り、まるで、男も一緒に行かなければならないのだよ、と分かせたいかのように、好い子、好い子、といった素振りをした。哀れな男は、神と聖者レオダーガーに對し、この龍の洞窟から逃れ出ることが叶いますな

ら、ルツェルンなるホーフの司教座教会に御ミサ用の素晴らしい祭服をご寄進申します、と誓い、二番目の龍が飛び上がるとした時、その尻尾しっぽにぶら下がって、ともに空中に上がった。こうして再び日の当たる場所に出ると、手を放し、家族の許に帰り着いた。けれども彼はそれからそう長くは生きなかつた。物を食べる習慣が全く無くなっていたからである。が、約束と誓いは守り、壮麗なミサ用祭服を調べて、服地の上に事の顛末てんまつを悉皆しつぱい刺繍しゅうさせ、一部始終を教会記録簿に記入してもらった。この奇譚は一四一〇年、ないし一四二〇年に起こった由で、その年の十一月六日から翌年の四月十日まで樽作りは無翼龍リントウルムたちのところで過すごしたのである。

一五 ヴィンケルリートと無翼龍リントウルム

ヴェレンという、ピラトゥスからほど遠からぬ村に一人の男が住んでいて、その名をヴィンケルリートといった。さて、その近く、山の麓かむの上の方に一頭のおぞましい無翼龍リントウルムが巣くくつていて、これが人間やら家畜やらを喰くらい、その地方一帯を荒廃させたので、周辺の人人たちはこやつをヴェレン荒しと呼んだ。⁽⁸²⁾ところで住民ヴィンケルリートはかねてある殺人行為のゆえに死刑を宣告され、逃亡中だったのだが、皆がこの身を元通り受け入れてくれるなら、あの無翼龍リントウルムを退治してみせよう、と知らせて来た。人人は喜んでこの闘いを許可、ヴィンケルリートは鋭い剣を得物とし、左手には盾の代わりに茨いばらの束を携もえた。龍が突進して来ると、彼は相手のかつと開いた口の中にこの茨の束を突つ込んだ。無翼龍リントウルムにとつては一遍になんともたくさんの爪楊枝つまようじを入れられたようなもの。どたんばたんとのうち回りだしたので、こちらは隙を窺うかがい、剣をしっかりと構かまえて胴中を貫いた。無翼龍リントウルムは斃なれて死に、ヴィンケルリートの剣は龍の血にまみれた。勝利者となったヴィンケルリートは喜び勇んで高高と剣を打ち

振った。こうして命を拾ったわけだが、しかし、結局すぐさまそれを失ったのである。というのは、剣から龍の毒血が流れ落ち、ヴァインケルリートの腕と手に滴り、これが地獄の火のようにすぐさま燃え上がったからである。勇士はこの火傷のせいで死んでしまったが、お蔭でこの土地は救われた。龍の洞窟は今日もなお、あれがそうだと示される。

ベルンの地の真ん中にあるブルクドルフの近郊にまた別の龍の洞窟なるものがある。昔二人のレンツブルクの公爵が狩りに出掛けた。二人は兄弟で、ジュントラムとベルトラムという名だった。あるいは、グントラムとヴァルトラムとする説もある。で、彼らは深い森に分け入り、とある荒涼とした断崖の畔にやって来た。ここにはおぞましい龍が棲んでいたのである。こやつもまた周辺の土地を人跡稀にしてしまっていた。龍は若い獵師たちを目にする、すぐさま突進、弟のベルトラムをそのでかい口でまるごとぐいと呑み込んだ。しかしジュントラムは勇氣凜凜龍に打って掛かり、その首を刎ね、胴体を切り開き、弟を助け出した。弟はまだ生きていた。その後兄弟はこの場所に聖女マルガレータを記念して礼拝堂を建立、一枚の絵を掲げてこの事績を末代まで伝えた。

一六 カステレン高原牧場^{（53）}

カステレン高原牧場にある豊かな農夫が住んでいて、数多くの畜群と数多くの牧草地を持っていた。山の下のクリエンスにその貧しいおばがいた。おばは寡婦で、娘が一人しかおらず、これと一緒に食うや食わずの暮らしをしており、重い痛風で寝込んでいた。そこで女の子は高原牧場の金持ちの従兄のところへ登って行き、なにがしかの援助を頼もう、と決心した。この子が高原牧場に到着した時、恐ろしい雷雨が起こったが、もらえたのは慰めで

も贈り物でもなく、嘲りと罵りだけだった。その上嵐がひどくなりそうなのに、山の上で追い返されたのである。娘は健気にも嵐をついて歩き、やっとのことである酪農夫の小屋に辿り着いた。これは娘の恋人のアーロイスで、有り合わせの小さな乾酪を彼女とその母親のためにくれた。少女は足取りもせわしく急いで山を下ったが、滑りやすい草地で足を滑らせ、転倒した。その拍子に持っていた乾酪が谷に転げ、止める間もなく行き着きようのない巖の裂け目に落ちてしまった。哀れな少女が泣きながらしょんぼりと転げ落ちてしまった乾酪の行方を眺めていると、何かが手をぎゅっと掴んだので死ぬほどびっくりした。傍に立っていたのはなんともまあちっぽけな白髪の群れなす小人で、背中にあの失くしてしまった高原牧場乾酪の、おおよそ石白四分の一くらい大きさの塊を背負い、片手に菓草の小さい束を持っていた。そして言うには「この乾酪を家へ持って帰り、それから母さんにこの菓草で茶を淹れてやるといい。もう、だあれも助けてくれやしない、と泣き叫ぶでないぞ」。——一方上の高い山地では嵐がまだ荒れ狂い続けており、途方もなく恐ろしい勢いで、さながらこの世の終わりでもあるかのように、ごろごろ、ごうごう、ばりばり、と音がしていた。女の子が母親の許に戻ると、例の乾酪はごく重たい黄金の塊に変わっていた。それから菓草茶を飲むと母親は全く健やかになった。けれどもカステレン高原牧場には嵐の最中地滑りが襲い掛かり、牧草地をめっちゃめちゃにし、畜群を殺し、高原牧場乾酪くらい大きさの石が吝ん坊の従兄の片足を打ち砕いた。その後それでもこの男はお婆の家へびっこを引いてやって来て、物乞いをした。

一七 お花の高原牧場

ベルン州高地帯にはクラリーデンと呼ばれる山並みがあるが、その山上にはかつて素晴らしい牧草地が数あり、

どれもこれもこの上なく効き目のある薬草や花で一杯だった。そういうしだいでどの牝牛めうしも毎日三度乳を搾ることができ、搾乳のたびに乳桶おけに二マース(54)半も採れた。やはりそこのある高原牧場アールプの話だが、これは殊の外美しく、草地在が豊かで、一面花が咲き乱れていた。それゆえ、お花フリネリスの高原牧場アールプとも呼ばれた。そこにある裕福な牧人が家を構えていたが、この家は満足の行く立派さとはどうにも思えなかつたので、もつと素晴らしいのが欲しくなつた。そこで大きな新宅を建て、「家の出入り口に通じる」階段(55)をそっくり乾酪チーズだけで作り、そこをこく好い仲の酪農婦と愛犬とかわいがつている牝牛とともに昇り降りした。乾酪の階段チーズが汚れると、乳で洗わたのである。下の谷にこの牧人の信心深い母親が住んでいた。彼女は息子の冒瀆ぼうとく沙汰さたと神をないがしろにする所業について皆目知らなかつた。ある時、日曜日のこと、お花フリネリスの高原牧場アールプに登って行き、酪農小屋を訪ねようとした。着いてみると、とても喉が渴のどいていたので、何か元気づけの飲み物をおくれ、と頼んだ。例の酪農婦は老女がやって来るのが厭いやで厭いやでしようがなかつたし、息子もそうだった。それに二人は、老女にあれこれ咎め立てされるのではないかと心配だった。そこで老女をすぐにまた下へ追い返したかつた。で、老女が飲んでみると、なんとも恥知らずなことに乳の上に砂が撒まかれていたのである。そこで老女はすぐさまくると向きを変えて立ち去り、高原牧場アールプを歩き下ると、下で立ち止まり、両手を高く上げて、神をないがしろにする者どもを呪詛じゆそした。たちどころに嵐が起り、最後の審判の日が到来したかのようだった。事実お花フリネリスの高原牧場アールプとそこに暮らしていた生きとし生けるもの全てには最後の日になつたのである。牧人と酪農婦、牝牛と犬——家と農場の一切——、これら全てが滅亡し、高原牧場アールプは氷河水こおりと碎屑岩さいせつがんで覆われた。その後この荒涼とした曠野こうやを例の牧人の亡霊がうろつき回り、こんな嘆きの唄を歌つた。

おいらとおいらのカトリーン、

おいらの牝牛のブランドリン、

犬のリーンはいつまでも

居おらにゃあならぬ、クラリーデ。

こんな伝説がある。いつか聖金曜日カール・フライタグにだれか信心深い酪農夫が、手袋いぼらに茨いばらの棘きずをつけて、一切無言でかの幽霊牝牛の乳を搾り終われば、このうろつき回る亡霊たちは救済されるのだ、と。ある時、それをやってみた者がいた。牝牛は棘のせいで苛苛いらいらと身動きしたのだが、それでも桶をもう半分一杯にした。するとどこかの男がほんとそ
の肩を叩いて、「泡立ち具合は充分かね」と訊ねた。——酪農夫は口を利かないという条件をうっかり忘れて、「お
おさ、よく泡だつてらあ」と言ってしまった。——と、突然牝牛は体を振り放し、足で桶を引っ繰り返すと、消え
失せた。かくしてお花フライングスの高原牧場の亡霊たちは救済されないままとなった。

一八 マッターホルンに現れた永遠のユダヤ人

南国の地（「イタリア」と、その名も既にイタリア語で呼ばれる高峰モンテ・ローザからほど遠からず、アルプス山脈に突兀とちこつと聳そびえ立つ巨大な山塊はマッターホルンという名で、その下には氷河を一つ持つマッター山ペルクがある。この氷河から流れ落ちる水はフィスパー川となる。この川波はやはりドイツの地を指してうねり下って行くのである。その高み、今は荒涼とした沈黙がたむろしているに過ぎないか、さもなければ氷河の水が轟然こうぜんと砕けるだけの

場所に、その昔繁華な町があった、という言い伝えがある。そこへ永久とこしえに休息することのない旅路の途中、かの永遠のユダヤ人(57)、もしくは——スイスでの言い方だと——歩きづめのユダヤ人もまたやって来た、とのこと。町の人たちは彼を見て、歩きづめのユダヤ人だ、と分かったが、家へ迎え入れようとする者は一人もいなかった。歩きづめのユダヤ人は人人の無情さを悲しんで立ち去りながら、こう言った。「今わたしの目の前には町がある。しかし、わたしが再びこの地に来る時には、ここには牧草が生え、木木がそこに立ち、大きな巖いわがごろごろしていることであろう。そしてもはや家家も、幾筋もの通りも、市壁も、塔の数も見られはしないであろう。しかし、それからその後またしてもわたしがこの地に至る時には、牧草も薬草も、木木も石ももはや見られず、あるのはただ雪と氷のみで、わたしが今後彷徨さまよわねばならぬ限りの間これらに覆われていることであろう」。——そしてなにもかも歩きづめのユダヤ人が言った通りになったのである。歩きづめのユダヤ人はこの世の終わりまで彷徨い続けなければならぬ。なぜなら、我らが救世主が死への道を進しんめられた折、自分の家の前で主が休息なさるのを許さなかったからである。そして百歳になるたびに、ゴルゴタ指たどして歩まれた我らが救世主と同じ若さに戻るのだ。

山のずつと下、高みからニコライ谷タルへと入るフィスパー谷タルのヴァイスホルンの下に村が一つあって、その名をテーシユという。テーシユの右手上方の日当たりの良い牧草地にやはり同名の村があった。そこに昔裕福な農婦がいて、アンケクリム（乳脂のこと）の入った鍋なべを火の上に掛けて煮ていた。上等の牛酪バタを作ろうとしていたのである。そこへ貧しげな老人が入って来て、そのアンケをどうか少し食べさせて欲しい、ひもじくてたまらない、と頼んだ。「とつとと行つちまうがええ、このろくでなし」と女は言った。「おまえみたいな浮浪人にやる物なんぞ、ここには何もありませんねえだ」。——「おお、おかみさんや」と男。「あんたがなんぞわしに恵んでくれたら、わたしは、決して空にならないようにこの鍋を祝福してやるつもりだった。したが、こうとなったら、村中が呪われるが

いい」。——するとたちどころに高みのアイマの峰とマッターホルンが凄まじい音を轟かせて崩れ落ち、巖塊また巖塊をどつとぶちまけたので、村全体が巖屑の下に埋もれてしまい、村の教会の祭壇の表面の他は何も見えなくなった。そして今は、村を覆っているプラボニーヌ氷河を源とするせせらぎが、この祭壇を越え、狭い峡谷を抜けてテーシユを目指し、フィスプ(註)に流れ込んでいます。

一九 巖壁の聖母

テーシユの下方、聖ニコラウス村がニコライ谷のどん詰まりに位置しているところ、あるいは、下界から山に登って来る者にとっては谷への入り口に位置しているところ、ここに聖ニコラウス村を睥睨してレテイ山が屹立している。その険しい巖壁が一つ、谷に面している。この巖壁に石でできた小さな聖母の御像が立っている。以前これは下の道端にあった。ある男がこの御像に祈願したところ、一向聴き届けてもらえなかった。そこで次によって来た時、御像を捉まえて汚物を投げつけた。すると御像は泣いた。それなのに男はもう一度投げつけた。すると御像はかの巖壁の上高くに飛び上がり、今度はそこに立った。だれもそこまで行き着けなかった。谷の住人はこれを嘆いた。これまで人人はこの可愛らしい御像が大好きでとても敬っていたので、なんとかまた下へ降りて来て欲しかった。しかし、この巖壁の巖は嶮岨に過ぎ、これを攀じ登ることはだれにもできなかった。そしてこんな高さまで届く梯子などありはしなかった。その後聖ニコラウス村の村会で一同は衆議一決、上からやってみよう、ということになった。大勢がレテイの峰に登攀、あらかじめいくつも目印をつけておいたので、御像のちょうど上の方から男が一人、強靱な綱で吊り下ろされ、これがお像を持ち上げて来る手筈だった。早くも男はもうちょっ

とで御像だということまで降り、御像がちゃんと立っているのを目にした。その時、綱がどんどん細くなって引きほどになってきているのが分かり、これは保たないだろう、自分は無惨にも深い谷底へ墜落するだろう、と思い、「引つ張り上げてくんろ、引つ張り上げてくんろ、綱が細くなって行くだよう」と叫んだ。——けれども皆はいいかわらずどんどん下ろし続け、男はいまや御像のところに来て、これならもうそれに手を掛けることができよう、というまでになったが、その時綱は髪の毛ほどの細さになってしまっていた。そこで男はもう一度怒鳴った。「後生だから引つ張り上げてくんろ、さもなきやわつちはおだぶつだあ」。そこで男たちは彼を引き揚げた。上るにつれて、綱は元通りどんどん太く強くなった。そこで、聖ニコラウス村の衆は、御像は巖壁にいたので、礼拝堂には入りたくないのだ、フランケン^{ベルク}の地なるミルツェ山の頂きにある御像がやはり礼拝堂の中に安置されたがらないのと同様に、と合点がいったしだいである。

二〇 動物たちの楽園

マッター山^{ベルグ}の高嶺^{たかね}に、だれにも見つからない、あるいはめつたに見つからない場所がある。これはかの歩きづめのユダヤ人だつて一緒くたに呪詛^{じゆそ}の対象にすることができなかった。なにしろ原初から神によって禁断の地とされているからで。ここには雪も氷もない。あるのは陽光と喜び、忘憂と牧草。元来まずフィスパーのせせらぎがさらさらと湧き出るのはここなのであつて、やがてしばらくしてアルプ氷河の下からまた地表に流れ出すのだ。ここに動物たちの楽園がある。ここにいるのは素晴らしい巖山羊^{シムタインボック}とアルプス羚羊^{カモシカ}、「犬」^{わし}と「髭」^{ひげ}、秃鷹^{はげたな}、雷鳥^{らいてう}と黒雷鳥^{くろらいてう}、それから山鼠^{ムルメイルマウス}も。どれも他の動物に危害を加えることなく、皆平和に共存している。ただ三掛ける七年

ごとに一度だけこのアルプス動物界の山の楽園を、覗き見することが人間に許されもし、できもする。そこはなんとも至福に満ちて美しく、どこもかしこもアルプス石楠花や龍胆(66)が一杯に咲き乱れている。覗き見が成就するのは羚羊獵師二十人のうち辛うじて一人いるかないかである。そこには年古りた松や楓が数多聳え立っている。松の木には松ぼっくりが生っており、その仁は扁桃のように甘くて旨い。すなわち松の実である。動物たちの楽園に足を踏み入れることが叶った者は、この松の実なら心行くまで取って賞味してよい。ただし、動物を捉え、殺すことは決して許されない。そんなことをしたら命に関わる。多くの者が大層な古木である神神しい篠懸の幹に自分がここに来た印として名前を刻み込んでいる。ところで巖山羊は今ではめつたに見られなくなっているし、松もめつたに見られない。これらの木木は高みに生えていて、そこまで行くのは難しい。というのもこんな言い伝えがあるので。なるほど以前には松はたくさん、至るところに生えていたのだが、使用人連中がしょっちゅう松の実をつまみ食いがり、そうしては仁を取り出すのご大層な時間を費やし、のらくら怠けたので、雇い主側はこれらの木木に呪いを掛け、その結果今では木は実を付けなくなった、あるいは、木のところまで行き着けなくなったのだ、と。

二 一 悪魔の橋

トイフェルスブリュック

聖ゴットハルトからさして遠からぬムルトホルンから奔騰する急湍となつて突出するのは荒荒しい谷川の口イスである。ある高原牧場の牧人が一人の酪農婦に惚れ込んで、しばしばその許を訪れたが、この激流を越えるのにこずった。それに向こうに越えれば越えたで、また、自分の小屋と畜群へ帰るのに川をこちらへ渡らなければ

ならなかった。さて、ある時のこと、ロイスの水嵩がひどく増し、これまで以上に激しい滝津瀬となった。そこで牧人は、川越しをして恋人のところへ行き着くことはできっこない、と見て取り、こう叫んだ。「ええ、まあ、この忌^{いま}ましい川め、悪魔が来て、きさまに架かる橋を作ってくれりやあなあ」。——するとすぐさま悪魔が巖陰^{いわかげ}から出て来て、こう言った。「なあ、おい、わしがおまえのために橋を架けてやったら、代わりに何をくれる」。「おおさ、おいら、あんたに何をやりやあいいんだ」——そう牧人は訊ねた。「その橋を真っ先に渡る生き物の魂だよ」——そう悪魔は答えた。牧人より早く渡る者なんぞいやしない、と考えたので。「おいら、それで文句はないよ」と牧人。すると、「よしきた、「約束した、との徴^{しるし}の」手打ちをしな」と悪魔が言い、若者は手打ちをした。そこで悪魔は手下の地獄の精霊ども総懸かりの助けを借りて、ごく僅かな間に橋を作った。で、それができあがると、坐り込んで待った。けれども牧人の若者はそれを渡りなどせず、救護所^{ホスピタル}の下のゴットハルト山地から一頭のアルプス羚羊^{かもしか}を狩り出すと、これをどんどんロイスの方へ追い落とす。とうとう例の橋まで来ると、羚羊はすばやく橋を渡った。悪魔は躍りかかったが、こんな獲物だったので「文字通り」悪魔のようにかんかんになり、羚羊を空中高く運び上げると、ばらばらに引き裂いた。さてそれからというもの、牧人は好きだけたびたび、のうのうと橋を渡って往来した。もつとも、この未来永劫^{トワエトエツクリシケ}悪魔の橋と呼ばれようになつた橋には別段大して不気味なことはない、との話だし、また、悪魔が毎年その一部を壊すので、いついつまでも修理しなければならぬ、とも伝えられる。

二二 牝牛の小川
シュテイレレンバツハ

ズーレネン山とその高原牧場の草地からささやかな小川が流れ出している。これは牝牛の小川という名だが、この名の由来についてはエンゲル山谷とウルナー・ラントにまことに不思議な伝説がある。ある高原牧場の牧人だが、飼っている畜群にお気に入りの仔羊がいて、どうまあ可愛がってやったものか、とんと分らないほど。そうしてこの仔羊にクリステイアンという名さえ付けた。これだけだったら、まあそんなにひどい話ではなかったろう。というのは、牧人でも羊飼いで、御者でも驢馬追いで、自分の動物を、そういったクリスト教徒の名前、つまり、ハンスとかミヒエル、グレートとかリーゼのような名前前で呼ぶことはよくあるから。しかし、このズーレネンの牧人は仔羊を溺愛すること、あまりにも程が過ぎて、まるきり思慮分別を失くしてしまい、クリスト教徒の子どもにするように、聖なる三位一体の御名において、この仔羊に洗礼を施したのである。そこで神様は嚇怒し、仔羊をおぞましい怪物に変えた。この怪物は目にするものを絶えず喰らい続け、他の家畜には草っ葉一枚見当たらないほどに高原牧場全体をすっかり丸坊主に喰い尽くし、それがもう夜昼のべつまくなしという有様。間もなくエンゲル山の放牧地はすっからかんと成り、万策尽き果てた。すると近隣の人人、つまりウーリの衆の許に一人の遍歴学生がやって来て、これがしまつにおえない怪物を駆除する手立てを提供した。ただしこの手立てはゆっくりゆっくりした術で、遂行される前にまだまだ少なからぬ草が高原牧場に生え、まだまだ少なからぬ水が小川を流れ落ちなければならなかった。遍歴学生の勧めはこうだった。「皆の衆、牝の仔牛を二頭選びなされ。これに餌として与えるのは絶対に搾りたての乳だけでなければなりません。最初の年は一頭の牝牛の乳を、二年目には二頭の牝牛の乳を、といった具合でな。年毎に牝牛の乳を増やすのです。こうして九年がきちんと終わりました

たら、この牡牛お牛を汚れを知らぬ生娘まじすめの手で例の高原牧場ア高原牧場に連れて行かせなされ。さすればこの牡牛はかの怪物と闘つて、これを退治いたすでござろう」。そこでウルンマの人人は厩舎きやうしやを一つ建て、そこで牡牛の仔牛を一頭育てるといふうしだいになった。今日でもその場所はそれと示されるし、これは牡牛の部屋と呼ばれている。さて、九年がきちんと終わると一人の汚れを知らぬ生娘がこの牡牛を山の上へと連れて行つて放した。すぐさまおぞましい怪物が出現、牡牛はこれ目掛けて突進し、長いこと、きわめて激しくこれと闘った。そして遂に相手に打ち勝つて突き殺したのである。闘いで体が火照りきつた牡牛は小川へと走つて行き、際限もなく水を飲み、とうとうがっくりくずおれて、これまた死んでしまった。そこでこの小川は牡牛シュテイルンバフの小川なる名を授かった。小川の上手にはいまだに巖いわに刻み込まれた牡牛の蹄ひづめの跡が見られる。恐ろしい山の妖怪との闘いの最中、牡牛はこの巖に〔後〕足をつ突つ張つたのである。

二三 より良き石

アールガウ、すなわち、ロイス川とリマート川がアール川に、そしてアール川がラインに流れ込む地域ガに、ガイス山ペックが聳えている。その頂きに騎士の城塞の廃墟が残っている。フィリンゲンのさる殿がこの上もなく壮麗かつ堅固にこの城を建て、心底これを喜び、ここで幸せな老年を楽しもう、そして、人には穏やかかつ寛容にふるまい、子孫たちには誠実な父たらん、と考えた。築城主の子息たちと地域ガ一円の友人知己は一堂に会し、把手フ付きの大杯ベを巡らした。フィリンゲンの騎士は子息たちに向かつてこう言った。「さあ、見るがよい、ここがなんと住み心地がよいか。この地方はすばらしく、我らは精励な家来たちに囲まれており、ぐるりの村村の真ん中にこの堂堂たる

城塞がある。これは敵には要害堅固、味方には自由開放、迫害される者たちには避難の場、困窮した者たちには救護所なのだ。わしは、かくあれかし、と望んで作った」と。

——「さよう、父上」と子息たち。「これはまっこと天晴れな防禦の砦となり申した。役立たずの民どもが背こうが背くまいが、我らはここからは是非でも言うことを聞かせ、やつらの項を脚下に踏まえてみせましょう。ここからなら、我ら、この地の川の数数と大河ラインに、また大小の道筋に、通行税を課すことができまする。地域全土が我らに貢納の義務を負うに違いありません。さすれば、我らの所領は増大し、我らの名はライン地方とスイスの地で畏怖されましようぞ。——こうした子息たちの言葉を聞いたフィリンゲンの殿は、血が凍り、心臓が破裂せんばかりとなり、激昂して怒鳴った。「性根の腐った倅どもめが。きさまらが考えおるのはさようなことか。見ておれ、きさまらを叩き直してやるわ」。そしてなみなみと酒を満たした把手付きの大杯を地に投げたので、これは無数のかけらに砕け散った。「ここな把手付きの大杯が木っ端微塵となったることく、ここな城は、わしの喜び、わしの楽しみは、瓦礫の山と化するのだ」。かくて、家来たち、子息たち、領民全てを呼集すると、竣工したばかりの城を壊すように命じ、再建に着手するような者は呪われよ、と言った。「民草と地域の苛斂誅求の城塞となるよりも、フィリンゲン一族の高貴な名の汚辱となるよりも、より良き石、虚しき石が山積みじゃ」と殿は叫んだ。——そうしてそれ以来ガイセン山ベルクの頂きには荒れ果てた城壁の残骸が横たわり、民間どこでもより良き石の名で通っている。

二四 十字架山
クロイツリベルグ

これもまたアールガウの、ボーデン湖から遠からぬところに、頂きに城塞のある城があつて、ここに一人の王女が住んでいた。王女はしばしば近くの丘に出掛けた。彼女はこの丘の木蔭で憩い、美しい眺めを楽しんだ。けれども彼女はこの丘の中に性質のよろしくない「地」霊どもが巣くっているのを知らなかつた。ある日王女がまたしてもお気に入りの場所へとやって来たが、どこだかほとんど見当もつかなくなつた。ちよつと前には涼しい木蔭のふかふかした苔の上で休息したところなのに、峨峨たる断崖、亀裂の入つた地面が行く手を塞ぎ、急な下り傾斜の穴が一つ、遙かの深みへとぽっかり大口を開いていた。けれども乙女は怖い物しらずの気性だつた。なにしろ清浄潔白、天真爛漫だつたので。そこで中がどうなつていいのか見届けようと、陰鬱な地下道へ足を踏み入れた。気づいたのは、そこが巨大な酒蔵だ、ということ。数数の樽また樽が積み重なつていた。すると、なんと、幾つもの恐ろしい恰好のものがさつと彼女の傍に近寄り、両手でむんずと掴むと、樽また樽の上をずんずんずん深みへと連れ去つた。そこで王女はとうとう恐怖と不安のため意識を失つてしまい、我が身に何が起つたのかもはや分からなくなつた。さて、居城に王女がいなことが判明すると、その行方を求めて人人が送り出され、周辺のありとあらゆる地域が搜索された。すると、なんと、「地」霊どもの丘からさして遠くない小さな高みで、両足は地中に根を生やし、体は石のように強張り、枝に変化した両腕は天に向かつて伸ばされ、ちよつど異教の寓話にある乙女ダフネのごとき姿で彼女が立っているのを、ある者が発見した。これを目にした人人は全て、樹木への変身というぞつとするような光景に驚愕した。そこで近傍のヴェッティンゲン修道院へ、奇蹟の御像を取り寄せるために使者が派遣された。御像が持つて来られると、王女を呪縛していた不気味な魔法は消滅し、彼女は元通り救済さ

れた。これを記念して、事の起こった山の上に十字架が立てられた。その後この山は十字架山と呼ばれたし、乙女が数数の樽を見つけたが、また再び入り口が閉ざされたかの丘は、今日に至るまで悪魔の酒蔵と呼ばれている。

二五 ヴェルフェルグラーゼ 骰子が原

アールガウはバーデンの町のすぐ近くに草原がひとつあるが、これは骰子が原と名付けられている。そこで悪魔がしばしば賭博をやらかした、といわれる。遙か大昔からそこで骰子が何千個と見つかるのである。それらの由来は何なのか、ローマ人がここに骰子工場を持っていたのか、それとも、ウーリアン親方がやつこさんのお気に入りの道具を地面の中で育てているのか、だれにも分からない。とにかく、水が湧き出るように出て来るのだ。どこの土龍の盛り土にもこれが混じっている。その原因はいまだかつて究明されたことはない。

二六 バーゼルの時の鐘

昔バーゼルの市民は特別な時刻の数え方をした。時の鐘が余所より毎回一時間早く撞かれたのである。これについてはいまだにさまざまな言い伝えが行われている。いわく。バーゼルにおける公会議はかつて下フラクセンフィングの地方議会よりいくらか長く続いた。つまり丸九十三年。これは一四三一年から一四四四年までのこと。そこで時間をもっと早めたい、と思い、一時間時計を進めたのだ。けれどもこんな改善では目的は一向達成されなかつたのだ、と。また、こう説く人たちもいる。いわく。かつてバーゼルのある党派が陰謀を企み、一味徒党は

十二時を期して市参事会を襲撃、騙し討ちで殺害するつもりだった。しかし全てを見そなわす神は、この町のあらゆる鐘が一齐に十二時の代わりに一時を告げるといふ奇蹟を起こして、これを妨げた。そのため煽動者たちはなんとも奇妙な恐懼をきたし、計画は水泡に帰した。彼ら自身は密告され、一人残らず始末された。その後参事会は、時の鐘を常に通常の時刻より一時間早く鳴らすよう、定めたのだ、と。

二七 アウグスト近郊なる異教徒の洞窟の蛇乙女

バーゼルとラインフェルデンの間にきわめて古い村落があり、その名をアウグストという。ローマの言葉アウグスタが元である。ローマ皇帝たちはここに居を構え、みごとな水道設備を作り上げた。この水道設備には一つの空洞というか地下への通路があり、これは地中遙かへ続いていて、その最奥部を見た者は一人もいない。これは民間では異教徒の洞窟と呼ばれている。一五二〇年のことだが、バーゼルに一人の仕立て屋が住んでおり、その名をレーオンハルトといった。彼はこれまた仕立て屋の息子で、まあ抜け作に程近かった。吃り吃り話すのが精一杯で、ちゃんとやつてのけられるのはごくごく僅かなことだけ。ある日好奇心に駆られたこの男は、例の洞窟の道はいつたいどれくらい地面の下まで続いているのか、どうしても試してみたくてたまらなくなった。そこで「蜜蠟の」蠟燭を一本用意し、これに火を点すと丸天井の空洞に入り込んだ。ところでこの蠟燭は聖別されていた。そこで地霊どもだって、十字架山近くの悪魔の酒蔵でのかの王女にしたように、この男に何か手出しをすることはできなかったわけ。レーオンハルトは黒鉄でできた門のところまで来たが、この門は彼の前でさあつと開いた。それから高大な穹窿の部屋を一つならず通り抜け、なんととうとう遊歩庭園みたいところに辿り着いたのである。そ

中には夥おびただしい花や木が植わっており、庭園の真ん中にみごとな建築の宮殿があった。けれどもあたりはどこもかしこも森閑としていて人っ子一人いなかった。この堂堂とした遊樂の館への扉は開けっ放しになっていたのので、レーオンハルトは中へ入った。そしてとある大広間に踏み込むと、そこに魅惑的な麗しい乙女がいるのが目についた。乙女は頭に黄金こがねの小さな冠かんむりを戴いたき、髪を靡なびかせていたが、おお、なんとも厭いとわしいことに、体の真ん中から下はおぞましい蛇の姿で、長い尾がとぐろを巻いていた。乙女の背後には黒鉄の櫃ひつが一つあり、その上に二匹の黒犬が寝そべっていたが、こやつらは悪魔のような外見で、猛猛たけだけしい獅子ライオンのように唸うなっていた。乙女はレーオンハルトに向かって慇懃いんぎんに挨拶あいさつし、頸くびに掛けていた鍵束を外すと、こう言った。「ねえ、わたくしは王家の一門一統の生まれなのですが、邪悪な力にかように呪いとわれて、半身が厭いとわしい怪物に変わってしまいました。でもわたくしはちゃんと救済してもらえますのです。もし、純潔な若い男の人が、わたしの醜かっこうい恰好かっこうを気にしないで三度わたくしの口に接吻くちづけしてくれば、わたくしは以前の人間の姿に完全に立ち返れます。そうすればわたくしの莫大な財宝は全部その人のもの」。——それから彼女は櫃ひつに近寄り、うう、うう唸うなっている犬どもを宥なだめ、中央の蓋を持つている鍵の一つで開き、どれほどどっさり黄金と装身具が中に入っているかごらんさない、とレーオンハルトに見せ、金貨と銀貨を何枚か取り出すと、レーオンハルトにくれた。それから、ほっと吐息をつき、至極優しい目つきで情愛籠めて彼を眺めた。さあ、こうなると、これまでの生涯でまだ一遍も女の子に接吻したことがなかったレーオンハルトは、かあっと胸が熱くなり、蛇乙女の美しい口に接吻を一つした。すると乙女の頬は紅潮し、目は燦きらめき、面おもては喜びに輝きらき、彼女は、救済されるといふ歓喜と希望で声を挙げて笑った。そうして激しい熱情で解放者かっほうをぎゅっと胸に抱き締めた。二度目の接吻が行われると、それとともに蛇の尾が、まるで永遠に虜とりこにしよとするかのごとく、相手の体にきつく巻き付き、乙女は両手で更にしっかとレーオンハルトを捉つかまえ、声を挙げて笑い、

歓喜のあまりその唇に咬みついた。こうした激烈というもおろかな狂おしい愛の徴に、若者は恐れ戦き、遮二無二身をもぎ離すなり、まだ点つていた持参の蠟燭を手にとると、一目散に逃げ出した。乙女はその背後で悲嘆の叫びを發したが、その叫びはレーオンハルトの骨髓に徹したのである。無我夢中でやつと通路と空洞から抜け出しはしたが。さてそれからというもの、この若者は接吻を熱烈に渴望して止まなかったが、蛇乙女との接吻ほど強烈で甘美な接吻はどんな娘、どんな女とも経験できず、蛇乙女救済の事業を成し遂げるため、彼女の許に戻りたくてならなかった。けれども他の女性たちに接吻してしまった今となつては、蛇の洞窟への入り口を再発見することは決してできなかったし、彼以降これに成功した者もない、という話である。

二八 ベルンハルト公誓言を守る

三十年戦争において、ザクセン公ベルンハルト・フォン・ヴァイマルは上部ラインの曠野で戦闘を行った。この時公爵はバーゼルとブライザッハの中間に位する小都市ノイエンプルクを攻囲した。この町は依然として皇帝に忠実で、果敢に持ち堪えた。長引いた攻囲とノイエンプルク市民の頑強な抗戦にほとほとうんざりしたザクセン公は憤激し、天国と地獄にかけて固くこう誓った。「余がこの町の残骸に入城したら、犬であろうと猫であろうと生かしてはおかぬ」。——その後間もなく、果敢なノイエンプルク市民ではあったが、攻囲戦にもはや耐えられなくなり、降伏せざるを得なくなった。一方「攻囲軍の」暴兵どもは市民の血で鬱憤を晴らし、だれもかれも殺してのけよう、と逸つてた。公爵は自分の立てた不遜な誓いを後悔したし、多くの高貴な、それにまた一部は無辜の血がここで流されるのを遺憾に思ったので、こう言明した。「余は、自分が誓言したことだけは守る。それ以上でも以

下でもなく。犬と猫は容赦するな。したが、余は断固として命ずる。人間はいたわつてとらせよ」と。——こうしたしだいでそうなった。ベルンハルト公は、この偉大な戦の英雄は、ブライザツハをも攻囲かつ征服、フライブルクを占領、そしてラインフェルデン近郊で皇帝軍を撃破したのである。ドイツの民は公爵に大きな希望を託した。エルザスに住むドイツの民もまたしかりで、彼に歓呼し、至るところで救済者として彼を歓迎した。不実な隣国「フランス王国」から守つてくれる庇護者ひごしやとしてのように。しかし彼は、虫の知らせか、こう語つた。「余は偉大なスウエーデン王グスタフ・アードルフ(8)と同じ運命を辿ることになる。民草が王を神よりも崇めるあがようになる、たちまち王は死なねばならなかつたのだ」。そしてノイエンブルク占領の一年後、公爵は人道的に支配したその地で没した。大方の伝承によれば、毒害によつて。そしてこの犯行の証左はことごとくフランスを指した。

二九 忠実なエツカルトの話

ドイツの古い英雄叙事詩は忠実なエツカルトの話を歌いかつ語る。エツカルトの思い出はその実直、篤信のゆえに長くドイツ人に偲しのばれ続けた。彼は昔日のブライスガウの英雄にして公であり、エルザスでは領主、出自はハルング一族、そして二人のハルングの公子たち——皇帝エルメンリクスエルメンリクスの弟の子息で、また、かの有名なベルンのデイトリヒの従弟に当たる——の後見人かつ傳育者ふいくしやだった。エツカルトは常に忠誠を貫き、ハルングの公子たちの父にとつてその生前忠実な相談相手だった。しかし皇帝エルメンリクスにはジービヒなる相談役がいたが、世に広まった不実な助言は全て彼から出た、ということである。皇帝を唆そゐして悪しき所業を犯させたのはこの男だった。そしてエルメンリクスはハルングの公子たちを殺害した。しかしエツカルトは、他の数人の英雄の助け

を借り、エルメンリクスをこれまた扼殺やくせつすることによって、公子たちの復讐ふくしゅうを遂げ、この行為のゆえに絶賛された。ハルルング一族は豊かな財宝を所有していたが、これはある山の内部に呪封くわふうされている。この山はブライザツハ近郊のビュルグレン山ベルグである。そしてこのハルルングの宝をその後忠実なエツカルトの霊がきわめて細心に守り、これを我が物にしようとする人間がだれであろうと戒めた。なにしろこの財宝は他日正統な後裔こうえいの手に戻り、その者をこの地の強大な君侯になす定めだったからである。それゆえ民間にこんな言い回しができた。いわく「あなたは忠実なエツカルト。だれでも戒めてやるんだね」(註)。もつとも、テューリンゲンの地で、ヘルゼル山ベルグの洞窟の前に坐っていたり、妖魔の軍勢の先駆けをして「行き逢う者たちを」戒める忠実なエツカルトがこれと同一人物かどうかは、古き伝承の闇の裡うちにいとも神秘に包み隠されている。

三〇 ツェーリンゲン家の起源

ある王がその領国を追われて、妻子、従者ともども逃亡、うち連れてある山に辿り着いたが、露命を繋ぐのがやつとで、貧寒悲哀のうちにたつぷり時を送った。とうとう王は界限かいがいの土地にこう布告をさせた。いわく。この身の領国を再び回復するために助力してくれる者があれば、皇帝(註)の息女の夫とし、公爵の位を授けよう、と。さて、この山ツェーリンゲンの向こう側に一人の炭焼き男が住んでいて、森の繁みで炭を焼いていたが、ある時、炭を焼いた跡地(註)を片づけていると、溶けた金属の重い塊が見つかった。これは良質の銀だった。炭焼き男がその後炭を焼いていると、またしても全く同じことが起こった。これがずっと続き、まるでこの山が銀を生み出しているようなあんばいだった。こうして炭焼き男は莫大な財宝を獲得した。さて、放逐された王の布告を耳にした男は、蓄えた

銀を一荷取り出し、王の御前にまかり出て、こう言上した。自分は彼の〔義理の〕息子となり、姫君に求婚し、自分の銀で周辺一帯の土地を買い入れて我が物としたい。そして彼、すなわち王にもその全王国を取り返せるだけの財宝を差し上げたい、と。国を追われた王はこれを大層喜び、炭焼き男を騎士に叙任し、息女を妻として与えた。さてそれから炭焼き男は〔なおも〕銀を精錬し、ツエーリンゲンの城塞と町を建設、周辺の土地を購入した。かくして王は彼をツエーリンゲンの公爵とした。その後王は婿殿の財産を使って自らの土地と民を回復、再び強大な君公にして皇帝となった。そして王（「皇帝」）が逃げ込んで御座所とした町と山は、今日に至るまでいまだに皇帝の椅子と呼ばれている。ツエーリンゲン家はといえば、剛毅な一族となり、全地域に亘って大層敬われた。

三一 巨人の玩具

エルザスはプロイシユ谷近傍の荒荒しい滝の畔に古い巨人の城塞の廃墟があり、ニーデック城と呼ばれている。ある時この城から一人のお嬢さんがハースロッホの方角へと山を下って行った。この女の子は城主の姫君で、これも巨人。これまでまだ一度も人間というものを目にしたことはなかった。ところが図らずも、一連の馬で畑を犁き返している一人の耕作者に気がついた。このちっぽけな代物を、とつてもおもしろいわあ、と思ったこの子は地べたにしゃがんで、かわいい前掛けを拵げると、片手で農夫と犁と馬たちを中へさらい込み、腰に巻き付けた前掛けを手でぎゅっと押さえ、走れるだけの早さで急ぎ、ぴよんぴよこ山を登った。ほんの何歩かで山の上に帰り着くと、見つけた獲物に歓声を挙げながら、父親の巨人の前へとやって来た。巨人はちよど卓子について、なみなみと酒を満たした把手付きの大杯を楽しんでいるところだった。娘が喜色満面で部屋に入って来たのを見ると、こう

訊ねた。「おんや、まあ、おまえの前掛けエプロンの中でじたばたしするのは何かね。さあさ、見せてごらん、このわしに。」——「あのね、父様」と巨人の娘が叫んだ。「とつてもすてきな玩具をあたし見つけたの。」——そうして前掛けエプロンの中から、農夫と馬たちと犁を引つ張り出し、それを卓子テーブルの上に並べた。それから玩具が生きていて、うごめき、もがく様子を眺めて大喜びした。「いやはや、娘や」——父親巨人は言った。「おまえ、ほんとにまあけっこうなことをやらかしてくれた。こりやあな、玩具なんかじゃない。これは百姓の一人なのだぞ。全部運んで行つて、おまえがこれを取つて来た、おんなじ場所に戻して来るのだ。」——巨人のお嬢さんは、見つけた物を元のところへ運んで行け、と言われても、その通りになんか全然したくなくて、わんわん泣いた。けれども巨人は怒つて、こう叱つた。「ええい、忌忌いまいましい。このわしにくだくだ文句を申すな。百姓というものは玩具などではないのだ。百姓たちが畑を耕してくれなんだら、巨人たちは飢え死にしようわ。」——そこで巨人のお嬢さんは、自分が、玩具だと勘違いしたものをまた運んで行つて、何もかも元通り畑に置いて来た。

この伝説はドイツの少なからぬ他の土地でも話されている。しかも全く類似した語り口で。テューリンゲン地方のシユヴァルトブルクから程遠からぬブランケンブルク城の話とかグライフェンシユタイン城の話、それからまたオーデンヴァルトのリヒテンベルクの話など、強大な巨人が住んでいたところならどこでも。

三二 墓碑クレイテンシートのの椅子

エルザスに城塞があつて、ロートヴエーダーといつたが、ここにある公爵が住んでいた。公爵には殊の外綺麗な息女が一人いた。ところがこの姫君、綺麗なのに負けず劣らず高慢ちきで、お手を頂戴ちよんたいつかまつらんとやつて来

る、いとも大勢の求婚者たちのただの一人だってお気に召さなかった。そこで、姫君のご愛顧を得られなかったから、という理由で、自らの命を絶つた者も少なくなかったのである。これをやつてのけた最後の求婚者は、この冷酷無情な乙女が（やはり）無情な巖石の中に入つてしまふように、と呪つた。そして、金曜に一回だけ人目に触れるよう出現することが許される、しかし、乙女の本当の容姿では三週間毎にただの一度、二度目は蛇、三度目は醜い墓蛙の恰好でだ、と言つたのである。さて、毎週金曜、姫君は現れて、泉の傍にあるその巖の上で体を洗つたり、水浴びをしたりする。そして自分を救済してくれる者が近づいていくかどうか、四方八方をぐるりと見渡す。敢えて救済に挑もうとするなら、その者は五日の金曜日にかの巖に登らねばならない。すると巖の上に貝殻が一つ見つかる。この中に三つの徴が入っている。すなわち、濃い黄色の蛇の鱗一枚、黄緑色の墓蛙の皮一片、そして黄金色の巻き毛一筋である。救い手はこの三つの品目を懐に納め、携えていなければならぬ。それから次の金曜の真昼刻にまた例の荒れ果てた巖に攀じ登らなければいけない。それも三回もなのである。そして一回目には蛇と、二回目には墓蛙と接吻しなければならぬ。三回目には乙女とである。この、逃げを打つたりせずに蛇および墓蛙と接吻するということが、アウグスト近郊なる異教徒穴の麗しの蛇乙女の場合よりも要求が大きいのだつた。けれども、それをやつてのけられれば、魔法を掛けられた乙女の救済者になり、彼女に安息を齎し、その財宝を授かつて計り知れぬほど豊かになろう。既にこれまでこの徴を見つけ、荒涼とした城の廢墟に勇気を振るつて分け入つた者は少なくないが、二度と再び戻つて来なかつた。思い切つて接吻をする前に、恐怖戦慄して死に至つたにせよ、それとも、接吻を敢行したものの、驚愕のあまり死に抱擁されてくずおれたにせよ。なにしろ、相手は乙女の姿であれば常に若く、決して歳を取らないで、なんとも愛らしいが、墓蛙の恰好だどうにもおぞましく、普通の麵麴焼き籠ほどの大きさがあり、口から火を吐くのだから——いったいだれが接吻などできよう。蛇の恰好で

はこの上もなくおぞましく、干し草締め付け柱(84)ほどの長さ、太さと来ているのだし。かつてある大胆不敵な若者が我慢に我慢を重ねて蛇に接吻した。すると蛇はいなくなつた。次に蟄蛙が来た。これは法外にいまわしい姿だつた。五臓六腑(85)が体の中でぐるりとひっくりかえつた若者は逃げ出した。蟄蛙はというと、どつたんどつたんその後から跳ねて、とうとう蟄蛙の椅子(86)まで若者を追ひ掛けて来た——そして山の上から下へ、若者めがけてなおも一條の火炎を吐きつけた。

三三 粉挽き小屋の熊

エルザスのニーダーブロンとグンタースドルフ地方に粉挽き小屋が一軒あるが、ここではかつて全くもつて面妖(87)なことが起こつた、という話である。熊の化け物が出没したのでさうだ。製粉装置修理人が巡回して来たり、あるいはまた、機械装置に何か故障が生じたので呼ばれた時には、一夜以上小屋にいたたまれないのが常だつた。なしる例の化け物がそういう連中を嫌つたからである。とどのつまり、粉挽き小屋は存亡の危機に迫り込まれ、粉挽きは落ちぶれてしまひさうになつた。なにしろ下働きの若い衆だつて居着かなかつたのだから。ところがある日のこと、びちびちした威勢の良い若者が旅修業でやって来て、粉挽き稼業の専門用語をすらすら並べ立て、けっこうなお給金と上等の食事をいただけりやあ、奉公したいんで、と申し出た。粉挽きは、また人が来てくれたのを嬉しがり、喜んで若者を雇い入れ、次の日の夜、粉を挽いてくれ、と言ひ付けた。新参の若い衆はあらかじめ粉挽き小屋に変化が出るということを聞き込んでいたが、怖がりもせず、真夜中頃呼(88)び鈴(89)で起こしてもらうと、新規に穀粒を挽き白(90)に放り込み、曇(91)からたつぷり一口ぐいとやらかしてから、何枚かの粉袋を下に敷き、横になつて眠ろう

とした。ただし、脇に鋭く研いだ粉挽き小斧(こおの)を置いておいた。まだすっかり寝入らないうちに、主人の部屋の、機械装置へと通じている扉が開き、毛むくじやらの真つ黒けな熊が粉挽き部屋へと踏み込んで来た。そいつはふんふん嗅ぎ回り、まず唐箕(とうみ)のぐるりに爪を立て、それから分離器(セパレイター)のところに行き、階段を鼓輪(こりん)の傍までのし上がり、その時ようやく新参の若い衆に気づいた。こちらは斧を片手に握り締めて、ずうつと熊の行動を見守っていたのだ。角燈(カクデン)が明るく燃えていたので。さあ、熊はしきりに唸りながら片方の前脚を若い衆目掛けてさつと伸ばして来た。若者はすぐさま斧を振り上げ、斬りつけた。すると前脚が床に落ちた。大きく咆哮(ほうこう)した熊は引き返して主人の部屋へと躍り込んだ。翌朝の朝食の席に粉挽きのおかみさんの姿が見えなかった。彼女は床に就いたままで、右の前腕が失くなっていた。そこで若い衆が例の前脚を取って来ると、それは「熊の前脚ではなく人間の」前腕だった。粉挽きの女房は罰当たりの魔女だったのである。粉挽きの妻——時として牝猫(めねこ)に化けて邪な悪魔の所業を働くこともある——に関わるこうした魔女現象はテューリンゲンやザクセンでも数多く語られている。

三四 司教座聖堂(ルケーゼ)王

シュトラースブルク(シュ)の古い大聖堂はフランク族の王クロートヴィヒ(「クローヴィス」)が建設したものである。これは元来木造建築に過ぎず、一〇〇二年にエルザスとシユヴァーベンの公爵だったヘルマン——皇帝ハインリヒと帝冠を争った——によって、ほとんど土台に至るまで焼き尽くされた。カール大帝の作った聖堂内陣(コル)は残ったものの、一〇〇七年暴風雨が吹き込み、建造物の残余は崩れて瓦礫(がれき)となった。さて、一〇一二年皇帝ハインリヒ二世がシュトラースブルクへやって来て、大聖堂の衰亡を嘆き、司教座聖堂(ルケーゼ)たちの修規を閲読させてもらったとこ

ろ、この修規が大層御意に叶つたので、王冠⁽⁹⁴⁾の重みをかなぐり捨てて、我らが聖母様に捧げられたシュトラースブルクの大聖堂で一介の司教座^カ聖堂^ルとなろう、と決心した。ハインリヒの全ての臣下はこれにすこぶる驚倒——なにしる国家は彼を必要としていたのだ——、こうした企てを撤回するよう説きつけた。しかし、その志の敬虔さと修道院および司教管区に対する仁慈のゆえに聖者と呼ばれていた——彼はバンベルク司教管区の創設者でもあった——皇帝ハインリヒのこと、決して意図を翻そうとしなかった。さて、シュトラースブルクには司教がおり、その名をヴェリンハルトといったが、この御仁は、どう説得しても皇帝に計画を思い切らせることはできない、と見て取って、謀^{はか}りごとをめぐらし、聖職者としての宣誓、とりわけ服従の誓いを彼に立てさせた。皇帝がこれをなし終ると、ヴェリンハルトは神により、また神の御名^ミにおいて彼にこう命じたのである。帝冠、および、彼なしでは済まされないこの国家の支配統治権を保持し続けるように、と。皇帝は、うまくしてやられた、と悟つたが、命令に服従した。かくしてその後彼の代わりに他の司教座^カ聖堂^ルが一人、聖母大聖堂で神に仕え、聖務を行い、祭壇で彼の分を歌いかつ祈るといふことになり、司教座^カ聖堂^ル王^{ケイニヒ}と呼ばれた。それから豊かな聖職^カがこの聖堂に寄進された。これなん司教座^カ聖堂^ル王^{ケイニヒ} 聖職^カであった、千と七百年以上も存続した⁽⁹⁵⁾。また、その後一〇一五年に石造のシュトラースブルク大聖堂の礎石を置いたのはヴェリンハルト司教その人である。

三五 聖オッティーリア

その名をアッティヒ殿と呼ばれるある尊大な伯爵がホーエンブルクの城主だったが、その奥方が女の子を出産した。その子は目が見えなかった。このためアッティヒ殿は激昂して怒鳴った。「めくらの子どもなど余は欲しくな

い。そのちびめを連れ去って、頭をどこぞの巖に叩き付けてしまえ」と。そして荒れ狂い続けた。けれども母親はすぐさま乳母を誠実な従者を付けて目の見えない子どもとともに遠方のバルマに送り出した。この町はアルプスの山嶺の彼方なるフリウリにある。バルマには聖母大聖堂があり、アッティヒ殿のいとけない息女はそこへ連れて来られたのである。さて、バイエルンの地にエアハルドゥスという司教がいたが、彼は夢の中でこんな声を聞いた。「バルマの司教座聖堂へと出立しなさい。そこで盲の女児が見つかります。そなたはこの子に洗礼を施し、オッティーリアと命名しなさい」。エアハルドゥスは夢の中で耳にした主の言葉に遲滞なく従い、バルマの司教座聖堂に向かい、子どもを見つけ、洗礼を施し、祝福を与えた。すると、なんと、洗礼している間に子どもが目が開き、物が見えるようになったのである。オッティーリアはバルマの聖母大聖堂に留まり、そこで淑やかな乙女に成長、風琴を上手に弾くことを習い、花卉を育て、課された務めを誠実に果たした。——一方アッティヒ殿は天罰を蒙り、自分が見捨てた子どもを思いやって悔悟懊惱し、子どもを捜そうという衝動に駆られて南国（「リイタリア」へ巡礼の旅に出た。息女の滞在地は知らされていたので、誤りなく道を取り、やがて祈祷中に娘の身に起こったかの奇蹟のことを聴き、ホーエンブルクへ、そして母親の胸へと彼女を連れ帰った。この典雅にして信仰篤い子どもは栄光と富みに包まれたが、こうしたものは全て彼女の心をそそることはなかった。それからまた、姫の美しさ、愛らしさの評判が一带に広まり、御手を頂戴つかまつりたい、と求婚者たちが心惹かれてやって来るようになっても、だれをも顧みようとせず、ただただ救世主の花嫁であらう、と志した。さて、これらの求婚者の中にこの地域の富裕な伯爵がいたので、アッティヒ殿は我が子をこの人に妻として与えようと誓約し、オッティーリアに、これ以上否やを申してはならぬ、と命じた。敬虔な乙女はこれに頗る驚愕し、ひたすら祈りを捧げて慰藉と救済を願った。そしてとうとう啓示を授かったが、これは他でもない、急いで逃げよ、というものだった。さて、花婿が

朝馬に乗って参着すると、花嫁はおらず、どこにも見当たらなかった。騎馬や徒歩の者たちが急派されてヴォゲゼン山地界隈やライン河周辺をあちこち隈無く搜索したが、アッティヒ殿の息女はだれにも見つからなかった。やつと三日後、オッティーリアは小舟に乗ってラインを渡った、それもとことん独りぼっちで、多分天使が渡し守役を務めたのだろう、という消息が齎された。そこで姫の父親と例の伯爵は躍起となつて彼女の行方を探し、遙か遠方にまで及んだ。そしてフライブルク・イム・ブライスガウまで来て、その地の谷間を騎行していると、突然とある山の高みを乙女が歩いているのを目にし、そちらへ向かつて急いで馬を疾駆させた。追跡者たちが我が身の間近に迫つたのに気づいたオッティーリアは、激しく驚き、なにとぞご庇護を、と天に呼び掛けた。そしてとある巖壁のところに来たが、これに行く手を全く阻まれた。ところがこの巖壁は彼女の前でさつと開き、彼女が通り抜けるとその背後で再び閉じたのである。巖の中から清らかな泉が滾滾と湧き出し、追跡者たちはその前に立ち尽くして、自分たちに何が起こつたのか、とんと分からずじまいだった。

さて、改めてそぞろ改悛し始めたアッティヒ殿は、オッティーリアを思いやつて嘆息し、泉の畔に佇み、峻険な巖に向かつてこんな誓言を叫んだ。もしオッティーリアが再び己の許に戻ってくれるなら、自分はこの場所に礼拝堂を一字建立し、自分の城を修道院に変えよう、そしてこれに多大な資産を寄進しよう、と。こうしたことはことごとく実行され、巖から迸る泉はオッティーリアの泉と呼ばれるようになり、病んだ目になんとも素晴らしい効き目を及ぼした。一方オッティーリアは新たにできた修道院の修道院長に就任、病人たちを看護、治療し、この地域全体の守護天使のような存在になり、例の山の裾にもう一つの修道院、ニーダーミューンスターを作らせた。そしていよいよ至福に包まれて安らかにこの世を去ると、聖女として語られるようになり、目の守護聖人となり、眼病を患う人人からとりわけ願を掛けられた。

三六 父と息子

昔上エルザスに一人の伯爵がいた。エーギスハイムのフーゴ殿である。その奥方が子息を生んでくれ、この子は聖なる洗礼を受けてブルーノと命名された。ところが伯爵の胸は、この坊やが自分の種ではない、という忌まわしい猜疑の念に暗澹と閉ざされた。そこで彼は一人の従者に、赤児を森へ運んで行って、殺し、その証拠として心臓を持ってまいれ、と命じた。けれども従者は罪もない赤ん坊がかわいそうでたまらず、こんな殺人をやっていることなど到底できなかつた。そこで子どもを安全に匿うと、のろ鹿の仔を殺して、その心臓を残酷な主君に持ち帰った。少年は成長して、大層偉くなつた。歳月が過ぎ、年老いた伯爵は悔悟の念に駆られた。というのは、自分が以前妄想に囚われて、この上もなく非道な罪を犯したことが明明白白となつたからである。そこでもはやこれ以上故郷に留まっているのに耐えられなくなり、幾つもの持ち城と領国を捨て、巡礼姿でアルプスを越え、聖なる父に己の重罪を告白し、贖罪を課してもらうべく、ローマへと旅した。そして教皇の許に至り、その足元に跪いて自らの罪業を懺悔、深く打ちひしがれて罪の浄めを懇願した。すると聖なる父は高御座から立ち上がり、こう言った。「エーギスハイムの伯爵フーゴ。いとも憐れみ深き神は、あなたの子息ブルーノが死ぬのを望まねば、高き位にまで昇させたもうたのです。そして神は、わたくし、すなわち神の僕のうちの僕を通じて、あなたの残酷な意図をお許しになります。あなたが改悛したことでああなたの贖罪は済みました。身を起こしなさい、フーゴ伯爵。そしてわたくしを抱いてください。あなたに赦免を告げるこのわたくしこそあなたの子息ブルーノ、聖ペトルスの聖なる御座に就いてレオ九世と名乗る者です」と。——年老いた伯爵は夢見心地で、まるで天国の門が自らに開かれたかのような気がした。

三七 大聖堂の時計

シュトラースブルクなる大聖堂には貴重かつ驚嘆に値する時計装置(註)があり、これに匹敵するものは全世界にない。数数の像で飾られたこのすばらしい工作物は高く、また誇らかに目の前に聳そびえている。しかし残念ながらこちらと同じ平面に立っているし、その上もうとつくの昔に動かなくなっている。足台には天球儀の隣に一羽の伽藍鳥ペリカンの姿が描かれており、その上方では暦が見下ろしている。そして暦の中央に認められるのは地球で、その両脇には太陽神と月の女神が立ち、持っている矢で昼の時間と夜の時間を示す。暦の四隅の盾支えは紋章となっている。その上方では、かつて七つの惑星の神神がさまざまな連獣ひに牽かれる車に乗って曜日曜の告知者として運行し、それぞれ異なった連獣が静かに進みながら毎曜日を示したのである。正午には真ん中で動かなくなり、それから再び次に来る連獣に徐徐に場所を明け渡して行つた。またその上方には大きな十五分針があり、傍らには四つの形象、すなわち、「天地創造」、「ヨシャファトの谷」、「最後の審判」、そして「永劫えいこの罰」が示されている。観覧者の右手には時計装置に沿って壁のない階段塔があり、左手には神神の姿で飾られた、形は別だが同様のものがある。装置の天辺には大きな雄鶏おんどりが止まっている。これはかつて時の数だけ啼き、羽ばたきをした。二つの塔の基底部には二頭の大きな獅子ライオンがきちんとした姿勢で坐っており、片方は寶石を鑲ちりばめた胃かぶとを、他方はシュトラースブルクの紋章盾を保持している。中央部右手にあるのはさまざまな装飾を施され、精巧極まりない駆動装置を備えた巨大な時計文字盤で、四季を表す絵に囲まれており、その上には DOMINVS LVX MEA - QVEM TIMEO(註)と記されている。時計はうねりくねる有翼龍ドラゴンで、その矢のように突き出された舌が時の数字を指す。時計文字盤の上方にはもつと小さい円盤があり、これは月輪げりんを用いて移り変わる月齢をかつて正確に示した。その上方では幾つもの盾支えと紋章の

間に生流転する人間の一生の諸相(10)が、かつて出て来た。これらの諸相がむきだしで吊されている十五分毎の鐘を叩いて行く仕掛けだった。そしてその上方には時の鐘が下がっている。十五分の鐘が打たれると、そのつど死神が姿を現して時の鐘を叩こうとする。けれども我が救世主の御姿(み)が死神に行き逢い(あ)い、死神がそうするのを阻む。死神は、一時間が経過して初めて、その時打ちの仕事をを行うことが許されるのだった。これら全ての上に高高と更にゴシック式冠が掲げられている。これには傍らに黙示(もくし)の動物たちを侍らせた四人の福音史家(10)のむきだしの像が付いている。これらの像の上方に楽を奏している二人の天使が立っているが、その背後には実はかつて美しい、響き豊かな(10)鉄琴(クロコケシユニール)が隠されていた。それから大聖堂の時計にはまだまだ少なからず精妙な造形美術品が見られ、これらには意味深い箴言(しんげん)の数々が記されている。この壮麗な製作物を仕上げた親方(マイスター)は、その名をイザーク・ハープレヒトといい、極めて長いこと思索に明け暮れ、それから倦(う)まずたゆまず働いて、遂にこれを完成させ、この装置はその生き生きとした運行ぶりによって全世界を驚嘆させたのである。さて、これが竣工(しんこう)すると、親方(マイスター)は、他の土地でも自分の比類ない伎倆(ぎりょう)を揮(ふる)いたい、と思った。するとかの邪(よこしま)な敵(「悪魔」)がシユトラーズブルク市参事会の面の胸に忌まわしい妬(ねた)みの念を吹き込んだ。こうした驚異の作品は独り我が市のみが所有すべきだ、というのである。参事会のお歴々は、市の権限の及ぶ領域から去ることを親方(マイスター)ハープレヒトに禁じたとしても、親方(マイスター)はシユトラーズブルクを見限るだろう、と考えたので、彼の視力を奪(うば)ってしまおう、と衆議一決した。これが告知されると、聞いた親方(マイスター)は震え上がってこう言った。「もう一度だけわしはわしの時計装置を見なくてはなりません。まだいくらか改良したいところがあるのです。この目が見えなくなったら、後ではもうそれはできませんでな」。それが許可されたので、親方(マイスター)は自分の精妙な製作物に登り、内部に入り込み、しばらく中で何かをした。そしてそれから市庁舎(10)で親方(マイスター)の視力は奪(うば)われた。ところが、なんと——その時突然時計が停止したのである。キリストと死

神と人間の一生はもはや動かなくなり、グロツンゼー 鉄琴 は沈黙、雄鶏は啼かず、時の鐘は響かず、時計の有翼龍ドラッヘは時の数字を指さず、神神は車で運行しなくなり——何もかも止まったままになった。かの残酷な所業が加えられてからほどなく、「天国に召された」マイスター 親方ハブレヒトの盲めしにされた両眼は開かれて久遠くおんの光を見た——が、市参事会は、時計装置を再び動かしてくれる職匠たくみを求めて八方へ使者を出し、徒勞に終わつた。昔から近代に至るまで、再三再四、たくさんの方がやって来て、たくさんの方が装置の内外をあちこち点検したり、入念に手を加えたりしたが、だれ一人動かすことができなかった。——彼らはこの装置を直すというより壊したのである。かくして大聖堂の時計装置は今日なお止まったままである。すばらしい見物みものではあるが、動きはしない。指針はいまだに、伎倆に長けた親方マイスターにあの残酷で恩知らずな背信行為が犯されたその日とその時刻を示している。

三八 シュトラースブルクの射撃祭とチューリヒの粥かゆ

シュトラースブルクの兵器庫には青銅でできた深鍋ふかなべが一つ陳列されているが、これはその昔チューリヒ市(註)が粥を満たして贈呈したものだ。粥はチューリヒでこしらえられて、シュトラースブルクに着いた時にはまだ暖かかった。そもそもこれはこういうしだいである。シュトラースブルク市民は大射撃祭を開催、これにライン河畔、ラインプファルツ、エルザス、およびスイスの近隣諸都市を全て招待した。これらの都市の市民の方も使者を送られると、夥おびただしくやって来て、祝祭に参加した。最も遠かったのはもちろんチューリヒの射手たちで、三日の旅路だった。さて、チューリヒに一人あつぱれな好漢がいて、その名をヴェールトのハンスといったが、これが愉快な趣向を考へ出した。いわく「どうだ、水路でシュトラースブルクに出掛けようや。そうすりゃ車輪も馬も痛めずに済まあ

な。それも、首尾良く行けば、一日でやってのけよう。そうしてだな、ご当地でこしらえた熱熱の粥かなんかをシユトラースブルクの連中への土産にするのよ」。この提案は大喝采を浴び、準備万端調った。そして粥が夜中に煮られ、青銅製の暖かい深鍋に移され、この鍋は熱い砂の中に置かれた。それから、まだ星が輝いている内に、一行は急いで乗船した。船からはチューリヒの徽色である白と青の三角旗が幾旒も陽気にはためき、一行はリマール川の早い流れの上を飛ぶように進んだ。ご機嫌上上のスイス人射手たちは、少なからぬ難所をやり過ごしつつ、リマール川からアール川へ、アール川からライン河へと入った。地獄の鉤では大胆に早瀬と砂州を通過。幸多きこの小さな船がラインフェルデン指してやっていると、すでにその航行の知らせが到達していたので、市壁から朝飯の際の飲み料にと銘酒をぎっしり入れた籠が吊り下ろされ、てきぱきと受け取られた。バーゼルの鐘が十一時を打った時——時刻はようやく十時というわけだが——チューリヒ人たちの乗ったこのめでたい船は早くも橋に近づいた。そこに整列した兵たちとひしめく群衆から心からの喜びを籠めた盟邦の挨拶がどっと湧き起こってこれを迎え、射手たちは轟然と答礼の発砲をした。しかし船はしょっちゅう交替する屈強な漕ぎ手の權捌きにぐいぐい進められ、ラインをずんずん矢のように下って行った。船の前部、舵權のところ(⑩)で懸念しながら見張りに立っているのはかのヴェールトのハンスで、船の中央に坐っているのは射撃祭におけるチューリヒの隊長かつ代表者に選ばれたカスパー・トーマンだった。こうして先へ、また先へと進み、ノイエンブルクを過ぎ、ブライザッハを過ぎ、ラインの何百もの島島と河洲と葦原を抜けて行った。なるほど、夕暮れが深まりだし、確かに、燃える日輪がヴォーゲゼンの青い山並みに沈みだした。が、しかし、遙か、遙か彼方の、限らない河谷の広がり(⑪)の向こうで燦めいた紅の火の柱は何か。太陽に接吻されて我らが聖母大聖堂の巨大な塔が一瞬赤赤と燃え上がったのだ。船人たちは歓呼して燦めく遠くの目的地に挨拶を送った。けれども、目標と船との間には相変わらず数時間が横たわって

る。昼は過ぎ去ろうとし、夜が始まりつつある。月が夕空に明るく丸く出ている。大聖堂は幽霊船のように浮かび上がり、射撃が行われる草地からは群衆のくぐもったどよめきが聞こえて来た。今や船の者たちも高らかにツインクや喇叭（英）ボザウネ フレーテ、笛やトランペットの吹奏を始めた。――さあ、遂にシユトラスブルクに到達したのだ。そして船はグルデン塔トゥルムで接岸。一日で果てしない距離をこなし、深鍋の粥をまだ温かいままで、丁度うまく口に合う状態で持つて来るといふ前代未聞の壮挙を成し遂げた、疲れを知らぬ河下り人たちを歓呼の叫びが迎えた。これは全く莊重な儀式で、チューリヒからの賓客たちは音楽と旗の先導で左官業組合集会所マウツァーレムトヴェーグに案内され、心から歓待され、楽しい饗宴でもてなされた。例の粥が平らげられた後で、チューリヒ人らは休息するよう黄金牡角鹿亭ギルドルトイ・ヘルンヌへ連れて行かれた。翌日の射撃祭では彼らはあらゆる客たちから大いに尊敬された。そしてかの深鍋は永久に保管されることになった。

三九 ブレッテンの小犬

「ブレッテンの小犬みたいな目に遭う」とはラインプファルツの表現だが、これは小都市ブレッテンの象徴を指しており、この言い回しは、信義を尽くしたのにひどい仕打ちを受ける、という意味である。昔ブレッテンに一人の男がいて、信実忠義な小犬を飼っていた。男はこの小犬をせっせと躡しづけていろいろな仕事や芸当ができるようにした。特に使ったのは肉を買いにやらせること。金の包みが入って、その上に何が欲しいかを書いた紙切れが乗っかってきた小籠こかごに、肉屋で腸詰ソーセージめと肉を入れてもらった小犬は、ちよつとでもそれに口を付けようとしなくて帰って帰り、肉屋には毎度どっさりクロイツァー銅貨を提供したものの。ところがやがてこんなことになった。肉屋は新

たに職人を一人置いたが、この男はカトリック教徒だった。一方「小犬の飼い主の」男の方は新教徒なので、いつものように自家用の肉あるいは腸詰めを取り寄せようと、金曜日にも小犬を肉屋に使いに出した。肉屋の職人はこれに腹を立て、こう言った。「見てろよ、邪宗徒め。さまざま相応の輪型腸詰めを送り付けてやるわ」。——そうして小犬を捉えようと、肉捌き台に載せて、くるりと巻いたその小さな尻尾を無情にも叩き切り、それを籠に入れた。哀れな動物は籠をくわえると、血を流しながら家へ駆け戻り、主人の前に籠を置くと、ころりと倒れ、くんくん啼くと、四肢をつっぱらかして、死んでしまった。ブレットテンは全市を挙げてこの背信行為に憤激、職人は即刻市域から追放され、尻尾のない小犬の像が石に刻まれて市門の上に掲げられた。更にその上には忠誠を顕彰する意味の冠が掛けられた。これぞブレットテンの象徴で、この小都市はかの偉大なるフィリップス・メランヒトン生誕の地である。

四〇 トリフェルス

ランダウ近郊アンヴァイラー河谷を見下ろして堂堂たる皇帝直属領の城塞トリフェルスが屹立していた。巷間伝えられるところによれば、インゲランドの獅子心王リチャードは皇帝ハインリヒによつてここに囚われていた。とのこと。リチャードがどこへ行つてしまつたのか、だれにも分からず、インゲランド王国では彼の帰還を大いに待ち望んだ。さて、リチャードにはある忠義な家臣がいたが、これは宮廷恋愛歌人で歌唱と音曲の伎倆に殊の外精通していた。この者は実直な兵士の一隊を引き連れ、至るところ隈無く王を搜索しようと出立した。一同は、民草が醸出した黄金や装身具・宝石類などから成る豊かな財宝を、身代金として携えた。リチャード王自身もまた

宮廷恋愛歌人^{ミシネゼンガ}だった。ブロンデル——かの忠義な家臣はそういう名だった——は王の作った唄の数を心得ていたし、また、歌うこともできた。王が囚われの身となっているのではないかと、思えた少なからぬ城塞の外で、ブロンデルは数数の唄を歌った。もし王が自分の歌声を耳にしたら、やはり歌ってそれに応えてくれるに違いない、としっかり予測して。けれども堅固な城壁の背後はひっそりかと静まりかえったままだった。既に彼はドナウ沿岸を上下し、ライン河周辺どこもかしこも探し、かつ歌った。と、ある時こんなことを聞き及んだ。ランダウの町——当時神聖ローマ帝国の装身具・宝石類はここに保管されており、これらは皇帝フリードリヒ自らが暫時トリフェルスに運び上げさせ、収蔵させたものである——近傍の三つの巖角^{いむかど}（「三つ巖」^{トリフェルス}）上になんとも巨大で堂堂たる皇帝直属の城が立っている、と。そこでブロンデルは、神聖ローマ皇帝が我が王とその諸卿を虜^{よび}にしているのはこのような城しかない、と考え、手の者たちを従えてその地へおもむいた。そして城壁の周囲をひそやかに探り歩き、幾つもある頑丈で高い塔——通常虜囚はこうした塔の底や地下牢で苦しみを味わわれているのだ——の基部でリチャード王しか知らない唄の数を歌った。すると——やれ、嬉しや——やつのことで、トリフェルスの塔の壁の内側から同じ調べで応答の唄が洩れ出たのである。——ブロンデルの胸は高鳴った。我がリチャード、我が王が見つかったのだ。そしてその後間もなく王は拘留からも解放された。

ドナウ河畔のデュレンシュタイン^(註)の城についても同じ伝説が行われている。ここでは廢墟の累累たる巖石^{がんせき}の中の一つの穴があるのを見せられる。オーストリア公レオポルトがかの勇猛果敢な王を虜にしておいたのはこの穴の中だったのだ、とのこと。

四一 カイザースラウテルンの赤髭デア・ロートバルト

カイザースラウテルン近郊に計り知れない深さの巖窟がんとらうがある。これについて民間には一般にこんな伝説が語られている。フリードリヒデア・ロートバルト赤髭帝がトルコにおける虜囚から帰還すると、カイザースラウテルンに居を定めた。この地に城を築くと、狩猟に、また、その美しい湖——今日なお、皇帝に相応しいと呼ばれている——では魚獲りに耽ふけった。皇帝は城の近くの動物園であらゆる種類のすばらしい異国の鳥獣を飼育した。湖で彼は一度大きな鯉こいを捕らえ、指に嵌はめていた黄金の指環ゆびわをこの鱗ひれに差した。この魚はその時から皇帝が復活する日まで捕獲されないままとなっている。とうとう皇帝は去ったが、どのようにしてかを言える者はなかった。彼は長い間かの深い穴の中に呪封されているのだ、その地底でより良き時節の到来を待ち焦がれているのだ、との話である。城中には長いこと皇帝の寝台が保存されていた。四本の鉄の鎖に吊されて。毎夕きちんと寝具が整えられるのだが、毎朝それが乱れていた。そこで、だれかがそこに臥ふしたのだ、ということがはつきり分かった。かつてカイザースヴェールターで二匹の鯉が捕らえられたが、これらは頸くびと頸くびを幾つもの指環と一本の黄金鎖きんで結ばれていた。記念にその姿はメツツラー門の石に刻まれた。

ある時一人の男が、皇帝が呪封されている、という例の大きく深い洞窟の底を探りたい、と思い、綱で下へと降ろされた。上で鈴に繋がっている紐を一本携えて。下に降りると、皇帝がおそろしく大きな髭ひげを生やして黄金の肘ひじ掛け椅子に坐っているのを見た。それからぐるりを眺めると、大きく広い演武場が目についた。そこにはたくさんの武裝者が立っていた。皇帝は男に向かつて頷うなづいて、しゃべるでない、と身振りした——そこで男はぞつとして合図の鈴を鳴らし、すぐさままた引き揚げられた。洞窟から出ると、男は自分が何を見たか人人に告げたが、以

後、二度と再び降りようとはしなかった。

山の胎内にいる魔法を掛けられた皇帝の話はドイツの地一円に広く流布している。テューリンゲン地方で最も盛んなのはキユフホイザーに纏まとわるものだし、ザルツブルク近郊ではウンタースベルク山中となっている。他の場所にもある。ただし、呪封まじされていて、いつの日か復活する、と伝えられているのは、カール大帝とかカール五世のこともある。

四二 舟に乗る修道士たち

かつてシユパイアー(註)で一人の漁師が大河ラインの岸边にやって来て、夕方遅くに網を水中に入れ、魚梁うおやなを置き、小舟に乗って岸から岸へと行き来していた。すると褐色の修道服を纏まとった男が向こうからやって来たので、漁師は挨拶した。「漁師よ」と修道士は言った。「わたしは遠方からまいった使いの者。向こう岸へ渡りたいのだが。」——「よろしゅうござんすよ」と漁師は言つて、修道士を渡してやった。漁師がまた元の岸に戻ると、そこに五人の別の修道士が佇たえずんで彼を待ち受けており、「渡してくれ」と言った。——「あんたがた、なぜまあこんな夜遅くに旅をなさる。それにあんたがたから骨折りの礼をいただいてもよかりそうなものだ」とこちら。——「漁師よ。なんとも是非もない仕儀でな」と修道士たちは答えた。「我らは諸人に憎まれておるのだ。どうか後生だから我らに向こう岸へ渡してくれい。」

それまで大河は静かで、夜空は明るかった。漁師は男たちを自分の小舟に乗せ、水棹みさおを突ついて岸辺から離れた。すると辺りには見る見る暗くなり、空は暗澹かんだんと変わり、大河は波濤はとうをうねらせ、嵐が轟轟ごうごうと吹き荒すび、泡立つ激浪が

船縁ふなべりを越えて中に打ち込んで来た。「こりやまあ、なんてこった」と漁師は叫んだ。「今しがたまで空は綺麗に晴れていたのによ。神様、お助けくださいれ」。——「おぬし、何をわめき、祈ってなどおる。漕こぎもせんで」と修道士の一人が舟人ふなびとを叱り飛ばし、彼から權かたをもぎ取ると、打ちのめしたので、漁師はくずおれた。修道士たちは今度は急いで自ら流れを漕ぎ渡り、対岸に着くと、姿を消し去った。漁師が我に返ると、もう夜が白みだしていた。そこでやつとので、もう一度河を渡り、自分の小屋へ辿たどり着いたのである。

ところで修道士たちの取った道筋を一人の使いの者がやって来た。この男はシュバイアーへと志していたのだが、同じ修道士たちと行き逢あった。修道士たちは一輛いちりょうの車に乗っており、その車は黒い布で覆われていて、車輪が三つしかなかった。車を牽ひいている馬たちには足が三本しかなく、御者は悪魔の鼻をしていて、焰ほのおの鞭むちを持っており、車の周囲には焰が揺らめいていた。使いの者は清めの十字を切つて神のご加護を祈り、目撃したことをシュバイアーの市参事に報告した。このことから人人は、ドイツの諸侯の間に大変な抗争が勃発ぼつぱつする、と推量した。こうした抗争には昔も今も決して不足はない。

四三 シュヴァーベン 鉢シユツセル

シュバイアーの大聖堂広場にある、切石でできた三段の大きな台座の上に、大きく、深く、丸い石造の鉢が置かれていている。遠い昔の洗礼盤かも知れない。パウリーネンツェレにある修道院所属教会の廢墟の前にそういうのが一つあるし、他の土地でも似た物が見当る。——この鉢の縁のぐるりは黄銅で铸たラテン語の詩句から成る銘文で囲まれている。この水盤はかの地ではシュヴァーベン 鉢シユツセル⁽¹⁶⁾と呼ばれるが、だれもなぜなのか知らない。しかしな

がらシユパイアーではかつてこれを風変わりな用途に使った。新たに選ばれた司教がこの地に着任しようとする場合、ただちに市内に迎えられるのではなく、まずは市門の外に控えさせられた。しかも、この都市の特権と自由を侵害しない、いいや、それどころかむしろ、堅持する、と誓わなければならなかった。そしてこのことが文書と印章で誓約されて初めて、市参事会は司教に市門を開いた。しかし、それでもなお、扈從こじゅうの兵のうち武装して司教とともに入市を許される者は五十人以上であってはならなかった。そして次いで門は司教の背後で閉ざされた。その後司教は祭服を着用、市参事会員たち、市民一同、それから自分の伴の者に付き添われて、大聖堂広場のシユヴァーベン 鉢シユツセルのところまで行く。そこで一山いちざんの僧たちが新たな司教を迎え、盛大な儀式に綺羅を尽くし、天蓋をかざして司教を大聖堂の中に導くのだが、司教は葡萄酒フワイシユを運んで来させ、入るだけシユヴァーベン 鉢シユツセルに注ぎ込ませるのだった。これはだれでも好きだけ飲むことができた。飲みたがる者はいつも夥おびただしかつたので、葡萄酒は際限もなく鉢に注がれ、その量は丸丸一フーダー⑩、あるいは二フーダーにも及んだ。民衆はしばしばがぶ飲みして泥酔した。これを飲むためにはるるここまで旅をして来た者も少なくなかった。そして鯨飲したあげくなんと惨憺さんたんたる気分になった。そこでこんな言い回しが生まれた。つまり、だれかが飲み過ぎてその報いを痛感していると、「やっこさん、シユパイアーへ旅してらあ」というのである。もつとも、これは同地にあつた皇室裁判所への旅を意味しているのだ、との説もある。つまりそこへ出掛けた連中は——「二日酔いの場合と同じく」哀訴嘆願これしきりだつたわけだから。

四四 シュバイアーの弔鐘

皇帝ハインリヒ四世はまことに悲劇的な最期を遂げた。彼の遺骨もシュバイアーに懸うているが、それは死後すぐさま当地へ来たわけではない。玉座と領国から追放された彼は、自分の聖なる先任者ハインリヒ二世が、シュトラーズブルクの大聖堂で世を終わりたい、との意図を持ったように、シュバイアーの大聖堂で司教座聖堂参事の聖職に与りたい、と考えた。しかし、この大聖堂を建立し、豊かに荘厳した彼ではあったが、今となっては、ハインリヒ二世のように聖職を一つ設け、寄進することはできなかった。これは与えられなかった。そして司教のゲーブハルト——皇帝だった折ハインリヒ四世が自身司教の位に就け、承認してやった男——は彼を迎え入れることを拒んだ。皇帝は嘆息して、こう言った。「神の御手なり。神の御手が朕の上に重く置かれている」。——そして嘆き悲しみながら立ち去った。そこでこのような伝説がシュバイアーでは語られている。老いた皇帝が貧困の裡にとうとうマース河畔のリュッティヒで亡くなった時、大聖堂の皇帝の鐘がひとりでに鳴り始め、他の全ての鐘も同調して響き豊かに唱和した、と。民衆は馳せ集って叫んだ。「皇帝がお亡くなりになったのだ。崩御されたのだ。——だが、どこでであろう。いずこで逝去あそばしたのか」。——だれ一人知る者はいなかった。リュッティヒの司教は、恩知らずのシュバイアーの司教ほど冷酷ではなかったから、故人を相応の敬意を払って埋葬した。しかしハインリヒのひとでなしの息子、皇帝ハインリヒ五世はこのことを聞くと、リュッティヒの司教に、埋葬された者の柩を自身の手で掘り出すよう宣告した。故人は破門宣告を受けており、破門宣告を受けた者は聖別された土で覆われてはならない、との理由で。そこで亡くなった皇帝は柩に入れられたままマース川のある島に置かれ、だれも香華を手向けず、だれも心に懸けなかった。けれど、なんと、一人の修道士——いずれの人かだれに

も分からなかった——がその島へ渡り、柩の上で祈祷をし、死者へのミサを執り行い、鎮魂歌レクイエムを歌い、これをずっと続けた。遂にハインリヒ五世がそのことを耳にし、父の遺骸の入った柩をシュパイアーに運ばせた。さて、柩を大聖堂の王の内陣ケイニヒスコールに埋葬せよ、ということになると、司教はこれを拒んだ。ローマなる教皇がドイツ皇帝の遺骸を破門宣告から解かないうちは、と。これが五年続いた。そういうしだいで皇帝ハインリヒ四世の柩は長いこと埋葬されぬまま、聖アーフラ礼拝堂ザンクトに置かれていた。しかし、皇帝ハインリヒ五世もついに神の御手がいずこにあるやを思い知らされるに至った。なぜなら、彼は嗣子ができずに終わったし、父と同じく教皇から破門宣告を受けたからである。彼が死んだ時、シュパイアー大聖堂の塔から小さな鐘が一つひとりで高く鋭い音で鳴り響いた。——他の鐘たちは唱和しなかった。そして、小さな鐘がなぜ鳴ったのか、だれにも分からなかった。民衆は馳せ集い、お互いに訝いぶかり合つた。いったいどこのだれが〔この世から地獄へ〕連れ出されたんだらう、例の哀れな罪人つみびとの小鐘こがねが鳴っているとはなあ、と。

四五 ヴォルムスのユダヤ人たち

祝福されたライン河の畔ほとりにあるヴァインガウおよびヴォンネガウの真ん中、プファルツの中枢に昔の数数の民衆がいと古きヴォルムス（註）を建設した。かしこの地には我が主キリストのご生誕前六〇〇年ほどの時代すでにユダヤ人が居住していた。彼らは自分たちの父祖の土地、パレスティナと交流していたのだが、エルサレムの預言者たちが彼らに対し、男たちがエホヴァの掟に従つてエルサレムでの三つの大祭をもに祝えるよう、そのような僻遠へきえんの地から立ち去つて来るべきだ、もし帰つて来ないのであれば、神罰が当たるであらう、と命ずることを思いついた

時、ヴォルムスのユダヤ人たちはエルサレムの最高会議(12)にこう返書したを認めた。そなたらは約束の地に住んでいる。して我らは約束の地に住んでいる。そなたらは神殿を持つている。して我らは神殿を持つている。そなたらには神の都があり、我らにはそれがある、と。——これらユダヤ人の墓地は、デア・ハイリケ・ザント聖なる砂と呼ばれた。そこにはエルサレムからヴォルムスへ運ばれた砂が分厚く撒かれていた。彼らの富ならそれくらいのことのできたのである。エルサレムのユダヤ人たちが救世主をはつげ磔はつげにしようとした時、ヴォルムスのユダヤ人共同体はそんな意図は持たず、むしろ真摯しんしな書簡を送ってそれを諫止かんししようとした。このことは後に善果を結んだ。というのは皇帝たちが彼らに大きな自由を与えたからである。そこで帝国にはこんな諺ことわざが行われた。いわく「ヴォルムスのユダヤ人たちはいいユダヤ人たち」。彼らは自分たちの中から選んだ一人の長を持つていた。これはユダヤ人司教と呼ばれた。彼はドイツにいた三人の、すなわち、ヴォルムス、プラーク（「プラハ」）、フランクフルト・アム・マインなる最上席ごうせきの師たちの第一人者だった。

四六 ダールベルク一族の話

ヴォルムスを発祥の地とするダールベルク一族もいと古き家柄である。その神話的系統樹の根は太古の昔にまで、エッサイの根(13)に至るまで深く延びている。一人のダールベルクが、エルサレムがテイトウス(14)によって滅ぼされた後、第二十二ローマ軍団とともにヴォルムスに来たって、そこで新たな一家を創設、ヴォルムスの町の市民軍隊長ともなった、と言われている。彼はたくさんのユダヤ人を奴隷として連行、そのうち三十人を銀貨一枚でヴォルムスの町に売った。中世の時代、ダールベルク一族の当主はヴォルムスの財宝管理官ツァーという尊称を受けた。そして

彼らは自分たち一族のいと古き系譜を真剣に擁護した。かつてダールベルク一族の女性の一人がヴォルムス近郊のウーンザール・リッフルラウ・ミセルグにある修道院へ馬車で行くこととした。ここでは聖母の乳という極上の葡萄酒ができる。さて、御者はこのご婦人がどこへ行きたいのか知らなかったもので、お伺いを立てた。すると相手は大層誇らかにこう言った。「リープフラウエンのおば様のところへよ。——「おば様」というのは処女マリアのことだったのである。ダールベルク一族は大いに繁栄したので、ヴォルムスではある小路が彼らに因んで財宝管理官小路と呼ばれたほどだった。これらヴォルムスの財宝管理官には神聖ローマ帝国の宮廷使丁、すなわちユダヤ人が直屬していた。そしてドイツ王や皇帝がその戴冠後貴族の子弟を騎士叙任式によって騎士に昇進させるたび、伝令官が参列者全ての前で「ダールベルクはこれなきや」と声を張り上げて問うのが恒例だった。

四七 ヴォルムスの象徴

ヴォルムスなるいと古き我がリープフラウエン・ミセルグの西側正面入り口のところに、城壁冠を被り、奇妙な四本足の動物に乗っている女性のかなり小さい像が見られる。——これはヴォルムスの象徴の一つと称されており、その由来には諸説ある。この女人像はヨハネ黙示録のかのバビロンの女を表している、と言う者が少なくないし、凱歌を挙げるキリスト教会だ、とする者もある。また、これぞアウストラシア王ジークベルトの妻で、齢八十歳を閲した後、その権勢欲のために恐ろしい懲罰を科されたブルンヒルトなり、と唱える連中もある。ブルンヒルトは三日の間拷問されたあげく、一頭の駱駝の背に乗せられ、全ての民衆の前を嘲りの的として引き回され、最後に牡の悍馬の尾に縛り付けられ、まっしぐらに引きずられたのである。もう一つの象徴は奇妙な石像として大聖堂の外に

ある。これは悪魔と悪魔の祖母様ばあさまを表しており、しかも可愛らしい小天使が祖母様の頭から、その名を挙げるのははばか ⁽¹³⁾ 憚られる物を取りのけようとしている。

更に大聖堂から西、聖ザンクトアンドレアス門に向かう広広とした通りに巖塊がんかいが一つあるが、これはラインの島で、昔の英雄叙事詩集によって名高い薔薇ローゼンガルンの園から、ある勇士が町の中へと投げ込んだもの。そこから遠からぬところにかつて一本の棒が保管されていて、長い間見ることができたが、これは織り機の巻軸まきくらいの太さで、先が尖っていて、二十三ヴェルクシューヴェルクシューの長さである。伝説によれば、これは角肌のジークフリートジークフリートが龍を打ち殺した織り機の巻軸の由。仔細は民衆本フォルクスブーで読むことができる。その昔はまだ他に六十六ヴェルクシューの長さの巨大な棒が大聖堂に保管されていた。それからまた、ヴォルムスの大火に至るまで長年の間角肌のジークフリートの墓も見物きた。

四八 ラインの王女 ⁽¹⁴⁾

遙かな昔、古きヴォルムスはブルグント王国の首都でもあったそうな。ある漂泊ジプシの民の女が薔薇ローゼンガルテンの園の島から小さな浴槽バスごと一人の王女を盗み出し、ラインを越えて運んで行った。この子がいずこへ連れ去られたか、だれにも分からなかった。この子の父親は悶死もんしし、この子の母親は心痛のあまり危うく亡くなりそうになった。それから十八年が過ぎ去った。ブルグントの王子「攪わられた王女の兄」が騎馬きばでとある森を通っていると、一軒の旅籠屋はたごを見つけたので、立ち寄った。葡萄酒ブドウを所望したところ、麗しい乙女がそれを持って来た。王子はこの乙女が至極お気に召した。それから王子が洗足のための湯を頼むと、娘は摘み立てのさまざまな緑の葉草を入れた湯を仕度

し、それを小さな浴槽に入れて持つて行った。ところで旅籠屋の女主人は醜い顔をした年寄りで、褐色の肌をした女だったが、娘にがみがみとひどい物言いをし、だれとは知らぬこの騎馬の青年に向かつて、あの小娘はただの拾い子で、このあたしがもう何年も何年も前に引き取つて育て上げて、女中にしたんでございますよう、としゃべつたもの。しかし、王子が小さな浴槽をつらつら眺めると、それにブルグント王国の紋章盾が刻まれていたのでびっくりし、心中こう独りごちた。我が一族の紋章の付いたこの小さな浴槽がいったいなにゆえかようないふせき旅籠屋にあるのだろうか、と。そして心に浮かんでは、何年も前に自分のちいぢやな妹が沐浴してゐた小さな湯船もろとも薔薇の園から消え失せた、と聴かされたこと。それから、これも思ひだした。母君がしげしげこう物語つたことを。そなたのちいぢやな妹は頸筋に徴がある、と。そして同じ徴を王子はすぐさまこの婢女の頸筋に見つけたのである。そこで彼は、愛しい妹よ、と声を掛け、抱擁した。そして女主人が部屋に入つて来ると、そも何人から、して、いづくから、この高貴な姫の身を引き取りたるぞ、と問い質した。女主人はひどく愕然とし、震え上がり、蒼ざめ、がつくり跪いた。この女は、侍女がほんのちよつとの間その場を離れた隙に、子どもと小さな浴槽を持ち逃げし、小舟に乗つて急いでラインを渡つたのだ。

そこで王子は剣を抜き、そのすこぶる鋭利な剣で、邪な女主人の片耳を刺し貫いたので、切つ先がもう片方の耳から突き出した。それから王子は乙女を小さな浴槽もろとも愛馬に乗せ、ヴォルムスなる母君の許へと駒を進めた。王妃は、この一組がなんとも奇妙な様子でこちらへ向かつて来るのを目にすると、子息にこうことばを掛けた。「そなたが連れてまいつたのはどういふ娘御なのですか。その娘御は小さな湯船を携えておいでだね。まるで赤ちゃんでもいるように」と。——「母上、わたしが運んでまいつたのはその辺の娘ではなく、母上が失くされた御子、わたしのいとしいちいぢやな妹。それからこの子が入つたまま十八年前母上の御許から盗まれたかの湯船も

ともにこれに」。——こう言われて王妃が歓喜のあまり失神し、それから再び二人の子らに抱かれて意識を取り戻すと、三人は揃って主を誉め讃えた。

四九 オッペンハイム近郊のスウェーデン柱

オッペンハイムから程遠からぬリート町のライン河畔だが、石段の上の台座にしつらえられた四個の球に支えられて方尖塔オベリスクの形をした高い柱が聳そびえている、というか、聳そびえていた。⁽¹⁵⁾その先端には、頭には胃かぶを被りその上に王冠を載せたスウェーデンの紋章である獅子ライオンが、坐った姿勢で前脚のそれぞれに剣と十字架ライヒスアプフェルの付いた地球儀グロブを握にぎっているのが載っていた。国王グスタフ・アードルフ(16)がフランクフルトからダルムシュタット経由で、山街道ベルクシュトラーセに沿ってライン河へと行軍、四人の忠勇な部下とともに一隻の小舟に身を託し、ロックシュタットから船出して一帯を検分するためにラインを航行した。しかし、これらスウェーデン人たちは間もなくオッペンハイムの周囲に陣を張っていたイスパニア軍の前から引き返さざるを得なくなった。けれども大胆不敵なスウェーデン王はライン右岸沿いの村村の納屋の門を外させ、筏いかだの代わりにこれらの納屋の門に乗せて同勢を渡河させ、諸陣營を攻撃、オッペンハイムを急襲、奪取した。この勝利の記念として国王グスタフ・アードルフは獅子像ライオンを戴いたたくく柱を建てさせたのである。さて、後にこの剛毅ごうぎなスウェーデンの英雄がリュッツェンで斃たおれると、皇帝軍が再びこの地方を占領した。そこで皇帝軍のある士官が、危険がないわけではなかったが、かの剣を獅子ライオンの前脚からもぎ取ろうと、この高い方尖塔オベリスクに攀よじ登り、次いで後にこれを勝利の証あかしとして皇帝フェルディナント二世の許もとに持参した。大層な褒美、ひよっとしたら〔頸くびに掛ける〕黄金鎖きんぐざりでも頂戴ちやうたいできようか、と期待して。しかしながら皇帝はこの献上品に殊

外逆鱗げいりきんして、この士官にこう申し渡した。「偉大で剛毅な英雄の記念碑から何かを奪い、これを辱めようなどと、そのほう、よくもまあ企めたものよのう。そのほうに相応なのはそもそも「頸に掛ける」とはいっても」盗賊に遣わす頸絞め縄じゃ。——かくしてスウエーデン柱シュウエーデンゾイレの獅子ライオンはもう一度剣を持たせてもらい、スウエーデン柱も、その後ラインの波浪と流水が傍に迫つてどうにも危うくなつた時、撤去されて、もつと安全に内陸へ移されたのである。

五〇 ジーゲンハイム

マンハイム市の近く、同市からハイデルベルクへ向かう街道沿いにゼッケンハイム村がある。以前は勝利邑ジールンハイムで、その名は無敵侯デア・シークハフテと添え名された選帝侯クイアフュルストにして、宮中伯プファルツラーフフリードリヒ一世が主のご生誕後一四五二年ギーゲンハイムの野で贏かちえた大勝利ジックに因む。当時戦場に記念の碑銘を刻んだ比較的小さな十字架が立てられた。碑銘にいわく、選帝侯クレームルストフリードリヒは、メッツの司教ゲオルク、バーデン辺境伯レンクゾーグカールおよびヴュルテンベルク伯ウルリヒを相手に勝利した、と。その際若き勇敢な勝利者は敵の全て、すなわち、バーデン辺境伯カール、ヴュルテンベルク公ウルリヒおよびメッツの司教ゲオルク、それから二百と四十人を下らぬ伯爵や貴族を、夥おびただしい軍兵ぐんひょうどもとともに捕虜にした。屍しかばねとなつて血みどろの戦場を累累おほつた兵たちは勘定に入れずに、これぞ確かに勝利と申せよう。宮中伯プファルツラーフは虜とりこたちを全てハイデルベルクへ連行させ、敵から奪取した数数の軍旗ハイルグ・ガイスト・キルヒを飾らせた。捕らえられた諸侯はというと、地位に相応ふさわしく処遇され、きちんと世話をされ、夕方には彼らのために豪華な饗宴が用意された。食卓には狐獸フウイェン狐鳥肉、魚、添え料理、葡萄酒が満ち溢れていて、何不足なかつた——ある

一品を除いては。選帝侯クレーアフェルストは捕虜たちの許に歩み寄り、「ささ、ご遠慮なく、ご存分に召し上がられい、かくもせわしない一日を過ごされた後とあつては、皆様のお口に合うことをござろう」と勧めた。しかし、だれも食べようとせず、一人がこう言った。「選帝侯閣下、麴せんていこうが来ておりませぬ」と。——「ほほう」と選帝侯は応じた。「それはお気の毒に。我が臣民と同様のご境涯よの。皆様がたと皆様がたの軍兵どもが、麴せんとする穀物を悉く我が臣民から奪い、燃やしてしまいました。畑にあった穀類すら容赦することなく。されば、いずこから麴せんが手に入りましょうや」。

捕虜たちは莫大な額の身代金を積んで解放されたが、だれもがジーゲンハイム近傍でのあの一日とハイデルベルクにおける饗宴を生涯忘れることはなかった。

五一 イエツテン・ピューエル 王の椅子

ハイデルベルク近郊に丘が一つあつて、その名をイエツテンの丘イエツテン・ピューエルといい、ガイス山ペルクの一部を形成、ハイデルベルクの町と谷を高めから見下ろす。王の椅子から遠くない。この山、王の椅子からライン河下流をケルンまで見晴かすことができる。王の椅子ケーニヒスシュトール山上ではキリストご生誕前から既にあるドイツ王が御座所を構えており、その城塞はエスターブルクといった。さてイエツテンの丘の上にはかつてハイデルベルクの古城が建っていた。「その」と古き礼拝堂にイエツタなる名の老女が住んでいた。これは予言者で、僅かな人の前にはしか姿を見せなかった。先のことを占つてもらおうとやってくる者たちには、開いた窓の中から答えを告げた。彼女はこんな予言をした。このわたしの丘には王家の男たち——その名を彼女は歌いながら挙げた——がいつか住むことだろう。そして丘の

下の谷には勤勉な民草がひしめくことだろう、と。ある日イエッタはガイス山ベルクの麓に下り、小川のシユリーアバツハに向かった。そこには泉が湧いていて、そこを訪れるのが好きだったのである。そこに一頭の牝狼が横になって仔狼に乳をやっていたが、これがイエッタを噛み裂いて喰ってしまった。この泉はいまだに今日に至るまでヴォルフスラング狼の泉と呼ばれている。イエッタの丘上の城、古い宮中伯居城は一五三六年、聖マルコの祝日に雷に撃たれて火を発し、その際薬樽だるが爆発したので城の一部が粉碎された。プファルトクレーフュルケン選帝侯フリードリヒ一世は、皇帝から追放刑を受けたので、堅固な塔を一つ造営。この塔を皇帝打倒と命名したものの。

皇帝の椅子カインシュトールに向き合つて、ネカー川の対岸に、一つの山があり、その名をブライ・ハラゲン・ベルク万聖山、あるいはハイゲン・ベルク聖人山という。この山にはたくさんパルテオンの洞窟と地下へ通ずる割れ目がある。既にローマ時代、山上には神殿がひとつ建立されていた由。異教徒の万神殿である。そして地下の洞窟は神託に使われた、との話。これはいまだに異教徒の洞窟と呼ばれており、地下の小人たちの棲処である。もつとも、聖人山ハイゲン・ベルクの名は決して異教徒の神殿に由来するわけはなく、後世ここに数数の教会や修道院が建てられたことによる。というの、こういうこと。キリスト教がこの地方に入つて来た時、ドイツ王ルートヴィヒ三世（在位八七七一七九）が近在のロルヒ修道院に贈つてその所有とし、そこにミヒヤエル聖者を顕彰して教会が建立された。しかし、この教会はやがて衰亡、ベネディクト会派の修道院が繰り返し二つできたが、次次に衰亡、ステパノ聖者に捧げられた教会ができたが、これまた衰亡。もう一つ、ラウレンティス聖者に教会が捧げられたが——またしても衰亡。どうもこれは古代の異教の神神が、昔祀られていた山の上でキリスト教と目にはみえぬが熾烈な闘いを繰り広げ、その居所にキリスト教を受け入れるのは容認し難い、としているかのように思える。今でもこの聖なる場所は荒涼たるもの。異教徒の洞窟の数はいまだに存在する。

五二 聖カタリーナの手袋セントカタリーナ

ハントシューフスハイム一族の高貴な殿たちは紋章に纏まとわるまことに素晴らしい言い伝えを持っていた。ハントシューフスハイム家の末裔まごえいは一六〇〇年に死んだ。ハイデルベルクのフリードリヒ・フォン・ヒルシュホルンが衆人環視うらみの裡で彼に致命傷を負わせたのである。さて、この家系の始祖には次のようなことが起こった、ということである。この人は信仰篤あつい青年騎士で、熱心に教会に通っていた。そしてある時、聖処女と殉教者カタリーナ（註）の祭壇の前で祈りを捧げていて、ふとまどろんだ。するとこの世のものならぬ麗しい三人の乙女たちを目の当たりにした。もつとも、三人のうちで真ん中の乙女が一番綺麗だったが、この乙女がこう言った。「わたしたちがまいったのは、そなたを観みるため。そなたの目は閉ざされていますね。わたしたちを御覧なさい。そして妻を選ぶお気持ちがあれば、わたしたち三人のうちの一人をお選びなさい」と。そこで青年騎士は、こう自分に語り掛けたのが聖カタリーナ自身であることを、棕櫚しゅうろと焰ほのおに包まれている鋸のこぎり状の車から見て取り、満腔まんきやうの喜びをもって彼女に身を捧げた。聖女は騎士の頭こゝろに薔薇ばらの花環はなわを載せ、この薔薇は天の楽園の花のように馥郁ふくいくと香った。そして聖女の姿は消えたのである。騎士は夢から覚めると、本当に薔薇の花環を見つけ、それを恭しく保存したが、薔薇が一向に萎しおれないのに気づいた。ところが、さて、青年の親族たちは、彼を結婚させようと、もう以前からあるごく淑しとやかな貴族の乙女を選んでおり、騎士は縁組みを拒むことができなかった。けれども心の裡うちで天界の花嫁に仕え続けた。そのうち騎士の妻は、夫が折折、とりわけ朝方、自分を置き去りして教会の方へ行くことに気づき、厭いとわしいことが起こっているのでは、と猜疑さいぎの念に駆かられ、小間使いの娘に、旦那様はいつもどこへいらっしやるのか、と問い質たした。娘は、どうもご主人様は坊さんの妹のところ忍んでおいでのように思えます、と答えて、奥方の

疑いを掻き立てた。そこで奥方はなんとも言いようもなく嘆き悲しみ、泣きに泣いた。そして夫が、なぜ泣くの
 だ、と訊ねると、自分の疑惑と苦悩を訴えた。——「そなたは愚かだ」と騎士は答えた。「わたしが心で想つてい
 るかたは、坊主の妹などではない。ずつとずつと高貴でずつとずつと麗しい女人だ」。そうして妻に背を向けて立
 ち去ったのである。こうした返答に奥方の胸は張り裂けそうになった。ことに懐妊している身でもあつたし。そこ
 で嫉妬に我を忘れて小刀を手に取ると、それで喉を突いたのである。

お祈りから帰宅した騎士はこの災厄を見て心臓が凍りつくほど驚愕し、人事不省に陥つた。それから我に返る
 と、髪の毛をかきむしり、罪は全て己にある、とかきくどき、涙をとめどもなく流しながら、「教会の祭壇の前で」
 崇める聖女に庇護と助けを求めた。すると彼の前に、聖カタリーナが二人の乙女を従えて再び姿を現し、こう言っ
 た。「そなたの祈りとわたしの執り成しが叶えられ、そなたの妻は甦りましたよ。そして女の御子を産みました」。
 それから騎士の上に身を屈め、片手で涙の溢れるその目をさつと撫でたので、手はしとどに濡れた。すると、なん
 と、涙の潤いが卵の薄膜のように白くあえかな手袋となった。聖カタリーナはその手袋をそつと外し、二人のお
 伴とともに姿を消した。騎士は我が手の中にその手袋を見出した。そのうち使いの者がやつて来て、彼を捜し当
 て、こう叫んだ。「殿、奥方はご息災でいらつしやいます。そしてお嬢様をお産みになりました」と。——そこで
 騎士は有頂天で帰宅し、妻と子を抱いて接吻した。夫妻は二人して神と聖カタリーナを誉め讃えた。奥方は修道
 院を一つ建立させ、騎士は聖地へ贖罪の旅を行い、帰国すると、かの薔薇の花環と手袋——彼はこれらを胃に結
 び付けて携えて行き、お蔭であらゆる危険から不思議にも護られた——とを記念に教会に保管してもらい、更に手
 袋の図柄を自家の紋章に入れ、一族と居城を手袋の家と命名した。

五三 ローデンシュタインの進発

オーデンヴァルトに、というか、その近くに、廃墟となった城塞が二つある。ローデンシュタイン城とシュネラート城で、相互に二時間隔たっている。ローデンシュタインの殿たちは強大な騎士の家柄だった。そのうちの一人だが、これが大変な戦好きで狩猟好き。楽しみといえば闘いと狩りだった。ハイデルベルクの馬上槍試合で恋を知り初め、美しい妻を贏ちえるまでは。とはいうものの、居城での平穩な愛の生活に長いこと安住はできなかった。近隣の確執からそぞろ血みどろの闘いに跳び込みたくなったのである。彼の妻はしきりと厭な予感がし、わたしを置き去りにしないで、わたしは妊娠してきますし、出産の時も間近ですから、と頼み、懇願したが、徒勞だった。彼は出陣してしまい、妻の懇願など無視した。——妻にはこれがひどい衝撃になったので、陣痛が早まり——男の子を産んだが死産だった。そして彼女も亡くなった。騎士の方は敵方に近づこうとシュネラート城へと進軍していたが——その地で夜明け方妻の幽霊が現れて、彼に対するこんな呪いを口にした。「ローデンシュタイン」と彼女は言った。「あなたはわたしをいたわってくださいませんでしたし、ご自身もいたわりませんでした。あなたにとっては戦が愛より大事なのです。だから、今後、最後の審判の日に至るまでずっとと戦を告げ知らせる使者におなりなさい」。

その後すぐに闘いが始まり、ローデンシュタインは斃れ、シュネラート城で埋葬された。休らうことのない彼の亡霊は時時進発し、この地方にとつて災厄の使者とならなければならない。どこかで戦が勃発しそうだ、もうその半年も前に家の子郎党を従えたローデンシュタインが、狩りの喚声、駒の嘶き、角笛と喇叭の吹鳴とともに姿を現す。これはもう何百もの人人が耳にしていること。いや、耳にしたところか、オーバーカインスバッハ村のあ

る農場では、ローデンシユタインが部下たちを連れてそこを轟轟ごうごうと通り抜け、次いでブレンスバッハとフレンキツシュ・グルムバッハを通り、最後にローデンシユタインにまで達したことさえ知られている。ローデンシユタインで幽鬼の軍勢は次の和平まで留まり、それから進発して——もつとも前よりも騒がしくはないが——シユネラート城に戻って行く。前世紀（「十八世紀」）、エアバッハ伯爵領ライヒェルスハイムの役所では、自分の耳でこの夜の怪異を聞いた、という大層多くの人人が公に訊問じんもんされ、その供述を調書に記録しなければならなかった。

かように憩ひまうことなくまかり通るのはリンデンシユミートの亡霊だ、と唱える者も確かに多い。この男についてはライン河畔で古い歌謡が幾つも伝えられている。しかしながら、リンデンシユミートはカスパー・フォン・フロインツベルクが捕らえた追剥おいはぎであつて、こやつこやつの生涯よりずっと前からもうローデンシユタインは出陣し、戦の布告役ふれやくになつていたのである。最後の審判の日まで呪われて。

五四 エーギンハルトとエマ

カール大帝(16)にはエーギンハルトという名の年若な宮廷礼拝堂付き司祭がいたが、これは秘書としても忠実に役目を果たしていた。かの偉大かつ権勢ある皇帝の生涯が記録されたのは彼のお蔭かげである。この青年は皇帝の息女イマイマないしエマに焦がれており、あちらも彼を慕っていた。しかし二人は権勢ある支配者カールが自分たちの熱愛に気がつくことを恐れていた。なにしろイマは既にビザンティンの王と婚約していたからである。さて、こんなことが起こつた。ある夜エーギンハルトがイマのところに来て、恋を語らつていたところ、とうとう暁を迎えそうになつた。ところで、恋人たちが忍び逢あいをしてしている間に大雪が降り、エーギンハルトが愛する相手の許もとから立ち去ろう

とした時、この話の舞台、インゲルハイムなる皇帝の城の中庭を突つ切らねばならなかったもので、二人はひどく愕然とした。男の足跡が姫の部屋から出ていけば間違ひなく秘め事の証となるに決まっているからである。そこでイマは策略を一つ案じ出した。帯をぎゅつと締めると、愛しい男を背負い、雪を踏み分けて城の中庭を横切り、安全な場所まで運び、それから自分の踏み跡を注意深く辿つて引き返したのである。どこもかしこもしんとして、だれもかれも眠っていた。だが大帝だけはそうではなかった。カールは目覚めていて、自室の窓から城の中庭を見下ろしていた。そして他ならぬ息女に気づいて懊惱した――が、黙っていた。さて若い秘書官はというと不安に耐えきれなくなつて、皇帝の宮廷を退去しよう、と堅く決心し、主君の前に跪いて、お暇をたまわりとう存じます、と願つた。皇帝がそうした願ひの理由を問うと、エーギンハルトは不満を口実とし、わたくしめのご奉公は相應の報酬を戴いておりませぬ、他にいかような申し立てがございませうや、と答えた。皇帝は若者に対して、すぐに沙汰を下そう、と約束したが、一方審問会を設置、これに最も賢明な相談役らと裁判官たちを招集した。そして彼らに、何が起つたか、何を自分が見届けたかを語つて聞かせ、そして、かようにこの身に関わる問題では朕は裁き手にはなりとうない、として、彼らの助言と意見を求めた。すると相談役らと裁判官たちはほとんど同時に寛容と宥恕を勧めた。大王は、心中憤つていたが、結局は一同に賛成せざるを得なくなつた。それからカールは自分の書記を呼び出し、こう言つた。「そちがもつと早くにそちの不満を朕に打ち明けていたなら、もうとつくにそちの奉公にずっと良く報いていたであらうに。さて、朕はそちに息女イマを妻として与える所存じゃ。あれは帯を高くと締め、自ら進んで雪を踏み分け、そちを運んだのだからう」。そして姫君を呼び出しに人をやり、頬を真っ赤に染めて参上したイマは、ただちにこよなく愛しい恋人に娶された。皇帝は息女夫妻に数数の町、森、耕地をふんだんに下賜し、エーギンハルトを心から大切にした。けれども大帝が薨去すると、エーギンハルトはいとしい

イマとともに宮廷から去つて静謐な暮らしに入りたくてたまらなくなつた。カールの子息、ルートヴィヒ敬虔王は彼に、オーデンヴァルトの二つの王領の村、ミヒリンシユタツトとミューレンハイムを与えた。何年も何年も幸せに過ごしたあと、結ばれた二人の心はしだいに天に向けられた。彼らはミヒリンシユタツトをその名も高きロルシユ修道院に寄贈した。この修道院から、後に帝国直参伯爵となつたエアバツハ猷酌侍従一族がこれをもらい受けたのである。その後二人は聖職者の生活をした。兄と妹のように結ばれてはいたが。エーギンハルトは僧職叙品を受け、上ミュールハイムに僧房が幾つもある教会を建立、そこへローマから幾柱もの聖人の遺体を取り寄せ、愛するイマが亡くなると、自分が初代院長となつた修道院に埋葬した。「そなたが憩い、我らが至福の愛のうちに過ごしたこの場所が至福ならんことを」と彼は信実を捧げた愛しい人の灰を傍らにしてそう唱えた。そういうしだいでこの村は以後至福の場所と呼ばれた。

異説もある。カール大帝は愛し合う二人を御前から放逐した。そこで彼らはかの地ゼーリゲンシユタツトを取り巻く寂しい森の中とともに暮らしていた。ある時皇帝は狩りの途中ひよっこり二人に再会し、嬉しさからその土地を自身至福の場所と命名したのだ、と。エーギンハルト修道院長が死去すると、その遺骨はいとしいイマの遺骨と並んで埋葬され、次いで二人が憩う豪華な装飾石棺が造られた。ところで、エアバツハなるエアバツハ伯爵閣下一族はその系譜がかの高貴な夫妻から発しているのです、この古い装飾石棺はやんごとない君侯の御手から彼らに下し置かれ、この上もなく貴重な昔の遺物として今もなおエアバツハに保存されている。けれどもゼーリゲンシユタツトでは、この地の教会を建立した二人の遺骨が入っている壮麗な別の大理石の装飾石棺が、やはりその教会に安置された。こういうわけでエーギンハルトとエマ（「イマ」）の柩は二つの異なつた場所で見られる。しかしながら両者のいずれが本物やら。

五五 ヴインデック一族

山街道ベルグシュトラーセ沿いのヴァインハイムの町を見下ろしてヴインデック城の廢墟が聳そびえている。これについては幾つもの伝説が語られる。かつて——ヴインデック城はその頃既に滅びていた——ある大胆不敵な騎士が逃げる牡角鹿ヒルシュを狩っていた。牡角鹿はまっしぐらに古城の廢墟の真ん中に逃げ込み、見えなくなつた。騎士はというと、しんと静まりかえつた荒涼とした場所にぼつねんと取り残されたのに気づいた。暑い日だったので、喉のどが渴かわいてならなかつた。どうやら彼は、ヴインデックが埋もれた幾つもの酒蔵の中にまだ少なからずけつこうな飲み物を蓄たくわえているのでは、などと思つたのだらう。すると、なんと、真つ白な衣装を纏まとつた乙女が一人、自分の前に立っているではないか。彼女は縁までなみなみと満たされた見事な角型杯を手にしており、それを、召し上がれ、と彼に差し出した。騎士は飲んだ。するとその麗しい乙女から目を背けることができなくなつた。しかし相手は酒杯を取り戻すと、姿を消した。それ以来騎士はずつとヴインデック城の廢墟に呪縛まじされてしまつた。その目、その飲み物で自分に魔法を掛けたあのすばらしい女人がまた姿を現してくれるのではないかと、と絶えず憧あこがれながら。けれども騎士がもう一度乙女を目にしたかどうか、だれにも言えはしない。なにせ、とうとう死んでしまつてからも、その亡霊が休やすらうことなく廢墟の中を彷徨さまよい歩いたからである。

ヴインデックの末裔まつえいの一人の亡霊も、その両腕をシュトラースブルクの方角に恋い慕う様子で差し伸べている姿を、時折このヴインデックの古城の塔の上で目撃された、ということである。あるシュトラースブルクの女性が彼の妻だつたのだが、故郷こきやうに惹ひかれるあまり彼女は彼の腕から去り、かの地の大聖堂でお祈りをし、大聖堂の中で死に、大聖堂の中にその墓がある。彼女を慕つて夫の心臓は破れ、夫は死んだのである。

ヴインデック一族という高貴な家系の最後の驍^{ひさまえ}たちの心臓はこの騎士のそれとは別の作りだった。なんとも言いようのない貪欲こそこの連中の唯一の幸せだった。この兄弟は若くしてただ二人、崩れた城塞で暮らしていた。これを住めるように維持するには金が掛かったことだろうが、兄弟は金をとてつもなく可愛^{かわい}がっていたので、自分たちの金櫃^{かねび}からとげとげしく邪^{よしま}な世間に追いつ出^ですなんて思いも寄らなかつた。奉公人はお祓^{はら}い箱になつていて、なにせ召使^{めいし}いなどは物入りである。つまり、食い扶持^{ふち}と、かてて加えて給金^{きん}が必要なのだ。果ては犬猫^{いぬねこ}でさえこの兄弟にとっては、餌代が多過ぎるわい、とあいなつた。——それから、四つ脚の家畜を飼うのは費用の嵩^{かさ}むこと、と悟^{さと}つた。ことにろくすっぽ乳も羊毛も採^とれやせんしなあ、と。それでもこの二人、共有で小さい動物をまだ一つ飼^かつていた。これは四十雀^{しじゅうか}——必要なものは大してない——で、彼らは毎日胡桃^{くるみ}の実を一個やつていたのである。さて、ある時兄弟の一人が夜眠れずにいた。吝^{けち}ん坊^ぼという者は眠れない夜には金勘定^{けんてい}をするのが常。さてそこで、ヴィンデックの殿は勘定をして、こう集計した。一年は三六五日、まあ三六六日のこともある。そうするとそれだけの胡桃^{くるみ}の実も直^{ただ}さず六シヨックといくらかになるわけだ。そうして一シヨックの胡桃^{くるみ}は、山街道^{ベルクシュトラーセ}沿^よいのように安値^{あんち}の場合で——他場所^{ほか}じゃあもつとするなあ——クロイツァー銅貨^{銅貨}三枚につくのだから、こりやあ毎年十八クロイツァーともつとという計算になるわい。一羽の四十雀の値打^{ねうち}ちの六倍だて、と。——翌日ヴィンデック殿は弟にこの試算を報告。相手はこれを聞いてびっくり仰天^{げうてん}し、しばし物思いに沈み込んだ。やつこのことはいわく「なあ、兄者^{あにじや}、六シヨックにやあ実^{じつ}の入^いつてないやつもどつさりあるつてことを考えにいれると、七シヨックと見積もつていい。こんな役立たずの大喰^{おおく}らいに餌^えをやつて、水をやつて、鳥籠^{かご}を掃除してやるつてな骨折^{こつせ}り仕事を抜きにしてだぞ」。——「いかにものう、弟」とこちらは溜息^{ためいき}を一つついてまた言った。「わしらはこのあほらしい生き物、飼^かい鳥^{とり}の四十雀にお人好^{おにんこう}しにも情^{なさけ}を懸^かけたせいでうかうかと許^{ゆる}し難^{がた}い浪費^{らひぎ}をしてしもうた。いやもう考え

てもみやれ、もう何年ここの役立たずの代物を喰くわせておることか。まっこと前代未聞じゃわ」。——それから兄弟は即座に、鳥籠を開けて、役立たずで費用の高たかむ穀こ潰つぶしを、どこへでも行きたいところへ飛んで行け、とばかり放しちまおう、と一決した。けれども無駄遣いに気づいたのがあまりにも遅過ぎたという苦悩に兄弟の心臓は蝕むじまれた。彼らはお互いこういう浪費を大目に見ることもできず、この苦悩を克服することもならず、次の日になると、無駄遣いに対する恨みつらみのため兄弟の心臓は同時に破れてしまった。

五六 ロルシュのタツシロ

カール大帝が、そのごく近親である剛毅こうぎなバイエルン公タツシロと闘争するに至ったことがある。タツシロはカールの敵たちを嚇おそすという大悪行を働いたので、カールは恐るべき報復を行い、タツシロに途方もない処罰を与えた。カールはこのアギロフイグ家のタツシロを盲目にさせたのである。これは次のようになされた。タツシロは、両眼間近に置かれた灼熱しやくねつの盾を、視野が暗くなり、果ては全く失明するまで見るよう強いられた。その長い髪は玉座の前で彼から切り取られ、修道士の剃髪ていはつをされ、それから、全生涯を懺悔ざんげと祈祷に捧げるよう、勅命により修道士としてある修道院に入れられた、ということである。その後長い歳月が経ち、こうしたことが起こった。ある時皇帝カールはラウレスハイムに向かった。これぞロルシュで、例の修道院だった。カールはタツシロ公などとつくに忘れ果てていたのだが、夜、かしの修道院聖堂で過あごし、祈りを捧げずにはいられない気持ちに駆かられたのである。そこで彼は、一人の盲目の修道士が修道院の回廊をおぼつかない足取りで歩いていたが、傍らに光明に包まれた神の御使みいが付き添って導いているさまを目にして驚いた。その老人の相貌は皇帝には旧知のもの

のように思われたが、どうしても名を思い出すことができなかつた。修道士は祭壇から祭壇へと導かれ、それぞれで祈祷し、それからこの世のものならぬ案内者とともに静かに引き返して行つた。翌朝皇帝はロルシユ修道院の院長を呼びにやり、そちの修道院で天使が奉仕している修道士はだれか、と訊ねた。修道院長は驚愕して、何一つ言えなかつたが、次の夜自分と一緒にかの修道士を待ち受けるよう、との皇帝の命令に従つた。すると前夜と全く同じことが起こり、盲目の修道士がまたやつて来て、天使が導いていたのである。修道士の祈りが終わると、皇帝は院長を従えて修道士とその案内者の跡を追い、修道士が独りきりでその僧坊にいるのに遇つた。しかし院長はその修道名の下での修道士のことは心得ていたが、それ以上彼について何も知らなかつた。さて院長が修道士に向かつて、以前世俗の暮らしをしていた折には何であつたか申し述べよ、隠し立てしたり、黙つたままでいたりしてはならぬ、なにしろそなたの前におられるのはご主君の皇帝であらせられる、と告げると、盲目の修道士は皇帝の足元にくずおれて、こう言つた。「おお、殿、わたくしは数赦の罪をあなたに対して犯しました。わたくしの懺悔はいついつまでも続きましょう。わたくしは以前タッシロと申しました」。すると皇帝は慈悲深く相手を立てていわく「そちは重い贖罪を果たした。朕の考えより苛酷にのう。そちの罪が全て許されるように」と。盲目の老人は皇帝の手に接吻し、それからばったり倒れて身罷つた。その遺骸はロルシユ修道院に憩うている。



Herwisch, ho ho! Brennst wie Haberstroh!
Schlag mich blitzeblo!

五七

鬼火 ヘーアウツシュ

ベルグシュトラーセ 山街道 一帯の人人、それからとりわけロルシュやヘンラインの町周辺では、イルグウィツシュ 惑わせ火のことを昔も今もヘーアウツシュ 鬼火 と呼んでおり、いつものことながらこれが待降節期間アドヴェントに出現すると、こんな風に呼び掛けるあざけ 嘲り文句を持つている。

ヘーアウツシュ 鬼火、ほうほう、

えんはくわら 燕麦藁みたいに燃えとるの。

あおあそ 青痣残るよに打つがいい。

けれどもこいつのせいでひどい目に遭あつた者がこれまで既に一人ならずいる。三十年以上も前のことだが、ある若い娘が夕暮れ時ヘンライン近くの沼の畔はたを通つたところ、ヘーアウツシュ 鬼火 がびよんびよん跳ねているのを見たので、向こう見ずにも大声で例の嘲り文句を叫び掛けた。すると ヘーアウツシュ 鬼火 はすぐさま沼の上をふわふわ娘の方へやって来た。娘は怖くなって、両親の家へとできるだけ急いだ。でも ヘーアウツシュ 鬼火 は跡をどンドン追つて来たし、ほお 焰のような翼を持つていて、その翼でとても大きな沼地の野鳥のように娘をばっさばっさと打ち叩いた。そして死ぬほど怯おびえた娘が家に辿たどり着いて中に跳び込むと、ヘーアウツシュ 鬼火 も一緒も入り込んで玄関こしこうを煌煌と照らし出し、部屋中を娘にくっついて回り、行く手にいる者をだれかれなくそのふらふら火で打ちのめした。それから煙突が上がって行き、煙出してから火籠のように外へ飛び出すと、そこいらじゅうの屋根という屋根の上を踊り回つたので、皆びっくり仰天し

た。翌日になると一同だれもが、あの娘は殊にだが、^{ヘイアウイッシュ} 鬼火に打たれた痕が青痣になつていた。この^{ヘイアウイッシュ} 鬼火なしし惑わせ火および^{フアイアマン} 火男どもは死者の亡霊とされている。これらは生前犯した悪行のゆえに永遠の安らぎを見出せないのである。特に、いんちき土地測量師、土地の境界標石を移した者、それから隣人の畑を耕し奪つた農夫——こうした連中は^{フアイアマン} 火男として贖罪しなければならぬ存在、と全ドイツで見なされている。ドイツ北部では惑わせ火は洗礼を受けないまま死んだ子どもたちの魂と考えられている。テューリンゲンにはこんな言い回しがある。だれかがとても急いで走っていると、「燃える男みたいに走つてる」と言うのだ。

五八 草地の乙女とくしゃみ

アウアーバッハ近郊、ロルシュから一哩^{マイル}の緑の草地で一人の牧童が父親の牝牛たちの番をしていた。ぼうつと突つ立って、頭の中はすつからかん。すると突然頬をそつと叩かれた。それも柔らかな手で。びっくり仰天して振り返ると、目の前に立っていたのはすばらしく美しい乙女で、真つ白しろの衣装を纏っていた。そしてこちらに語り掛けようと口を開いた。ところが男の子の方はおっかなくてたまらず、槍で突き刺されたみたいに、うつ、と一声唸るなり、アウアーバッハ指して逃げ出して、行き着いた。しばらくしてこの男の子はまたもや例の草地で番をしており、暑い真昼刻、森の縁にほんやり立っていた。すると太陽の照りつけるその辺りでかさこそかさこそ、^{トカゲ} 蜥蜴かなんぞが茨の繁みに潜り込むような音がした。少年がそちらを見やると、目にしたのは小さな蛇。口に青い花をくわえて、こう言ったのだ。「いい子だから、わたしを救つて。救つてちょうだい。この花でもつてあの山の上のアウアーバッハの古いお城にある崩れた穴蔵を開けるの。樽という樽が黄金で一杯よ。全部そなたのもの。

この花を取って。取ってちょうだい」。——でも男の子はもうもう気味が悪いは、ぞおっとするは、これまで蛇がしゃべるのを聞いたことなんかなかったし——荒れ狂う獵師(13)に後を追っかけられているように雲を霞かすみと逃げ出した。晩秋のこと、この同じ男の子はたまたまた場所の家畜の番をしていた。するとまたしても頬をそつと叩かれた。振り向くと例の白衣の乙女で、縋すがるようにこう話し掛けた。「わたしを救って。救ってちょうだい。わたしはそなたをお金持ちに、幸せにしてあげる。そなただけができるの。そなたしかできないの。わたしは呪われて、待ち続け、彷徨さまよい続ける定め。至福の安らぎに就けないのです。どこぞの小鳥がこの草地に落とす桜桃さくらももの種から桜の木が生えて、大きくしっかりした樹になって、それが伐り倒されて、それで揺り籠かごがこしらえられるまでは。その揺り籠で揺すられた初めての子が、ここにわたしが手にしている青い花を持ってお城へ上がって行き、地下の宝を運び出すことができるのです。そなたこそそうした揺り籠で揺すられた子」。——この話を聞いた男の子は震え上がり、背筋がぞくぞくした。なにしろこの子には性根がなかった。性根のない人間なんて腑抜けふ抜けの阿呆あほうに他ならない。そこでこいつは十字を切ってお祓はらいをし、いやだ、いやだ、と頭を振った。「ああ、悲しや、悲しや」と乙女は叫んだ。「それではこの身はまたしても百年の間待ち続け、彷徨さまよい続けねばならぬ。性根を持ち合わせぬそなたに災いあれ。そなた、今後も性根を持つことはあるまいぞ」。——そして苦悩の絶叫を挙げると消え失せた。

さて男の子とはいえば、この日以降黙りこくって蒼あおざめた顔でうろつき回るようになり、長くは生きなかつた。

救済の望みと結びついている桜桃の種、樹、それから揺り籠に関する似たような伝説はオーストリアのラウエンエック城の廢墟についてもある。ところでアウアーバッハには他にも怪しげなことがある。そこを流れるささやかな川、すなわちアウアー川バハに小さな橋が架かっている。ある時たれやらがこれを渡っていた折、水の中でくしゃ

(前) みをする音が聞こえた。それも三度も。そしてこの人は三度とも「神のご加護を」と唱えてやった。すると水の申から少年の姿が現れて、「神様があなたに報いてくださいますように。あなたはほくを救ってくださいました。三十年というもの、ぼくはそれを待っていたのです」と叫んだ。また別の者がこの橋の上手でやはり三度くしゃみを耳にした。この人、二度までは「神のご加護を」と叫んだが、だれも「ありがとう」と返してよこさなかった。三度目のくしゃみの時に「悪魔に攫さらわれやがれ」と怒鳴った。——すると水中でだれかが激しく転げ回ったような泡がごぼごぼと出て来た。そしてそれからしんと静まりかえった。

五九 沈んだ修道院

オーデンヴァルトのノイエンキルヒェン村から遠からぬ静かで人気がない草地の谷に小さな湖沼があるが、流れ込む川も流れ出る川もない。そこには昔女子修道院が建っていた。この修道院にまだ修道誓願をしていない年若な修練女がいた。彼女の修道院入りは強いられたもので、近隣の城の一つのさる騎士を愛していた。この騎士はしばしば夜、だれもが休らっている時に、こっそり修道院の庭に入り、いとしい女性と逢あって語らった。ある日の暮れ方、一人の疲労困憊こんぱいした白髪の巡礼が修道院の門に来て、中に入る許しと一夜の宿りを求めた。しかし、門番の修道女と全修道女会は門前払いを食わせた。かの修練女だけが、お爺さんの願いを聴いてやってくださいまし、と頼んだが、彼女はまた修道女ではなかったので、意見を述べる権利はなく、修道院の門はこの巡礼に閉ざされたままだった。巡礼は呪詛じゆその言葉を呟つぶやき、杖を振り上げ、それで三度門扉を叩いた。すると、修道院は附属教会および修道女会会堂もろとも音もなく地底に沈み、それがあつたところには静かな水面が謎を秘めて広がった。巡礼が立

ち去ると、代わりに恋人の若い騎士がやって来た——そして修道院が影も形もないので、我と我が目を信ずることができなかつた。周囲のぞつとするような荒涼とした静寂を縫い、大声で愛しい女性の名を呼んだ。すると深みからこんなことばが響いて来た。「明日この時刻にまたこの場所に戻って来てくださいませ。そして水の上に浮かんでいるはずの赤い糸を掴んで」。

騎士は次の夜言われた通りにし、赤い糸を掴んで引き寄せた。すると愛する恋人が目の前に立ち、接吻をし、こう語った。「わたしは罪がないのに他の人たちと一緒に罪を贖わなければならないのです。でもわたしはこの夜の時刻にあなたに逢うことを許されました。けれど最後の鐘が鳴ってからはいられません。あなたがわたしを引き揚げるこの赤い糸はわたしの玉の緒。ですから時が過ぎるまでわたしを引き留めないで」。——ほとんど夜ごと長いこと恋人同士は逢引したが、終わりが来た。ある時胸と胸を合わせて休らった時間が長過ぎたのだ——騎士が恋人を腕に抱いたのはそれが最後だった。次の夜騎士が再び来て、糸を掴むと、それはもう赤くなく——切れていた。代わりに湖全体が赤かつた。愛しい女性の血で染められて。そうではない、修道女たちの妬みで糸が切られたのだ、と言う人たちもいるが。恋人は悄然と湖に見入り、自身も深みに身を投じた。月の明るい夜には時折沈められた修道女たちがざわざわと浮かび上がって来て、肩衣と頸垂帯をつけた姿で女の水の精らと緑の岸辺で陽気な輪舞を踊る。そして惑わせ火どもがそうした輪舞に混じる。

湖から上って来て、恋の抱擁あるいは踊りの喜びのせいで定め刻限を忘れてしまい、その後その血で湖沼が赤く染まるのを目撃された乙女たちの伝説は、おそらくドイツには何千もあろう。

六〇 フランケンシュタインの無翼龍リントツルム

ダルムシュタットから二時間の行程にあるエーバーシュタット村を見下ろして、フランケンシュタイン城の広大な廃墟がある。この城にはかつてハンス——いや、ゲオルクだ、とも言われる——という名の騎士が住んでいた。城山の下の村には泉が湧き出でていて、農夫たちはそこから使い水を汲んでいたし、上の城へもこの水を運び上げた。泉の傍には一頭のおぞましい無翼龍リントツルムが巣くっており、だれも泉に近づけなかったので、あらかじめそんなに小さくない動物——羊、犬、仔牛こ、豚などで、こやつは何でも、そしてたくさん平らげた——を生贄いけにえにし、こやつが喰らっている間はだれでも泉に行けた。しかし、何ももらえないと、龍は泉に来る人間を喰らうのだった。そこでフランケンシュタイン騎士は村と一帯の土地をこの有害な怪物から解放しよう、と決意し、武装して無翼龍リントツルムと闘った。龍もあっぱれ身を防ぎ、できるだけ多くの火を吐いた。けれども騎士はとうとう敵の頭をすばりと刎ねた。が、龍の先の尖った矢のような尻尾が騎士に巻き付き、後ろから甲冑かちゅうに覆われていない膺ひがみを突き刺した。この無翼龍リントツルムはどこからどこまで、外皮も中身も有毒だったから、勇猛果敢なフランケンシュタイン騎士は龍の毒あに中てられて死んでしまった。その後彼はフランケンシュタイン一族が数数の美しい墓石を持つている下ニクべーアバッハオトパー（上オトパーべーアバッハとする者もある）の教会のその父祖たちの許もとに埋葬され、やはり壮麗な記念碑が建てられた。鎧よろいに身を固め、剣と戦鎚せんつひを携えている等身大のもの。尻尾を膺ひがみに向けている無翼龍リントツルムを踏みつけ、天使たちが冠かぶを被せており、キリスト教の殉教者であり聖者である騎士サント聖セントゲオルクの典型的な像である。

訳注

- (1) 聖ゴットハルト St. Gotthart. 普通 St. Gotthard と綴る。スイス・アルプスの山脈の起点。スイスからイタリアへ通じる峠の名（イタリア語では「サン・ゴッタルド」）。「ゴットハルト」は古高ドイツ語で「厳しい Hart + 神 Gott（ただし「神において強き者」の意らしい）」の意（もともと峠の名称の由来は、スウエーデンからイタリアに至るほとんど全てのヨーロッパ諸国で尊崇されたヒルデスハイムの聖ゴータハルト）。一応「前方ライン」の源とされるトゥーマ湖はこの近くにある。「前方ライン」はもつと南寄りルデスハイムとライヒェナウで合流、やがてはボーデン湖に注ぐ「アルペンライン」となる。
- (2) 高地ラエティア Hohenrhäuen. 「ラエティア」あるいは「レティア」は古代ローマの属州名。今日のスイスのグラウビュンデン州。
- (3) 「灰色の人たち」 「die Grauer」の直訳。
- (4) 科の木 Linde. 日本でもその名が耳慣れているリンデンバウムのこと。科の木科の落葉喬木。ただしリンデンバウムは中国原産の科の木（これは樹高一〇メートルほど）とは同属別種。かつては菩提樹とも訳されたが、その場合、洋種菩提樹とでもすべきか。リンデンバウムには樹高三〇メートルに達するものもある。またその樹齢も長く、全く健やかに四〇〇―五〇〇年も繁茂する。稀にだが千年以上の寿命を保つこともある。
- (5) 同盟 Bund. 約束、連合。
- (6) 皇帝マクシミリアン Kaiser Maximilian. ドイツ王（在位一五六二―七六）・神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世（在位一五六四―七六）。神聖ローマ皇帝カール五世の弟で、神聖ローマ皇帝位を譲られたフェルディナント一世の子息。カトリックを擁護すべき立場の皇帝の身でありながら、新教、すなわち改革派に共感を示した。
- (7) スイス ドイツ語「シュヴァイツ」Schweiz、フランス語「スイス」Suisse、イタリア語「ズヴィッツェラ」Svizzera、レトロマン語「ズヴィーツラ」Svizra、ラテン語「ヘルウエティア」Helvetia。公式国称は「シュヴァイツェリシェ・アイトゲノツセンシャフト」Schweizerische Eidgenossenschaft（直訳「スイスの誓いの仲間たち」）。スイス盟約者団＝スイス同盟＝スイス連邦。「原初三邦」（後掲注参照）の一つシュヴァイツが「シュヴァイツ」の由来。
- (8) その名はこうだった。以下に挙げられる六人と後段スイス開拓にその名が出る五人はきちんと対応していない。
- (9) オーム Ohm. 昔のドイツの液量単位。一三〇―一六〇リットル。

- (12)(11)(10) シュテユック樺 *Stückab*。一二〇〇リットル入りの大樽。
 主なる神よ、我ら汝を讃えん *Te Deum laudamus*。ラテン語による神への讚美。
 聖ガレンの修道院長と皇帝の三つの質問に関する「世にもおどけた小断」 *das Mährlein gar schnurrig vom Abt von St. Gallen und dem Kaiser mit drei Fragen*。ドイツ啓蒙主義時代（疾風怒濤時代を含む）の文人ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー（一七四七—一七九四）の滑稽な物語詩「皇帝と修道院長」 *Gottfried August Bürger: Der Kaiser und der Abt* を指す。「話つてあげよう、皆の衆、世にもおどけた小断を。 *Ich will euch erzählen ein Märchen, gar schnurrig*。」で始まる。
- (13) ダゴバート *Dagobert*。フランク王国メロヴィング朝第四代国王ダゴバート一世（六〇三—三九）。クロタール二世（五八四—六二九。大王）の長男。アウストラシア（フランク王国東部の分王国）とブルグントを戦いの結果領有、かくしてフランク王国を統一した父王から六二三年アウストラシア王に任命される。世継ぎはクロートヴィヒ（クロウヴィス）二世。
- (14) テル *Tell*。ドイツ語「ヴェイルヘルム・テル」 *Wilhelm Tell*。日本では長らく英語「ウィリアム・テル」 *William Tell* なる呼称が一般的だったが、テル伝説の舞台であるスイス中央部のウーリは当時も現在もドイツ語圏。なお、テルが実在したという文献証拠はないが、スイス人の過半は信じている由。
- (15) オーストリアのアルブレヒト皇帝 *Kaiser Albrecht von Österreich*。オーストリア公、ドイツ王・神聖ローマ皇帝（在位一二九八—一三〇八。ただし皇帝に戴冠し即位はしていない）アルブレヒト一世（一二五五—一三〇八）。ハプスブルク家出身のドイツ王・神聖ローマ皇帝として二代目。初代ルードルフ一世（アルブレヒトの父）はアールガウ（スイス北部）を拠点とし、エルザスから中央スイスにかけてしだいに支配力を及ぼすようになってはいたが、弱小の一地方領主（伯爵）に過ぎなかった。しかしながら「大空位時代」（一二五四—五六〇—七三）の後、ドイツ王・神聖ローマ皇帝（在位一二七三—九一。ただし皇帝に戴冠し即位はしていない）に選出され、更に、帝位対立候補だったボヘミア王兼オーストリア公オタカル二世と決戦、これを敗死させた（一二七八）。結果、一二八二年までにオーストリア方面に広大な領土を獲得、やがてハプスブルク一族はウィーンに勢力の中心を置くに至る。ルードルフ一世の没後、すなわちアルブレヒトの時代にスイスの所領は大方喪失される。一三〇八年五月一日ラインフェルデン近郊で実の甥ヨーハン（アルブレヒトの弟オーストリア公、シュヴァーベン公ルードルフ二世の子息。一二九〇—一三一一？）により殺害される。ちなみにヨーハンはこの所業のため「ヨーハン・パリツイーダ」（尊属殺しのヨーハン）と綽名され、ローマ教皇から破門され、一二三三年以降消息を絶つ。
- (16) 代官 *Vogt*。神聖ローマ帝国がその直属領に置いた官吏。
- (17) 三つのスイスの町と周辺地方 *drei Schweizerstädte und Landschaften*。いわゆる「原初三邦」。ウーリ、シュヴァイツ、ウンター

- (18) ヴァルデン（厳密にはニートヴァルデン）。
 牡牛たちを犁から解き放て、耕作は一頭ないし一連の牡牛（体軀は大きく、力が強いが、去勢してあるのでおとなしい）を犁に繋ぎ、これを耕作者が操縦して行った。牡牛は広い耕地を深く犁き返すために必要不可欠な生産手段だった。
- (19) おまえたち百姓は充分自分で牡牛になれるのではないか。前掲注に記したように、耕作用の牡牛は去勢してある。去勢牡牛は「鈍感な大男」の代名詞でもある。従って、これはひどい罵言。
- (20) 管理官 Pflager: 「手代」「下役」とも訳せようが、一応こうして置く。識者のご教示を俟つ。
- (21) 風呂に浸かっているやつのために風呂を祝福してやろう dem Bader will ich das Bad wohl gesegen. 「ある人の入浴を祝福する」 einem das Bad segnen なる慣用句は今日では「ある人をしたたかに叩きのめす」くらいの意味だが、語源はこの伝説の「齣」にある。シラーはその戯曲「ザイルヘルム・テル」の中（第一幕第一場）で「……そしておれは斧でやつの入浴を祝福してやった。… und mit der Axt hab ich ihm's Bad gesegnet.」と書いているので、ドイツ人に周知されるようになった。
- (22) 「ツヴィング・ウーリ・ウンター・ゼー・シュテッケン」・ Zwing Uri unter die Stegen: 「シュテッケン」は「シュテッケン」Stecken（棒）の訛。「ウーリ」を棍棒でぶんなぐって、いうことを聞かせる。シラーの『ザイルヘルム・テル』にも「ツヴィング・ウーリ」として登場する。
- (23) ウルナー湖 Urnersee: フィーアヴァルトシュテッター湖の一部。
- (24) 冬月 Wintermond: 冬期の月である十一月、十二月、一月。ドイツでは特に十二月を指すが、スイスでは十一月。
- (25) 実の甥……: 弑逆された。前掲注「オーストリアのアルブレヒト皇帝」を参照のこと。
- (26) アルプス石楠花 Alpenrose: 躑躅属。アルプス山地に群生して赤い可憐な花を咲かせる。
- (27) 赤外套たち Rotmänteln: 先に「短上衣の赤い袖」がオーストリア家に好訛を通じる者たちの合い印となっているが、原文のまま。パリの血みどろの婚礼 die Pariser Bluthochzeit: 「聖バルテルミの虐殺」のこと。フランス新教徒（カトリック側の蔑称では「ユグノー」huguenot）の頭領格ナバラ王アンリ・ド・ブルボン（後のフランス王アンリ四世）と、これはもちろんカトリックの王妹マルグリット・ド・ヴァロアの婚礼（一五七二年八月十七日）を祝うためパリに参集していた新教徒貴族たち（その中心はコリニエ提督）を、八月二十四日（聖バルテルミの祝日）、摂政である母后カトリヌ・ド・メデイシスに強請された国王シャルル九世の命令でカトリック派が襲い、提督を始め多数を殺害した事件。殺害は貴族のみならずパリ市民にも、またパリのみならず地方へも波及、犠牲になった「ユグノー」は全体で一万から三万といわれる。ナバラ王アンリは捉えられてカトリックへの改宗を余儀なくされた。

- (41) 知事 Landammann. 神聖ローマ帝国直屬となった山岳農民共同体が選んだ長。現代ではスイスの特定の州の長官。「郡長」との邦訳もある。
- (42) ちっさい山のよこたち Berglütchen. 「小さい山の人たち」Kleine Bergleute のこと。ドイツ語圏では小人の類を「小さな衆」kleines Volk のように言挙げするところがある。これは婉曲な表現でいかなかの敬意が籠もっている。
- (43) フォイクトラント Voigtland. 現在では「フォークトラント」Voigtland の表記が普通。
- (44) 荒れ狂う夜の獵師 der wilde Nachjäger. 「デア・ヴィルデ・イエーガー」der Wilde Jäger とも。普通、風の夜死者の霊を率いて狩りをするという魔王(＝北欧神話の主神「オーディン」Odin Ⅱドイツ語「ヴォーダン」Wodan)とされるが、伝説によっては、呪われたある獵師がそうだった、との説(たとえばDSB八一参照)も。いずれも、冬の凄まじい嵐が天空を渡って行くことから、怯える人人の間で創られ、語られた伝承であろう。
- (45) ホレ夫人 Frau Holle. 働き者の娘たちには優しく、恵みを与え、怠け者の娘たちには厳しく、時としてひどい罰を与える超自然的存在。KHM二四「ホレのおばさん」(「ホレ様」「ホレの奥方」)で有名。概ね中部ドイツの民間信仰に登場か。ベルヒタ夫人とともに太古の大地母神を偲ばせる。
- (46) ベルヒタ夫人 Frau Berchta. ベルヒタPerchtaとも。南ドイツからアルプス地方に懸けての民間信仰における超自然的存在。ホレ夫人に似た属性を持ち、優しく美しい容姿と、怖く恐ろしい容姿の二面性がある。洗礼を受けずに死んだ幼児たちの靈魂を統率している、ともされる。
- (47) 連れ合った音の塊 Fichbanden. この訳は類推に過ぎない。識者のご教示を俟つ。
- (48) 有翼龍 Drache. すんぐりむっくりした爬虫類あるいは両棲類の体に蝙蝠のような翼と長い尻尾が付いている。足は四本あるいは二本。残忍で火炎や毒気を吹き出す。
- (49) 無翼龍 Lindwurm. 蛇の仲間に入るのだろうか、足がある点が異なる。残忍で毒気を吹き出す。
- (50) 聖者レオターガー der heilige Leodagar. 普通「聖者レオネガル」der heilige Leonhard.
- (51) ルツェルンなるホーフの司教座教会 die Stiftskirche im Hof zu Luzern. ルツェルンの名高き「宮廷教会」のこと。
- (52) 周辺の人人たちはこやしをヴェュレン荒しと呼んだ ihm die Urwöher Oed=Wylter nannten. DS二二八では「この土地そのものが荒れ果てヴェューラー」と呼ばれるようになった「der Ort selbst davon den Namen Ödwyler empfing」とある。また、村の名は「ヴェュレン」ではなく「ヴェューラー」である。
- (53) 高原牧場 Alp. 原題では「アルプ」Alpeとなっているが、以下「アルプ」で統一する。ベヒシュタインは両者を混在させており、

表記には無頓着。

- (54) マース Maas 普通 Maß と綴る。昔の容量単位で、地方により異なるが一ニリットル。仮にニリットルとすれば「ニマース半」は五リットルにもなる。
- (55) それゆえお花の高原牧場とも呼ばれた deswegen hieß man sie auch die Blummeisalp. D S 九三「プリューメリスアルプ」Blummeisalp (には) の名称の由来は明記されていない。
- (56) 聖金曜日 Karfreitag. キリスト受難の記念日で、復活祭直前の金曜日。
- (57) 永遠のユダヤ人 Ewiger Jude. 伝説によれば、エルサレムの靴屋アハシユエロスは、キリストが処刑場ゴルゴタへの道を歩む途中、戸口で休もうとしたのを、無情にも追い払った。そこで、最後の審判まで休息することなく彷徨わねばならない。死にたくても、火や水や戦争や疫病に体を損なわれることはないのである。
- (58) 歩きづめのユダヤ人 der laufende Jude. 直訳すれば「歩くユダヤ人」。
- (59) フィスプ Visp. 話の冒頭では「フィスパー」Visperとなっている。
- (60) 巖山羊 Steinbock. アルプスアイベックス。アルプスに棲息する野生山羊。体重一〇〇キロに達する。畝の入った大きな角を持ち、この角は最終的には一メートルにもなる。
- (61) 「犬」鷲 Adler. 原文ではただ Adler (鷲) とあるが、アルプスに棲息する鷲であれば、犬鷲の Fendler と思われる。翼開長は二メートル余(牝)に及ぶ。棲息地としては、標高一五〇〇—三〇〇〇メートルの視界の開けた場所を好む。小動物を襲う。屍肉は喰わぬ。
- (62) 「髭」禿鷹 Geier. 原文ではただ Geier (禿鷹) とあるが、アルプスに棲息する禿鷹であれば、髭禿鷹と思われる。犬鷲より更に大きく、翼開長は二・六七メートル(牝)にも達する。嘴の周りに黒い剛毛が生えているのでこの名がある。十九世紀後半にはアルプスでは絶滅したが、二十世紀末アルプス周辺諸国の連繋で繁殖計画が進み、棲息が確認されつつある。餌は屍肉と骨で、巖壁に営巣する。
- (63) 雷鳥 Schneehuhn. 雉目雷鳥科雷鳥属。雷鳥の仲間では最も寒冷地に適応している。アルプス雷鳥 Alpenschneehuhn は体長三五センチ、翼開長六〇センチ。氷河期の遺物である。色は場所と時期によって大いに变化する。冬は黒い尾羽根を除き白。アルプス、ピレネー、スコットランドの高地、ノルウェーの比較的高い山岳地帯などに棲息。
- (64) 黒雷鳥 Birkhahn. アルプスの二二〇〇—二二〇〇メートルの場所に棲息。羽は青黒く、尾は二つに分かれている。
- (65) 山鼠 Murretier. 栗鼠科。アルプスマーモット。六箇月もの冬眠をする。夏、秋には冬眠に備えて食い溜めをし、直前には体

- 重八キロにもなる。体長五〇—八〇センチほど。毛色は褐色で、顔から背に掛けては黒っぽい。
- (66) アルプス石楠花 Alpenrose。DSB六注参照。
- (67) 龍胆 Gentiane。龍胆科龍胆の一種。青く美しい鐘型の花を咲かせる。これとアルプス石楠花と地味で小さくはあるが白い花の
- (68) エーデルヴァイス Edelweiß がアルプスの三大名花といえようか。
ウルナー・ラント Uerner Land。おやうく「ウルナー・ボーデン」Uerner Boden のこと。政治的にはウーリに属する、高原牧場に富む標高一三〇〇—一四〇〇メートルの地域。
- (69) 一人の遍歴学生 ein fahrender Schüler。「シヨール」Scholar とも。中世、大学で神学を学ぶ学生たちは、とりわけ授業が行われない夏、遍歴の旅をした。彼らはやがて聖職を得て聖職者になる可能性の高い身分だし、ラテン語を心得た学者の卵なので、途次で出逢う人人は彼らを敬い、彼らの祈祷や助言、場合によっては医師としての施術などと引き替えに、なにがしかの布施や一夜の宿りを与えてくれた。
- (70) 牡牛の部屋 Stierengaden。「牡牛」Stier + 「ガーデン」Gaden。「ガーデン」はスイスでは「部屋」Kammer のこと。
- (71) ガイセン山 Geisenberg。話の冒頭では「ガイス山」Geißberg となっている。
- (72) 霊ども Geister。ハジでは「大地の精霊ども」Erdegeister のこと。地霊。山や丘の内部に棲息する小人たち。
- (73) 乙女ダフネ die Jungfrau Daphne。ギリシア神話に登場するある河神の娘ダフネーのこと。愛神エロスの悪戯で彼女に対する狂おしい恋に落ちた太陽神アポロンに追い詰められたあげく、父の河神に祈って木に変身した。この木は月桂樹であり、月桂樹は古典ギリシア語で「タブネー」Δάφνη と云う。
- (74) ウーリアン親方 Meister Urian。悪魔の婉曲な呼び方。
- (75) バーゼル Basel。チューリヒ、ジュネーブに次いでスイス第三の都市。大型船舶が遡航できるライン河最終遡航地点にある。市域はライン河の両側にまたがる。スイス、ドイツ、フランスの接点に位する。
- (76) バーゼルにおける公会議 ein Concilium zu Basel。「バーゼル公会議」のこと。一四三二年バーゼルに招集された公会議は教皇と公会議首位説信奉派とが対立、教皇が散会を宣言(二年後公に散会宣言を撤回)したが、急進的公会議主義者は同地に残留し続けた。公会議はその後イタリアのフェラーラ、フィレンツェとその場所を移したので「バーゼル・フェラーラ・フィレンツェ公会議」とも呼ばれるが、公会議史上では第一七公会議(バーゼル公会議。一四三一—一四五)である。ただし、一四四三年ローマへ更に移転、一四四九年教皇ニコラウス五世が閉会を宣言したことに重きをおけば一四三一—一四九九年がこの公会議の会期となる。
- (77) アウグスタ Augusta。ローマ皇帝の最高の称号「アウグストゥス」(「威厳ある者」「尊厳なる者」)の女性形。皇妃。

- (78) ザクセン公ベルンハルト・フォン・ヴァイマル der Sachsen Herzog Bernhard von Weimar. ザクセン＝ヴァイマル公ベルンハルト(一六〇四―一三九)。三十年戦争時代の最も著名な将帥の一人。
- (79) 暴兵ども Soldateska. 三十年戦争ではカトリック側、プロテスタント側双方で夥しい傭兵が活躍した。彼らは、攻囲戦で都市が陥落した場合、降伏条件でそれが禁止されていれば別だが、略奪(暴行・放火・殺人もこれに当然附随する)を一定期間指揮官から許された。傭兵でなくとも同様。このように一時規律を失った陸軍兵を「暴兵ども」という。兵にしてみれば、日頃の惨めな給与・待遇のせめてもの補償だったのである。
- (80) スウェーデン王グスタフ・アードルフ Schwedenkönig Gustav Adolph. スウェーデン国王グスタフ二世アードルフ(一五九四―一六三二)。ヴァーサ朝第六代。王国最盛期の国王。「北方の獅子」との異名をも取った。三十年戦争の大立者者の一人。
- (81) 「あなたは忠実なエックルト。だれでも戒めてやるんだね」 du bist der treue Eckart, du warnest Jedermann. 不利益を蒙らないように他の者を戒めてやる人を賞讃する場合、この言い回しがいられる。
- (82) 皇帝の des Kaisers. この「王」は「ドイツ王」であり、ドイツ王は(皇帝に戴冠＝即位はしていなくても)「神聖ローマ皇帝」を名乗ったので。ちなみに、ドイツ王が対立候補と戦い、その地位を失ったことは稀ではない。
- (83) 炭を焼いた跡地 Melierstätte. 中世ヨーロッパの木炭製造法の一つはこのようだった。森の空き地に高い柱を立て、周りに乾いた細い薪を積む。それを更に、炭に焼く、充分乾燥させた丸太を組んだ山で覆う。この山全体を草や木の葉などでしっかり包み、その上に土を盛り上げてこれを密閉する。それから山の中央の柱を抜く。柱を抜いてできた孔に燃えた石炭を投げ込み、中心の薪に点火する。次いでこの通気孔を塞ぐ。密閉状態が数日(十日くらい掛かることもある)維持できれば、丸太は高温乾留されて木炭となる。こうした炭焼き法では、煉瓦など耐熱材で構築され、何度でも使用される炭焼き窯ではなく、代わりに一回限りで大量の近くの土が用いられたのである。伝説では、この土に銀鉱石がたっぷり含まれていて、炭焼きの熱で精錬されたのだ、としているわけ。
- (84) 干し草締め付け柱 Heubbaum. 干し草を荷車に満載して運ぶ際、干し草の山の上に縦長に置かれる長大な支柱。これを綱で馬車の車台に縛り付けて、干し草がずれたり、落ちたりしないようにする。
- (85) とうとう蟊蛙の椅子まで若者を追い掛けて来た verfolgt ihm bis zum Krötenstuhl. これは奇妙である。明記されていないが、蟊蛙の椅子という巖は、乙女が呪封されている例の巖で、この上に蛇、蟊蛙が出現したはずだから。城の廃墟のある城山上にあるのだろうか。
- (86) 製粉装置修理人 Mühlarzt. 水車・風車による製粉装置を修理したり、再調整したりする技術者。機械工であるばかりでなく、水車

- の場合には水力技師でもあったことだろう。
- (87) 粉挽き小斧 *Mühlbarte*。「バルテ」*Barte*は「幅の広い小斧」。ただし、「ミュールバルテ」*Mühlbarte*が具体的に何に用いる道具か不明。識者のご教示を俟つ。
- (88) 唐箕 *Beutelkasten*。製粉原料に混じっている葉や莖、石などを除去したり、脱穀した粗殻を風力選別する装置。*Windlege*とも。分離器 *Scheidkasten*。セパレーター *separator*。製粉原料より大きい、あるいは小さい異物を除く装置。
- (89) 鼓輪 *Trommel*。回転軸の周りに装着される太い円筒形のもの。脱穀機の一部か。識者のご教示を俟つ。
- (90) シュトラースブルク *Strasbourg*。フランス北東部アルザス(ドイツ語ではエルザス *Elsass, Elsb*)。地域の首邑ストラスブール。言語的にも文化的にもドイツ語圏と言えよう。かつて神聖ローマ帝国直屬都市。大同盟戦争(一六八八—一六九七)終結時レイスウェイク条約(一六九七)によってフランス領となる。
- (91) 皇帝ハインリヒ *Kaiser Heinrich*。ドイツ王(在位一〇〇二—一〇二四)・神聖ローマ皇帝(在位一〇一四—一〇二四)ハインリヒ二世(九七三—九二四)。極めて信仰心の篤い人物だった。
- (92) 司教座聖堂卿 *Chorherr*。*Kanoniker*とも。通常「司教座聖堂参事」と邦訳される。司教座聖堂の成員。中世のカトリック教会においては、けっこうな聖職禄を享受する貴人だった。ある修規——たいていはヒッポのアウグスティヌス聖者の二つの修規の一つ——に従って生活し、司祭として叙階されており、修道会加入の宣誓をしている。しかしながら修道士ではない。彼らの主務は本来聖祭の際聖堂内陣の所定の席に就いて聖務共唱の祈りを捧げることであった(今日では彼らの多くは実際の司牧を主務と考えている由)。
- (93) 王冠 *Königskrone*。ハインリヒ二世がローマ教皇から帝冠を受けるのは一〇一四年のことで、一〇一二年にはまだドイツ王だから、これは正しい。後で「帝冠」*Kaiserkrone*とあるのは正しくない。ドイツ王は事実上神聖ローマ皇帝ではあったが。千と七百年以上も存続した *hat bestanden weit über tausend und siebenhundert Jahre*。「西暦一七〇〇年以降まで」の意か。
- (94) フリウリ *Friaul*。ドイツ語フリアウルはイタリア語ではフリウ(ー) *ri Friul*。イタリア東北部の地方。現在、北はオーストリア、東はスロヴェニアに接するフリウ(ー) *リウヴェネツィア*・ジュリア特別自治州に属する。残念ながらバルマはここにはない。
- (95) 救世主の花嫁 *des Heilands Braut*。「キリストの花嫁」とも。修道女を指す。
- (96) ヴォーゲゼン山地 *Vogesengebirge*。フランス語「山地」*Montagne*・*ヴォージュ* *Massif des Vosges*。エルザス(＝アルザス)・ロートリンゲン(＝ロレーヌ)両地方にまたがり、ライン河に平行して北北東から南南西に連なる。
- (97) 聖なる父に *dem heiligen Vater*。すなわち「ローマ教皇に」*dem Heiligen Vater*。

- (100) 時計装置 Uhrwerk. これは「天文時計」astronomische Uhrである。天文時計とは、時刻の他に、天動説に基づき、地球を中心とした太陽と月の位置、月齢、黄道十二宮、その他さまざまな天文学的情報を示すもの。シュトラースブルク(「IIストラスブルク」)の時計は大聖堂の南の翼廊にあり、高さ一八メートルで、世界最大の天文時計の一つ。一五四七年クリスティアン・ヘアリーマン Christian Herlin が製作を開始、その後中断され、一五七一年から七四年に掛けて、天文学者にして数学者コンラート・ダジポ デイウス Conrad Dasypodius (一五三二—一六〇一)の設計、時計師イザーク(一五四四—一六二〇)とヨシアス(一五五二—七五)のハーブレイト兄弟 Isaac und Josias Habrecht の製作によって完成。その後次第に各部が動かなくなり、一七八八年か八九年に完全に止まった。その後一八三—一八四三年、外装はほぼそのままに中の装置が修復され、現在に至る。なお、この伝説における時計装置外装の詳細な描写、および、過去このように動いた、という伝聞は、多分ベヒシュタイン自身がシュトラースブルクに旅行した折の見聞による、と思われる。
- (101) DOMINVS LVX MEA - QVEM TIMEO ヴルガタ旧約聖書詩編二十七篇ダウイデの歌の冒頭「主は我が光り、(我が救いなり。)我誰をか恐れん」Dominus lux mea (et salutare meum) quem timebo である。原文 TIMEO とあるのは誤植か、ベヒシュタインの書き間違い。
- (102) 生流転する人間の一生の諸相 wandelnde Gestalten der Menschenalter. おそらく四つ、すなわち、幼年、青年、壮年、老年の姿であろう。老年が十五分を打ち終わると、一時間が経過したので、次いで死神が時の鐘を打つわけである。
- (103) 傍らに黙示の動物たちを侍らせた四人の福音史家 vier Evangelisten, die Thiere der Offenbarung neben sich. 四人の福音史家とその象徴的生き物は、マルコ・獅子、マタイ・人(天使)、ルカ・牡牛、ヨハネ・鷲。
- (104) チューリヒ Zürich. スイス北部にあるスイス最大の都市。市内をリマート川が貫流している。リマート川はライン河の支流アル川に注ぐ。
- (105) バーゼルの鐘が十一時を打った時——時刻はようやく十時というわけだが——Als die Basler Glocke elf schlug, war es erst um zehn Uhr. Das B 二六六参照。
- (106) 船の首部、舵權のこまを vorn im Schiff am Steuer. この船は前部の漕ぎ手が舵取りとなっているのであろう。
- (107) 我らが聖母大聖堂 unser Frauenmünster. リーフラウエン・ミュンスター Liebfrauenmünster と。フランス語ではカテドラル・ノートルダム Cathédrale Notre-Dame である。
- (108) ツィンク Zink. 十五世紀から十八世紀に使用された木製または象牙・角製の管楽器。六つの指穴とカップ状の歌口を持つ。コルネットの前身。

- (109) 金曜日にも auch am Freitag. カトリック教会はかつて精進(素食)期間(獣肉やほとんどの鳥肉を食べない期間。動物性蛋白質としては卵、魚介類やごく一部の鳥肉しか許されない)を多く設けており、金曜日は必ず精進日だった。
- (110) 輪型腸詰め Schlünker シュルンカー Schlünker* もしくはシュリユンカーは輪の形をした粗悪なソーセージ。
- (111) フィリップス・メランヒトン Philippus Melancthon. フィリップ・メランヒトン Philipp Melancthon (元「シュヴァルトエールト」Schwarzerd「黒土」の意)。「メランヒトン」Melancthon はこれと同義のギリシア語)。一四九七—一五六〇年。教会改革派の神学者、人文主義者。盟友マルティン・ルターを助けて、その神学の体系化に貢献した。
- (112) イングランドの獅子心王リチャード König Richard Löwenherz von England. リチャード一世(一一五七—九九)。プランタジネット朝第二代のイングランド王(在位一一八九—九九)。生涯の大部分を戦闘に捧げ、その勇猛さから獅子心王リチャードト五世とともにアッカー(現イスラエルのアッコ)。第三次十字軍に参加、一一九一年フランス王フィリップ二世、オーストリア公レオポルト Richard the Lionheart との添え名を得た。第三次十字軍に参加、一一九一年フランス王フィリップ二世、オーストリア公レオポルトト五世とともにアッカー(現イスラエルのアッコ)。英語名アクレ、フランス語名サン・ジャン・ダークル)を攻め、占領。しかし、この際リチャードの家臣がオーストリア公を激昂させる事件が起こり、公は帰国した。その前からリチャードと不仲になっていたフランス王も間もなく帰国。リチャードはその後単独で、エジプト・シリアを版図としたアイユーブ朝の始祖にして勇将サラフ・アッディーン率いるイスラム軍と戦ったが、一一九二年休戦条約を締結、帰国の途に就いた。しかし、帰路船が難破したので、身を賣し、陸路を辿ってイングランドへ戻ろうとした。しかしオーストリアを通過中正体を見破られ、レオポルトの捕虜となり、ドナウ河畔のデュレンシュタイン Dürrenstein に監禁された(現在廃墟が残っている同城塞にか、城山下の町にか、今は存在しない傍城にかは不明)。一一九二年十二月から翌年三月までのこと。一一九三年には神聖ローマ皇帝ハインリヒ六世に引き渡された。皇帝はリチャードをトリフェルスに収容。虜囚状態は一一九四年二月に終わる。イングランドが拘留者側に支払った身代金は総額銀十五万マルクであり、ケルン・マルク(銀三三三グラム)として計算すると、銀三四・九五トンとなり、当時のイングランド王室歳入のほぼ三倍に当たる。
- デュレンシュタイン Dürrenstein. (11)では、(11)綴られている。
- (114)(113) フリードリヒ 赤髭帝 Kaiser Friedrich der Rotbart. その赤みがかった金色の髭のため、五回に亘って遠征を行ったイタリアバルバロッサ Barbarossa (ドイツ語では 赤髭 der Rotbart) と綽名されたことから、これが通り名となったドイツ王(在位一一五二—九〇)・神聖ローマ皇帝(在位一一五五—九〇)フリードリヒ一世(一一二一—一一九〇)。シュタウフェン家の一族で元シュヴァーベン公。神聖ローマ皇帝ハインリヒ六世の父。一一八九年総司令官として第三次十字軍に参加、キリキア王国のサレフ川(現トルコ)で溺死(異説もある)。中世ドイツの民間信仰においてはバルバロッサは生き続けている。彼が眠っている場所

- は、トリフェルスだったり、キュフホイザーだったり、ウンターズベルクだったり、この伝説のようにカイザーズラウテルンだったりするが、いずれにせよ、ドイツの地に国難が迫る時には、眠りから覚めて、山を出、家臣とともに武器を取って外敵と戦う、ということになっている。一一五二—一六〇年、実際彼はカイザーズラウテルンに城を築いて拠点としたことがある。
- (115) シュバイアー Späier: 普通 Späier と綴る。上部ラインの歴史的文化的に重要な都市。ローマ人が建設したもので、ドイツ最古の都市の一つ。中世、帝国直属自由都市となり、神聖ローマ帝国の最重要都市の一つだった。現在の住民数は六万ほど。
- (116) シュヴァーベン 鉢 Schwabenschüssel. 今日現地では普通、大聖堂鉢 Domnafi と呼ばれ、稀に、大聖堂 鉢 Domschüssel と唱える。シュバイアーの皇帝大聖堂（公式名称「聖マリア聖ステパノ大聖堂」）西側正面入り口前にある。司教が新たに選ばれた際、「全ての民衆のために」ワインが満たされる。この鉢には一五八〇リットル入る。
- (117) フーター Fuder: 昔の容量単位。酒類の場合は地方によって七五〇リットルから一九五〇リットルまでいろいろ。本来は馬二頭が牽く荷車に積載できる干し草などの量。
- (118) 皇帝ハインリヒ四世 Kaiser Heinrich IV. 一〇五〇—一〇六年。神聖ローマ皇帝ハインリヒ三世の長男。ドイツ王（在位一〇五六—一〇五）。神聖ローマ皇帝（一〇八四—一一〇五）。高位聖職者の叙任権を巡り、教皇グレゴリウス七世と争い、破門され、許しを乞うた、いわゆる「叙任権闘争」と「カノッサの屈辱」で有名。その後グレゴリウス七世をローマから追い、こちらとの闘いでは勝利したが、後継の教皇たちとの対決は続き、ドイツ諸侯の叛乱も終わらず、更には長男コンラートの離反（これはコンラートの急死で終熄）、次男のハインリヒ（ハインリヒ五世として一一〇六年ドイツ王、一一一一年神聖ローマ皇帝に即位）の叛逆に遭い、ハインリヒと彼を支持するドイツ諸侯によって一一〇五年廢位され、翌一一〇六年失意の内に死去した。
- ハインリヒ二世 Heinrich II. D S B 三四参照。
- (120) (119) 破門宣告を受けた者は聖別された土で覆われてはならない einen Gebannten die geweihte erde nicht decken dürfe. カトリック教会から破門宣告を受けた者は、教会によって聖別された墓地に埋葬されることは許されなかった。
- (122) (121) 王の内陣 Königschor: 大聖堂内陣、聖餐台正面の中央通路に七人もの神聖ローマ皇帝やドイツ王、およびその配偶者が葬られた。ヴォルムス Worms. ラインラント＝プファルツ州南東部、ライン左岸にある宗教都市。「ニーベルンゲンの歌」にも登場する古都。ユダヤ人も歴史的に結びつきが深く、十二世紀半ばにユダヤ人会堂が建てられたし、ドイツ最古のユダヤ人墓地もある。現在の住民数は八万ほど。
- (124) (123) エルサレムの最高会議に an den hohen Rath zu Jerusalem. 「長老会議」（最高法院）を指しているのであらう。
- 師 Rabiner: 今日では普通「Rabbi」と表記する。ヘブライ語で「我が師」の意。ユダヤの法律学者、司牧者に対する尊称。

- (125) エッサイの根 Wurzel Jesse:「エッサイの樹」ともいう。とりわけ中世ヨーロッパに普及したキリスト教芸術の造形モチーフの一つ。たとえば、横たわっている老人（「エッサイ」の臍から樹が伸び上がって、一番上に幼子イエスがいて、といった図形。イエスは、ユダヤとイスラエルの王ダヴィデの父エッサイの後裔である、との考えに基づく。その典拠は「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。その上にエホバの霊ととまらん（後略）」（旧約聖書イザヤ書十一章一二節）である。
- (126) テイトゥス Titus. テイトゥス・フラウィウス・ウエスパシアヌス（三九一—八二）。ローマ帝国皇帝（在位七九—八二）。
 (127) 宮廷使^{カマーケク} Kammernacht. 中世、多額の献金をすることによって皇帝・王侯の保護を受けたユダヤ人のこと。
 (128) 騎士叙任式 Ritterschlag. 皇帝・王侯が剣で騎士候補者の肩を軽く打って騎士に任ずる儀式。
 (129) 城壁冠 Mauerkrone. 矢狭間のある城壁を象った冠。
 (130) ヨハネ黙示録のかのバビロンの女 die Babylonierin der Apokalypse. 緋色の獣に乗った大淫婦。新約聖書ヨハネ黙示録第十七章参照。
- (131) ブルンヒルト Brunhild. 五六七年メロヴィング朝フランク王国はアウストラシア、ネウストラシア、ブルグントの三王国に分裂。アウストラシアとネウストラシアは常に係争していたが、アウストラシア王妃ブルンヒルトとネウストラシア王妃フレデグントの代に頂点に達する。六一三年アウストラシアの貴族らがブルンヒルトに対し叛乱を起こし、彼女を捕らえて、その敵であり、また甥であるネウストラシア王クロタール二世（その長男がDSB五に登場するダゴバート一世）に引き渡した。
- (132) 悪魔と悪魔の祖母様 den Teufel mit seiner Großmutter. 「悪魔の祖母」など神学的にあり得ない存在だが、ドイツ民話・伝説の世界では珍しくない。民話での役回りはまずまず人間に親切。古代においては悪魔の配偶者だったようだ。キリスト教時代になると、結婚の秘蹟という考え方から、悪魔の妻などという存在は許されなくなつて、悪魔の祖母とされたか。十三—十五世紀にはこれと並んで「悪魔の母」des Teufels Mutter なるものも現れる。
- (133) その名を挙げるのは憚^{はば}られる物 etwas, was man nicht gerne nennt. はて、この場合は何を指しているのか、さっぱり分からない。男性器か。となたか（教示を。「その名を挙げるのは憚られる者」なら悪魔だが、この場合そうではないことは明白。
- (134) ヴェルクシュー Werschu. 昔の尺度。約三〇センチ。
- (135) 角肌のジークフリート der hornerne Siegfried. 斃した龍の血を肌塗り、（背の真ん中を除き）肌が角のように硬くなったので、この名がある。
- (136) ラインの王女 Königstochter vom Rhein. 鈴木満訳・注・解説「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』試訳（そ

- (117) (118) (119) (120) (121) (122) (123) (124) (125) (126) (127) (128) (129) (130) (131) (132) (133) (134) (135) (136) (137) (138) (139) (140) (141) (142) (143) (144) (145) (146) (147)
- の二) (武蔵大学人文学会雑誌) 第四十一巻第一号、平成二十一年七月) 所収「一九 椋鳥と小さな湯船」本文および解題参照。
 聳えている、とどうか、聳えていた steht oder stand. 結びにあるように場所を移して現存。
 十字架の付いた地球儀 Reichsapfel. 直訳「帝(王)国の林檎」。皇帝ないし国王の権力の標章。地球儀から十字架が突き出ている。
 国王グスタフ・アードルフ König Gustav Adolph. DSB二八注参照。
 山街道 Bergstraße. オーデンヴァルトの山裾を巡り上ライン低地を通る、ダルムシュタットからハイデルベルクを経てヴィー
 スロッフに及ぶ六七キロの街道。ライン右岸からいくらか距離を置いて、これとほぼ平行に走っている。右の町町はこうした通商
 路のお蔭で繁栄したが、三十年戦争ではしばしばここを通って軍隊が移動したので、戦禍に見舞われ、激甚な被害を蒙った。
 納屋の門 Scheunentore. 「広く大きな入り口」の譬えにも使われる。この門扉なら軍隊を運ぶ代わりに充分なったことであ
 る。
 ヴュルテンベルク公ウルリヒ Herzog Ulrich von Württemberg. 先には「ヴュルテンベルク伯ウルリヒ」Graf Ulrich von
 Württemberg 参照。
 皇帝の椅子 Kaiserstuhl. 王の椅子 Königstuhl の間違い。皇帝の椅子山は同じく現バーデン＝ヴュルテンベルク州でもずっと
 南、フライブルク・イム・ブライスガウの近くにある。小さい死火山で上等のワインの産地。DSB三〇参照。
 殉教者カタリーナ Märtyrin Katharina. 聖者伝説によれば、アレクサンドリアのカタリーナ聖女は、キリスト教徒を迫害した
 ローマ皇帝マクセンティウスの命により、鋭い釘を植えられた四つの鉄の車で死に至らしめられることになった。しかし、主の天
 使の一人がこの車装置を破壊した。結局剣で首を刎ねられたが、噴き出したのは血ではなくミルクだった(処刑された者が全く
 無辜である証)。当時十八歳で、その美貌のため皇帝から、自分の求愛を受け入れれば、皇后に次ぐ処遇を与えよう、と言われた由。
 騎士は聖地へ贖罪の旅を行い、der Ritter that eine Bußfahrt in das heilige Land. パレスティナへ赴き、その地で十字軍に参加し
 たのである。
 馬上槍試合 Turnier. 中世ヨーロッパで大層好まれた騎士同士公式試合。重武装して騎乗した騎士が左手に盾を構えて突進、右
 手で構えた長大な槍で、向こうからこちらの左側をやはり突進して来た相手の騎士を突く、というのが代表的ではあるが、それば
 かりでなく、他のあらゆる武器も用いられた。一騎打ちと団体戦とあり、複雑な競技規則の下で行われた。
 カスパール・フォン・フロイントベルク Kaspar von Freundsberg. 高名な傭兵隊長カスパール・フォン・フルンツベルク
 Kaspar von Frundsberg (一五〇一—一五七六) か。

- (148) カール大帝 Karl der Große. カロリング朝フランク王国第二代国王（在位七六八—八一四）・西ローマ皇帝（在位八〇〇—一四）。カロリング朝フランク王国初代国王ピピン（小ピピン）の子。フランス語ではシャルルマーニュ Charlemagne。最終的には、ブリテン諸島、イベリア半島、イタリア半島南端部を除く西ヨーロッパを支配下に置き、政治的統一を達成した。
- (149) インゲルハイム Ingelheim. インゲルハイム・アム・ライン Ingelheim am Rhein. ライラント＝プファルツ州の都市。ライン左岸にある。八世紀後半から十一世紀に至るまでここにドイツ王や神聖ローマ皇帝の居城が置かれ、宮廷が開かれ、行政の中心となった。
- (150) エアバッハ 献酌侍従一族 die Schenke von Erbach. 後のエアバッハ伯爵家。この家系はライン＝フランケン地方の古い貴族。元来は下級貴族だったが、ヴェッテルスバッハ宮中へ伯によって一二二〇年頃世襲献酌侍従に任じられた。
- (151) 幾柱もの聖人の遺体 heilige Leiber. 中世のカトリック教会では、キリストに関わる品（磔に架けられる前に纏っていた着衣、十字架の破片、茨の冠の棘、等等）の他、諸聖人の遺骸（全体やその一部）が奉安されていると、大祭日には夥しい巡礼者、参詣人が訪れた。従って、新たに建立した教会を崇敬の対象にするためには、聖遺物獲得が迅速・有効な手段だったわけである。
- (152) 山街道 Bergstraße. DSB四九注参照。
- (153) ショック Schock. 数の単位で、六〇の単位。
- (154) タッシロ Thassilo. Thassiloとも綴る。アギロフイニング朝最後のバイエルン公タッシロ三世（七四一—九六？）。カール大帝の従弟。フランク王国年代記の記事によれば、七五七年以来フランク王国に忠誠義務があった、というタッシロは、七六三年アクイタニア遠征に際しフランク軍に従軍することを拒否、従って戦列離脱の罪を犯した由（最近の研究によれば、これは疑わしいようだ）。タッシロは依然バイエルン公のままだったが、七八七年政治的諸理由からカールによって封臣の地位に引き下げられ、七八八年インゲルハイムなるカールの宮廷における封建法裁判により七六三年の諸件とアヴァール族との同盟の廉で死刑の判決を受け、次いで恩赦され、最終的には遙かノルマンディーのジュミエージュ大修道院に追放された。七九四年タッシロは修道院からフランクフルトの王国会議に引き出され、そこで自らも子孫もバイエルンを究極的に放棄する旨、公に宣言しなければならなかった。実は没年は確定されてはいない。生涯の最後の数年を一介の修道士としてロルシュ修道院で過ごしたということはあり得る。
- (155) 山街道 Bergstraße. DSB三九注参照。DSB五五にも名が出る。
- (156) 惑わせ火 Irwisch. 「イルリヒト」Irlichが一般的。地面から立ちのぼる、すぐ消えてしまふか、数秒は続く、小さな青みがかった、あるいは黄赤色がかった炎を上げて燃える光学現象。とりわけ晩秋、静かな夜に沼沢地で見られる。
- (157) 待降節 Advent. 降誕祭を迎えるための四週間の準備期間。四回の日曜日を含み、その第一日曜日から始まる。

(158)

火男フナオトども Feuerträger. 単数形 Feuerträger. 「燃える男」 feuriger Mann とも。火男および類似の名称の登場形態はドイツ語圏の伝承で周知の存在。これは(煉獄で)生前犯した罪業を償っている彷徨さまよえる死者とされる。俗信によれば、煉獄ルートは浄罪界では、火で罪を浄める、とされるから、何らかの理由でたまたまこの世に出て来るそうした亡霊がつかつかと燃え熾さかっていても当然なわけ。このような罰を受けるのはとりわけ、土地の境界標石を動かした罪、とされることが多い。鈴木満訳・注・解説「ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ昔話集』試訳(その一)」(武蔵大学人文学会雑誌)第四十巻第四号、平成二十一(三月)所収「六悪魔がおつ放された」「さあ、ことだ」、あるいは、悪魔が火、酒を発明した話(本文および注参照。専門書としてはヨローパ文化学科鳴内博愛教授の「労作『燃える人』伝承と西洋の死生観(言叢社、二〇一一)がある。これは本邦においてこの伝説形態を徹底的に紹介・解明した嚆矢といふべき研究文献である。

(159)

荒れ狂う獵師 der wilde Jäger. DSB 一三参照。

(160)

くしゃみ Niesen. だれかが身近でくしゃみをした場合、それが見知らぬ人であっても、思いやり(＝厄払い)のことは掛ける習わしが欧米にはある。ドイツ語圏では「お大事に」Gesundheit(これは英語圏やフランス語圏でも用いられることがある)、英語圏では「神の祝福を」God bless you といった具合。言われた人間は感謝の言葉を返すのが礼儀である。ちなみに日本でもかつては、くしゃみをした当人、ないし身近の者が「くさま」「くっさま」とも。「糞食め」＝「糞喰らえ」か)と唱えて厄払いをした。女の水の精 Nixe. 「ヴァッサーフラウ」Wasserfrau とも。ドイツ語圏の河川や湖、池に棲む、多く長い髪をした美しい女である。人間の若い男を水中に引き込んだりするものもあるし、なせ水性だから気紛れ、かつ奔放ではあるが、男の水の精とは違ってどこか憎めない存在。陸に上がって人間の青年などと踊りに興きんじることもあるが、その場合その裳裾は常に水で濡れている。男性形「ニクス」Nix = 「ヴァッサーマン」Wassermann はこれに反して醜く、肌はぬらぬらして緑色で、人間の女性を攫さらい、これに児を産ませ、更にその児を喰うなどする。

(161)

結びに一言。

お読みくださって忝かたじけなう存じます。今後数年に亘り、「人文学会雑誌」に分載させて戴たまこう、と思っております。本当は、年来ご知遇を忝かたじけなうした古橋さんの記念号にめでたくその第一回を収録、はなげ臚はなげとやらの真似事にしたかったのですが、「古橋信孝教授記念号」は第三号ですので、順序はいかんともし難く、こちらの第一・二号合併号に試訳

（その一）を寄稿いたしました。幸いにご愛顧戴けますなら、続きの試訳（その二）を第三号では是非どうぞ。

末筆ながら、人文学部ヨーロッパ文化学科踊共二教授——ちなみに、踊さんのご著書『図説スイスの歴史』（河出書房新社、二〇一一）には拙訳の冒頭、スイスのところで随分お世話になりました——に深く御礼申し上げます。ルートヴィヒ・ベヒシュタインの伝説集を訳してみたらどうか、とお勧めくださったのが、昨年、二〇一一（平成二十三）年の十二月四日、教授ご企画の「根津記念館」探訪にお誘いくださった帰りの貸切バスの中。当方、実は、ベヒシュタイン『ドイツ昔話集』L. Bechstein: *Deutsches Märchenbuch* (1857) の試訳・注・解題は、二〇〇九（平成二十一）年三月から二〇一〇（平成二十二）年十二月に掛けての「人文学会雑誌」（第四十巻第四号）第四十二巻第二号）六回分載で完結していたのですが、大部な伝説集までは、と諦めていたところでした。このご慥で勇気づけられ、すぐにテキストを発注、それから三週間ほど後、大晦日近くにテキスト（初版リプリント版。いわゆる髭文字Ⅱ亀の甲文字、すなわちフラクトゥーアFraktur。その上、現代ドイツ語とは異なる綴り、および誤植散見）が届いた時、これで翻訳ができる、とわくわくいたしました。もともと、雨降り風間とやらを勘考せずともよい居職の身ながら、相応に怠けるとしたら、訳・注作業と活字化が一応終わるには五、六年掛かりませうか。この十月に七十三歳となりますので、これに五、六年を加算しますと、最後まで頭と体が保つかどうか。とまれ「いざさらば雪見にころぶ所まで」となむ。

二〇一二（平成二十四）年長月下浣

鈴木 満 謹識

